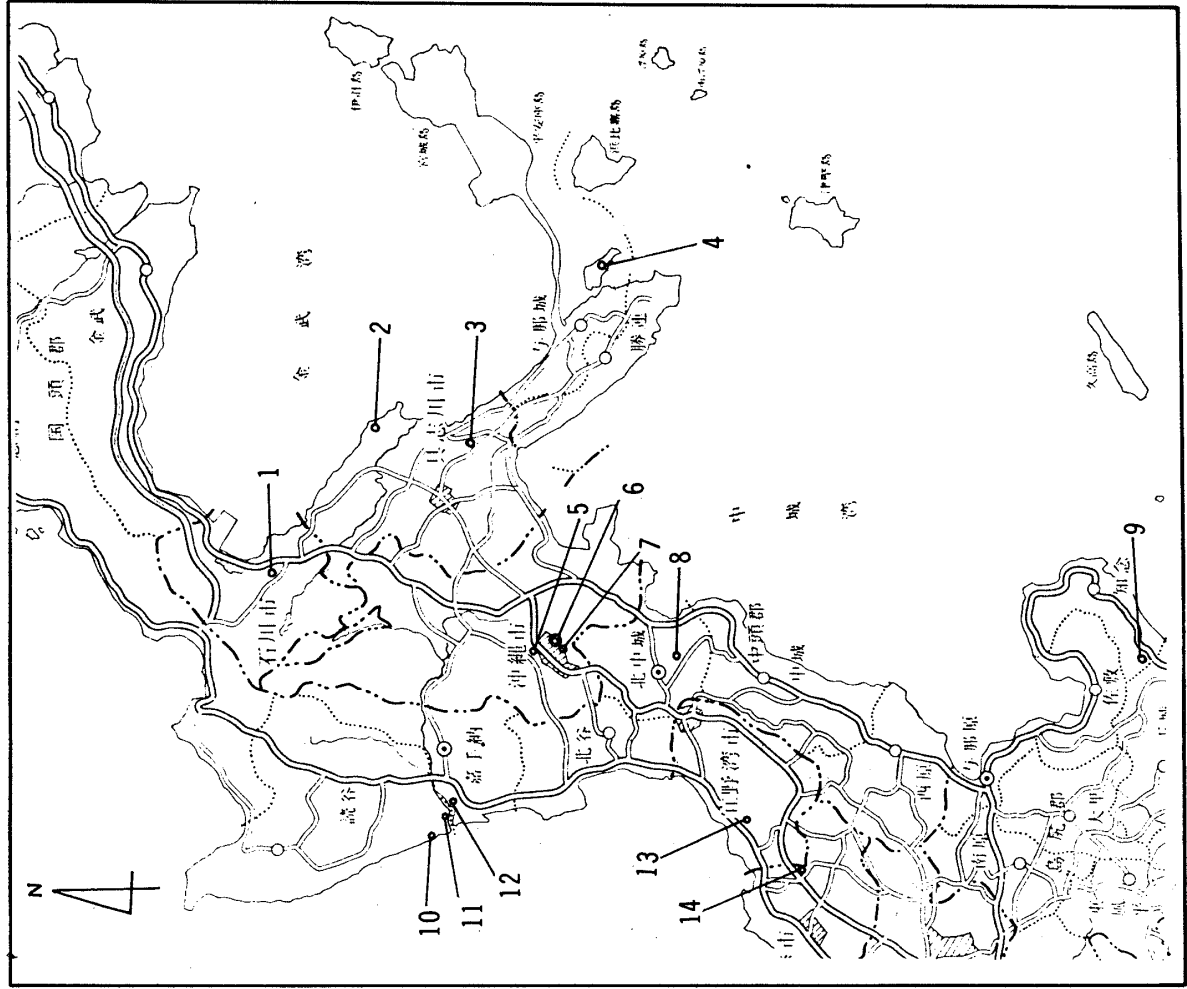
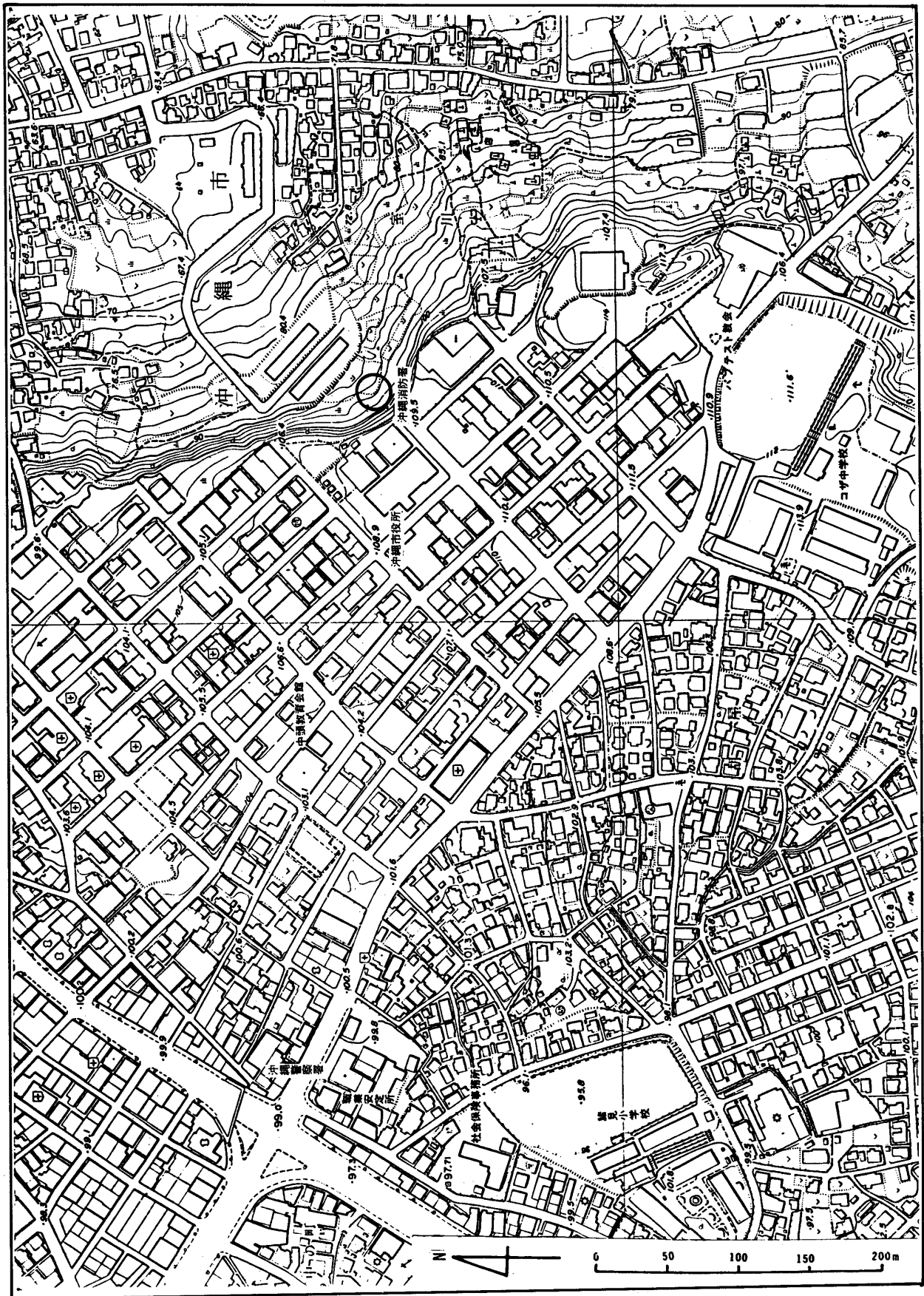


- | | |
|----------------|--------------|
| 1. 伊波貝塚 | 8. 萩堂貝塚 |
| 2. 隅原遺跡 | 9. 熱田原貝塚 |
| 3. 地荒原貝塚 | 10. 渡具知木綿原遺跡 |
| 4. ヤブチ洞穴遺跡 | 11. 渡具知東原遺跡 |
| 5. 八重島貝塚 | 12. 嘉手納貝塚 |
| 6. 室川貝塚 | 13. 大山貝塚 |
| 7. 仲宗根貝塚 | 14. 浦添貝塚 |



第1図 室川貝塚の位置



第2図 遺跡附近の地形 (○印は室川貝塚)

凡 例

1. 本報告は1977年、室川貝塚において実施した第4次発掘調査のうち、中央区に関する調査の概要である。
2. 報告書の作成は序文記載の3名が中心となったが、実測図のトレースやその他の作業で下記諸君の協力を得た。
島袋洋・大城剛・松川章・上地千賀子・
神谷朝子・島 弘・島袋聖子
3. 写真の撮影にあたっては上地正勝氏のご指導を得た。記して感謝申し上げる次第である。
4. 本文の編年は84頁記載の編年表に従った。

正 誤 表

ページ	欄	行	誤	正
10	右	33	対象	対称
23	右	23	第4層で3点、排水溝で2点	第4層で4点、排水溝で1点
28	右	3	21センチの	21センチで
28	右	30	押し引きが	押し引き文が
33	左	3	表面のには	表面には
33	右	15	第2様帯	第2文様帯
39	右	24	肥厚外面が	肥厚部外面が
45	左	18	横捺刻文が	横捺刻文か
45	右	6	3の一例は	3の1例は
52	左	36	分かつことができ、	分かつことができ
60	右	3	施されてている	施されている
72	左	15	細い	細かい
85	右	6	何故なれば	何故ならば
86	右	8	一応終了とするが	一応終了するが
86	右	12	惜しなかつた	惜しまれなかつた

⑨ 上記以外に本文中の剥は剝に、壺は壺に、褐は褐に訂正願います。

室川貝塚中央区発掘調査概報

I はじめに

今回は室川貝塚における第4次発掘調査の未報告の分について報告する。第4次調査はTトレンチの8・9区および16・17区、本遺跡東南部の試掘区(T.P.区)、そして中央区の4箇所で行った。そのうち中央区を除いてはすでに報告済みである。

第1・2次発掘調査において問題となった下部混貝層を被う焼土層が住居床面などのような遺構と関係があるのかどうか、第3次調査においてトレンチを東方のT区に拡げて追跡した結果、遺構と全く関係のないことが分かったので、一時保留していたSトレンチの焼土層以下の発掘調査に着手した(註1)。その結果、Sトレンチの9区で伊波式が荻堂式の下方向より出土する状況がみられた。

従来の編年では荻堂式が伊波式に先行すると考えられていただけに、これは大きな問題であり、少なからず衝撃を受けた。S-9区における両型式の関係が事実かどうかを確かめるためには、発掘区を拡張して、S-9区以外の場所においても同様の出土状況を確認する必要がある。そのため室川貝塚における第4次調査は避けられないものとなった。S-9区の状況から上記目的の調査を行うとすれば、Sトレンチに西接する地域が有望であろうと考えられた。つまり、中央区へトレンチを拡げる必要が生じたわけである。

第4次発掘調査は1977年8月1日から同月

23日まで約3週間にわたって実施された。中央区の調査は時間の都合で、焼土層を露出した段階で中止した。今回の報告は焼土層以上の遺物が主体となるが、排水溝の部分では、下部貝層の露出した部分があり、遺物が数点採集されているので、これも併せて報告する。

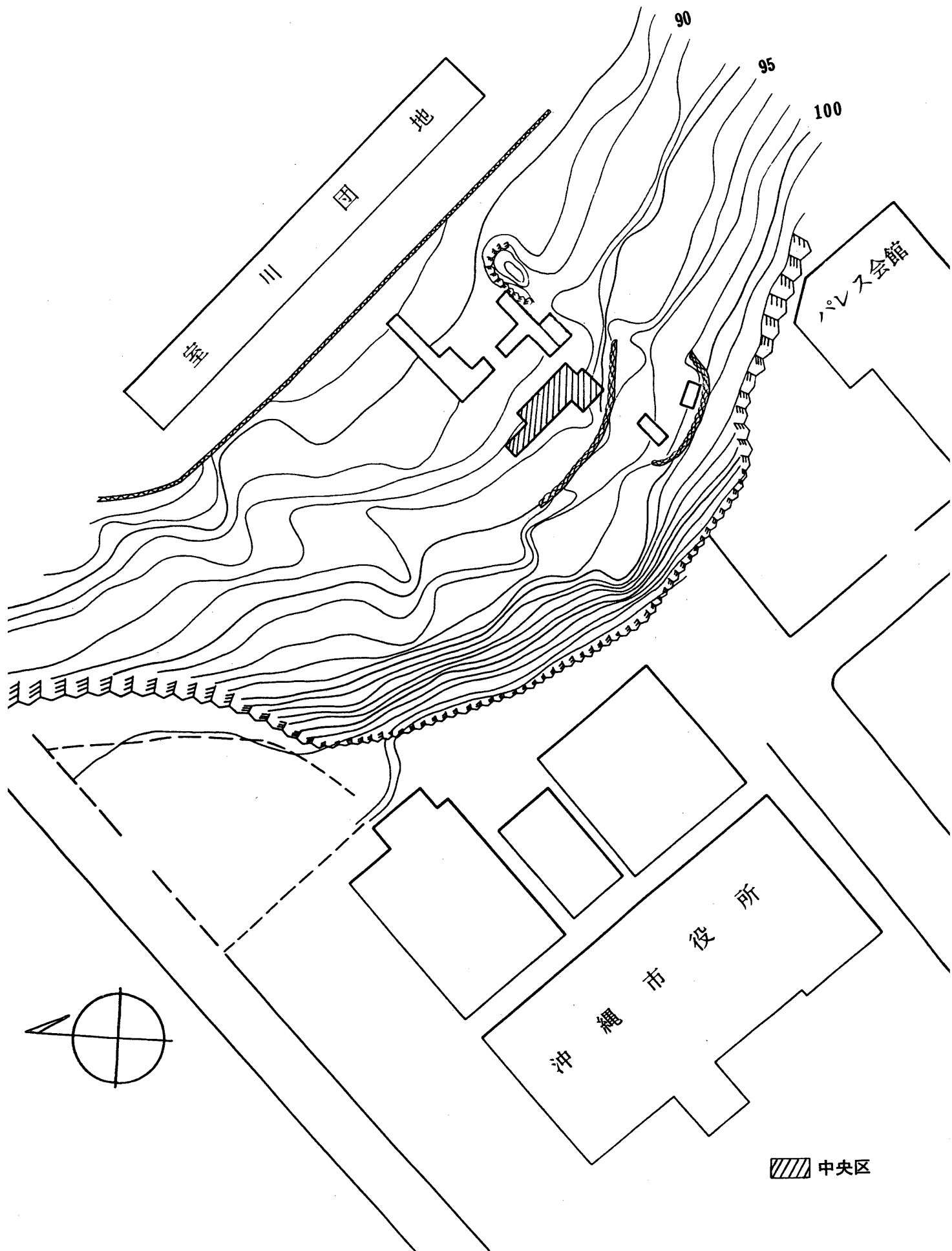
調査を行うにあたり、沖縄市教育委員会の山城清輝委員長をはじめ、幸地清裕課長、新城長助係長、仲本朝彦、嘉手川繁秀、西銘淳の諸氏には大変お世話になった。照屋正雄室川幼稚園長は同幼稚園を快く宿舎に提供され、また、同幼稚園の先生方からも物心両面にわたるご援助を頂いた。お蔭で順調に調査を行うことができた。厚く御礼を申し上げたい。

また、報告書をまとめるにあたり、石器や自然礫の石質については琉球大学の木崎甲子郎教授に、また、獣骨の一部については横浜国大の長谷川善和教授にみていただいた。記して感謝申上げる次第である。

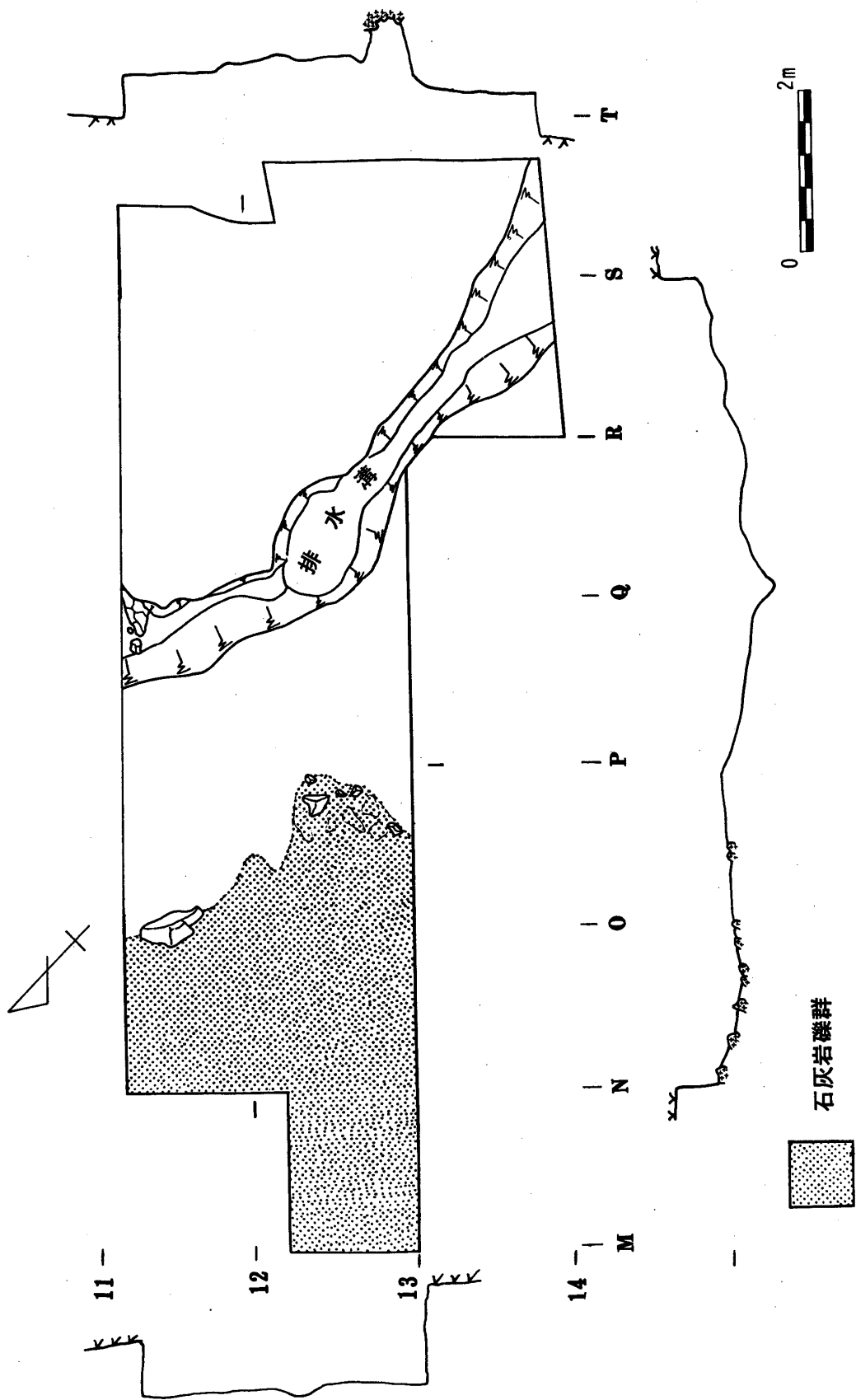
なお、報告書の執筆ならびに実測図の作成は下記のように分担した。

記

1. 骨器	奥間	尚
2. 石器	金城	亀信
3. 土器	後仲筋	正徳
	奥間	尚
	金城	亀信



第3図 室川貝塚地形図



第4図 中央区平面図（石灰岩礫の分布状態と排水溝の方向を示す）

Ⅱ 調査経過

伊波・萩堂両型式の前後関係を確認するため、第4次調査において調査区域をSトレンチの西方に拡張することになったが、その場合、最も有望視された箇所は前にも述べたようにS-9区に西接する地域であった。しかし、直ぐ同地域を調査するより、周辺から攻めた方がいろいろの点で好ましいと考えられたので、中央区のやや南部、すなわちM・N・O・P-12区(第3図)の東西方向のトレンチから開始した。

この地区は表土層以下第Ⅲ層まで攪乱を受けており、1週間程度で終わった。そこで北側のM・N・O・P-11区のトレンチに移った

が、ここも上部の2層は攪乱を受けていた。未攪乱の第Ⅳ層は薄く、しばらくして焼土層に達した。この地区の調査はこの焼土面で中止し、次にR・S-12・13区に移ったが、時間の関係上、この地区も一部焼土面が現われたところで終わった。この地区は翌年の第5次調査で完了した。

第5次調査は遺跡の範囲確認を目的として沖縄市教育委員会が行い、新に数か所で遺物包含層を確認(註2)した。今回の報告は序文にも記したようにM・N・O・P・Q区が主であるが、一部R・S区の遺物も併せて報告する。

Ⅲ 層 序

層序は地区によって若干異なる。しかし、中央区には焼土層がほぼ全面に広がっており、その上を赤黒の土層が被っている。この両層は一つの基準となるものである。しかし、赤黒の土層の上部は先述の如く地区により若干相違がみられた。

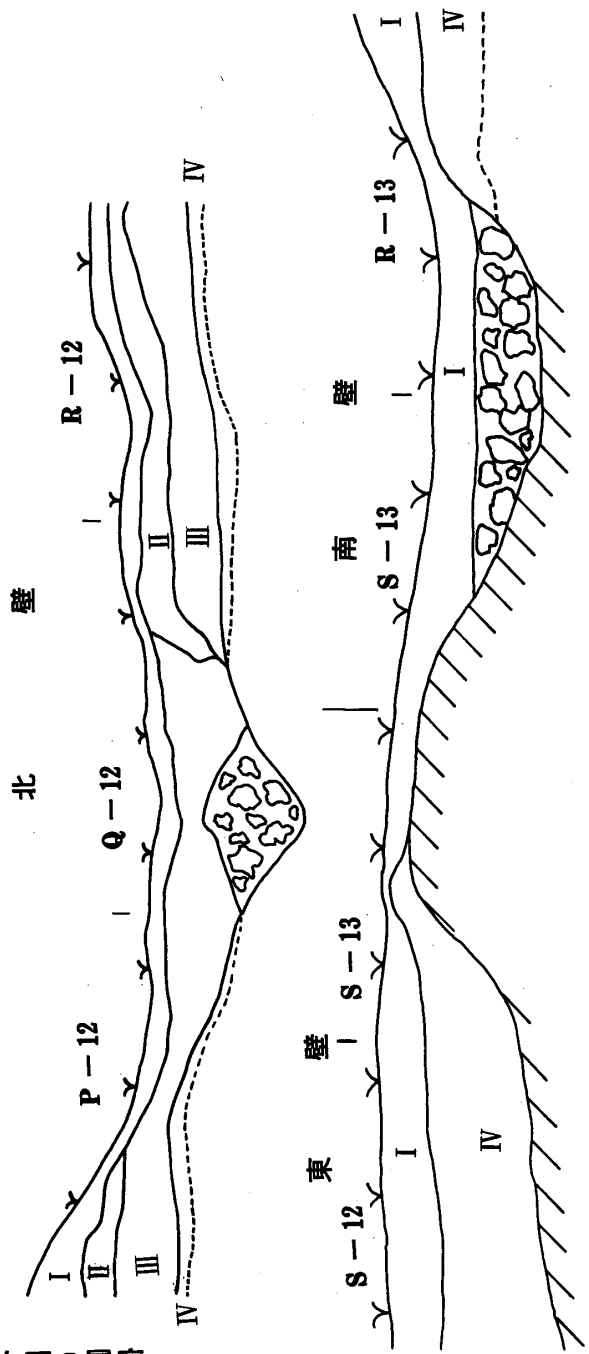
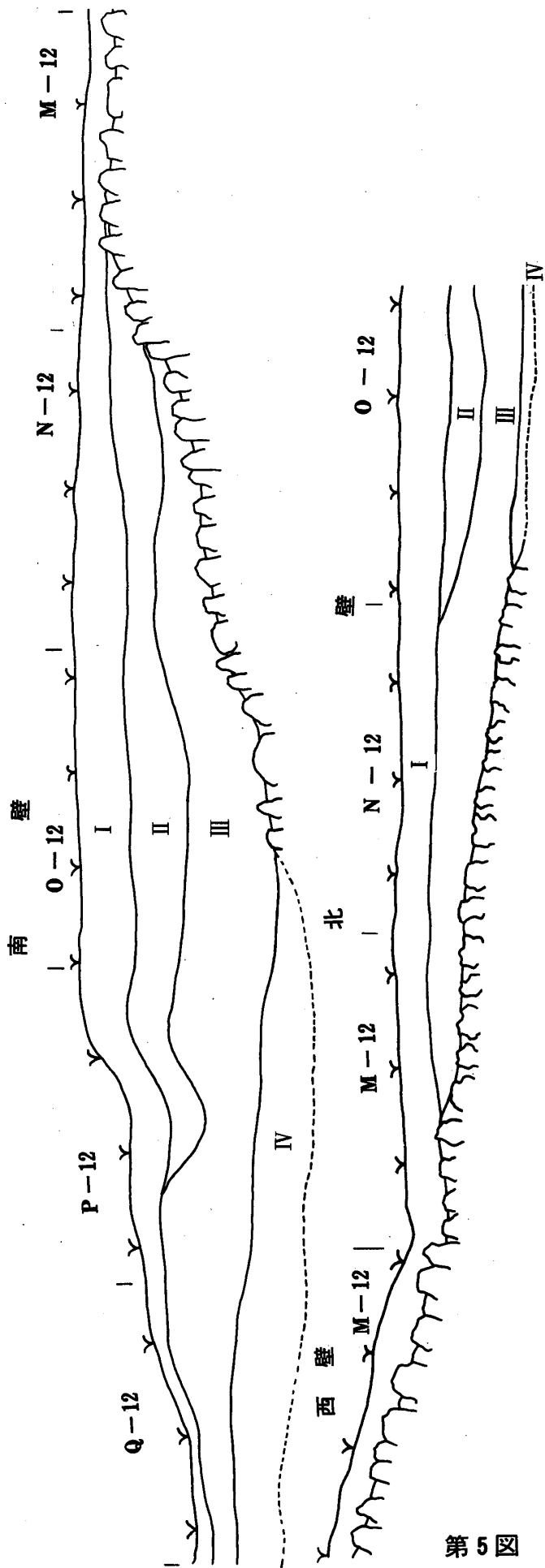
まず、M・N・O・P・Qの11・12区についてみると、第Ⅰ層は耕土よりなり、中央区全体に広がっている。厚さは10~30cmで、先史遺物のほか後世の遺物も見受けられる。

第Ⅱ層は赤黒の土層で、第Ⅳ層と同じ性質の土層である。南壁側ではN~P区にみられ、北壁面ではO・Pの2区に及んでいる。この層からは土器・石器・骨器などが得られ、最初プライマリーな層かと考えられたが、一部にアフリカマイマイやガラスの破片なども見受けられ、調査を進めていくうち下方の第Ⅲ

層も攪乱を受けていることが分り、第Ⅱ層も攪乱層であることがはっきりした。

中央区には台地上から流れてくる水を下方へ流すための排水溝(第4図)が南北の方向に設けられている。調査の結果、この溝は戦後設けられたことが分った。コカ・コーラの瓶や空罐などが下部に埋っていたからである。おそらくこの溝を掘った時の土が、近くのN~Q区に撒かれたものであろう。この地区の第Ⅱ層は排水溝の箇所にあった第Ⅳ層の土とみることができる。

第Ⅲ層は黄褐色の混礫土層で、土の色は第Ⅰ層と同じであるが、石灰岩の小礫を多量含む。石灰岩礫は西のM側に多く、東のQ側へ減少し、粒も小さくなる。この層からは土器などの先史遺物も得られるが、須恵器や陶磁器など後世の遺物も10数点検出され、また一



- 第I層 黄褐色混礫土層
- 第II層 暗褐色土層
- 第III層 黄褐色混礫土層
- 第IV層 暗褐色土層
- 第V層 燒土



第5図 中央区の層序

部に島尻層（青灰色粘土）を含むことから、この層も攪乱層である。

この層は南壁側ではM区からR区まで延び、北壁側では西はM区から東はR区に及んでいる。同層の下位に第IV層がくるが、M・N区には第IV層がなく不定形の石灰岩小礫層になる。この石灰岩礫は南壁側ではM区からO区へ傾斜し、同層の下は黄褐色土の地山となる。人為的なものかどうか確かめることはできなかったが、礫の間から須恵器の破片を1片得た。

第IV層は貝を含まない赤黒の土層で、中央区全体に広がっている。未攪乱層で、遺跡の西側で薄く、東側へ厚さを増す。

第V層は先述のように焼土層で、今回は同層上面で調査を中止した。

次にR・Sの11～13区であるが、表土層は他の地区と同じである。しかし、N～Q区にみられた第II層はこの地区には及ばず、第III層の末端が西壁側にわずかに見受けられただけで、第I層下部はすぐ第IV層に続くのであるが、南壁側では排水溝設置のため採土作業によって遺物層は除去され、排水溝の下部は赤土の地山へと続く。またS-13区の東南隅では地山が大きく盛上り、第5図のように第I層の下は直ぐ地山となる。

S-11・12・13区の東壁をみると表土層の下は赤黒の第IV層となっている。厚いところは40cm前後あり、東南隅の地山のところで切れている。この地区は、前述のように第I層の下は地山となっている。

IV 出土遺物

本地区の出土遺物は自然遺物と人工遺物からなる。今回の調査は前述のように焼土層より上の層が対象となり、貝層の存在しないところである。そのためか食糧残滓等の遺物は全般的に少なかった。特に貝類は未攪乱の第IV層では、ごく一部に少量見受けられただけであった。しかし、貝類に比べると獣魚骨等の遺物は若干多かった。後者の中にはイノシシ、イヌ、ジュゴンなどの獣骨、ブダイ、フェフキダイ、ベラ、ハリセンボンなどの魚骨も含まれ、そのほか鳥骨なども見受けられたが、検出された自然遺物は未だ専門家の同定を得ていないので、今回は保留し、次の機会に正式に報告したい。

人工遺物は先史時代のものと後世のものに大別される。後世のものは類須恵器や中国製の陶磁器のように原史時代に属するものと、

コカ・コーラの瓶や空罐などのように戦後のものがあり、出土量は後者がやや多かったが、全体としても数10点程度のものではあった。後世の遺物は先述のように第I～III層に含まれ、第IV層での出土はなかった。

第IV層は未攪乱の土層で先史遺物を含む。人工品は骨器・石器・土器の3種だけで、貝器は未発見であった。本文では前記の順に紹介していくことにする。

A) 骨製品

本トレンチ出土の骨製品は18点で、機能的には利器などの実用具と装身具類に大別される。前者は5点で、後者は13点の出土であった。本文では実用品から記述していくことにする。

第6図1はイノシシの尺骨を利用した骨錐

で先端を欠くが、完形に近い資料である。尖端の加工部は全面研磨が加えられ、製作の工程は明らかではないが、一部に鋭利な刃物で削った痕も見受けられることから、研磨の前に削りの工程もあったかと思われる。擦痕様の使用痕は見受けられない。現存長11.5センチ、重量31.00g、R-12第4層の出土。

同図2は頭部を欠くが、骨針の尖端と考えられるものである。両側面には横位の擦痕がわずかに認められる。使用痕であろう。現存長3.5センチ、横断面は楕円形で、厚さは約4ミリ、重量0.60g、Q-12第4層の出土。

同図3はイノシシの長管骨の破片を利用したポイントで、尖端は入念に研磨され鋭利であるが、他は打欠のまま放置され、一見粗製の感を抱せる。尖端はわずかに欠け、ポイントの側縁では斜位の擦痕も、わずかながら見受けられる。全体に扁平で、ポイント以外の部分は粗造であるが、破損品というより、これで完形の可能性もあり、その場合、鏃のような用途が考えられる。現存長3.6センチ、重量1.27g、P-11第4層の出土。

同図4は先端を欠くが、骨錐と考えられるもので、ほぼ完形に近い。加工は先端の部分に限られ、研磨が施され、横位の擦痕もわずかながら認められる。現存長7.6センチ、重量3.39g、O-12第2層の出土。

同図5はイノシシの長管骨を利用したとみられる尖頭器で、鋭い尖端を残す。加工はポイントの部分は入念で研磨が施され、他は打ち欠きのまま放置されているが、全体に手馴れ様の摩耗痕が著しい。先端研磨部の両側縁には刻みが設けられ、同部の表面には、無数の斜め、横方向の擦痕が見受けられる。頭部に新しい破損面が見られるが、あるいはこれで完形に近い形状かとも考えられる。刺突具の1種であろうか。同図3に類似する製品

である。現存長約5センチ、重量2.43g、O-12第2層の出土。

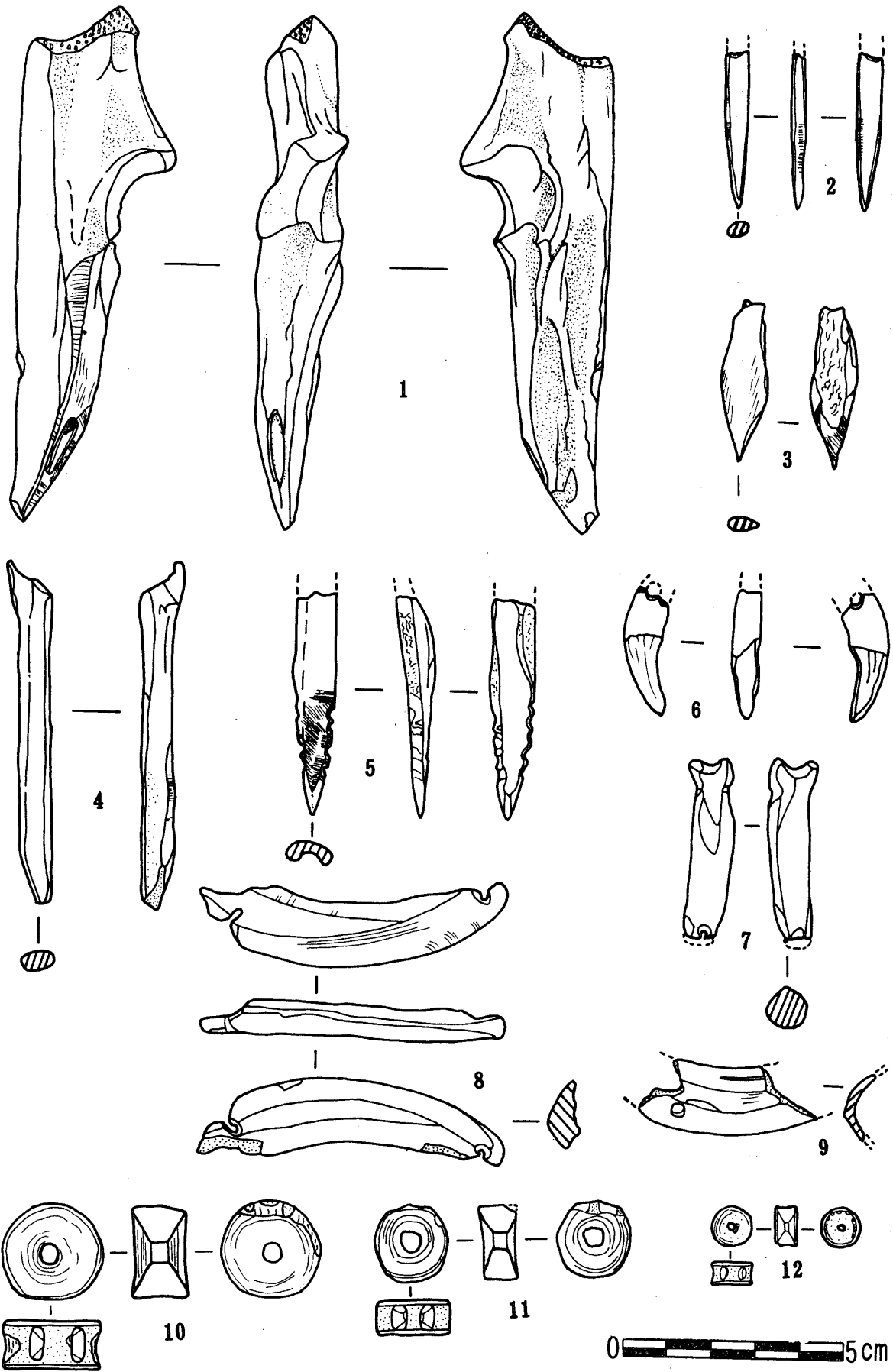
以上は利器に属する資料であるが、次に装身具に分類されるものについて記す。

同図6は犬の犬歯を利用したもので、破損品である。歯根の破損面中央に孔の下端を認めることができ、孔は両面より穿たれている。孔径は不明。ペンダントであろう。現存長2.9センチ、重量1.45g、P-12第4層の出土。

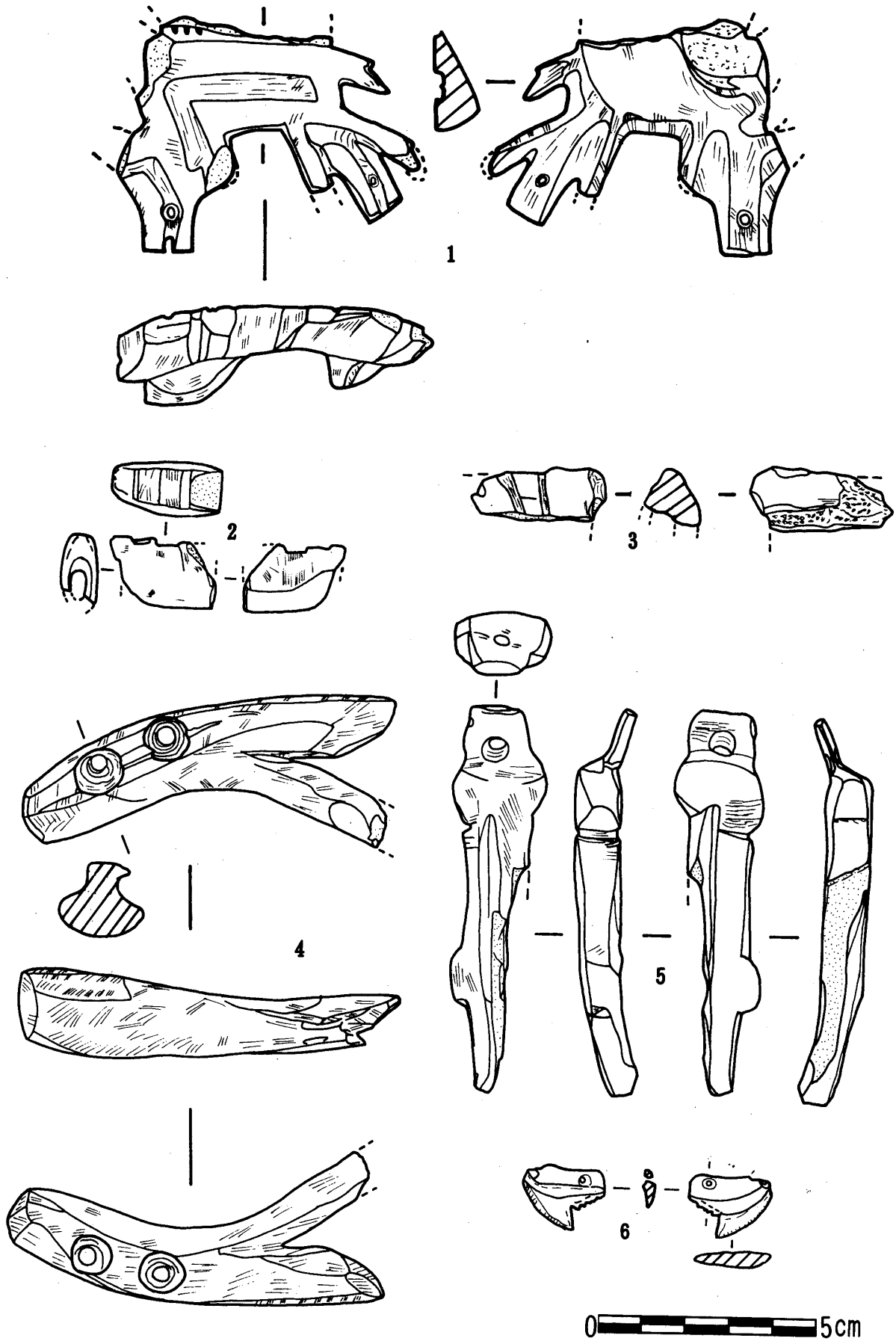
同図7は一端(図の下端)は破損しているが、完形に近い資料とみられるものである。上端には上向きの抉りを設け、その部分は凹面を形成し、それに接する前面上部は研磨により平坦面をつくる。また、両側面の上端に近い部分にも浅い抉りが設けられ、一部裏面におよぶ。下端破損面では前後に貫通する孔が設けられ、孔径は表裏面では2~3ミリ、中央で約1.5ミリである。全面手馴れ様の滑沢が認められる。この製品は利器や器具と考え難いところから、装身具の一種かと考えている。火熱を受け、全体的に黒ずんでいる。現存長4.1センチ、重量5.35g、O-12表土層よりの出土。

第1表 骨牙製品出土表

種類 層序	骨 錐	骨 針	尖 頭 器	牙 製 品	サ メ の 歯 製 品	垂 (ペン ダ ント 飾)	獸 形 装 身 具	ビ ド	計
排水溝									
I						1			1
II	1		1	2			1		5
III							1		1
IV	1	1	1		1	1	1	3	9
V						1			1
VI									
VII						1			1
計	2	1	2	2	1	4	3	3	18



第6圖 骨 牙 製 品



第7圖 骨製品

同図8・9はイノシシの牙を利用した製品である。8は破損品で背面を欠く。先端に1孔を設け、基部にも1孔認められる。左端の孔は表面で約4ミリ、内面で2ミリ、右端の孔は表面で3ミリ、内面で約2ミリである。両孔とも裏面に貫通していたものと思われるが、裏面を欠くために確認ができない。現存長7センチ、重量5.24g、0-12第2層の出土。

同図9も歯冠に孔を穿った製品で、破損品である。孔は表面では約4ミリ、内面では約2ミリ。同図左端破損面にも孔の一部が残っており、接近して2孔穿ったことが分る。大きさ、形状、加工の詳細は不明。現存長3.9センチ、重さ1.51g、0-11第2層の出土。

同図10~12の3点はサメの脊椎骨を利用した製品で、臼状凹部の中央にそれぞれ1孔を設けたものである。10・12は完形、11は側面の一部を欠く。10は直径2.1センチ、高さ約1.2センチ、中央の孔径は約4ミリ、0-11第4層の出土。11は直径約1.6センチ、高さ約7ミリ、中央の孔径は約5ミリ、S-11第4層の出土。12は3例のうち最も小型で、直径約8ミリ、高さ約5ミリ、中央の孔径は約2ミリ、R-12第4層の出土である。

第7図1はいわゆる獣形装身具の一種とみられるもので、表面(左図)の左端、上端、右下の一部を欠く。したがってサイズや全形を窺うことはできない。加工は表面と側面、それに裏面の一部に認められる。ということは裏面は大部分が自然面ということである。肩胛骨か骨盤のような扁平骨を利用している。正面下端の溝の部分には2孔を設け、主として表面から裏面へ穿っている。2孔とも表面では下向きの紐づれ痕、裏面左側のものは定かでないが、右側の孔も同様の紐づれ痕を残している。また、裏面では上下に貫通する小

孔(径約1.5ミリ)が1か所認められる。表面の刻線の彫り方は室川例の中では最も雑で、彫ったあとの凹線内には削痕が残っている。また、左側の孔の上方の刻線内部はわずかではあるが、赤味を帯びており、塗朱の可能性もあり、注意を要する。本標品はR-11第4層の出土である。

同図2も前記製品と同種の機能をもつ製品とみられる。長管骨の扁平な部分を利用したもので、破損は著しく、全形を知り得ない。図の上端には前後に走る凹線を刻む。凹線の幅は約5ミリである。0-12第2層の出土。

同図3の右端は研磨面を残し、上面から裏面にかけて2条の浅溝を施す。同図の下端および左端は破損面だが、上面も若干傷痕がある。この標品も大破して全形を知ることができない。しかし、獣形装身具の一種とみて差支えない。0-11第3層の出土。

同図4は尾部の一端を欠くが、完形に近い資料である。全面入念な研磨が施され、滑沢を有する。また一部には図のような擦痕も見受けられるが、手で触ってザラザラしたような粗さは感じられない。やや大きな孔が前後に2個穿たれている。穿孔は両面からなされている。前記標品のような刻線は施されていないが、これも獣形装身具の一種であろう。ジュゴンの肋骨を利用した製品である。R-13を横切る排水溝の地山直上に、わずかに残った混貝土層(第7層)からの出土であり、本遺跡最古の資料である。

同図5もジュゴンの肋骨を利用したとみられる製品で、側縁の一部を欠く。しかし、もしこの製品の左右が対象であれば欠損部の復元は可能である。上部は前後から加工して扁平にし、その中央に1孔を設ける。孔は前後から穿たれ、径は約4ミリである。以下はやや厚くなるが、横断面は方形を呈し、表裏

面ともやや幅のある平坦面をつくる。表裏面の中央には葉研彫りによる刻線が、縦にそれぞれ1条刻まれている。上方には肩が設けられ、中央よりやや下の方には瘤状突起が1個認められる。下端の先端は丸みを帯び鋭さは感じられない。以上の形状から利器というより装身具の一種と考えられるものである。Q-12第5層の出土品である。

同図6はイタチザメの歯を加工したもので歯根部に2孔穿っているが、そのうちの1つは破損面にあり、辛うじて確認できる程度で

ある。孔は両面から穿たれている。歯根部は摩耗しているが、鋸歯は未だ鋭さを残している。P-12第4層の出土。

B) 石器および石製品

本地区では石器の他にタブレット状の製品も1点得られた。後者を石製品として取り扱うことにする。石器は破片も含め67点の出土であった。本項では石製品から紹介することにする。なお、自然礫の出土状況は第2表の通りである。

第2表 自然礫出土状況 (石灰岩を除く)

石質 層序	砂岩 (嘉陽層)	砂質千枚岩 (名護層)	黒色 千枚岩	輝 緑 岩	千枚岩質輝緑凝灰岩	角 閃 岩	閃 緑 岩	ヒ ン 岩	チ ャ ー ト	砂岩 (島尻層)	シ ル ト 岩	石 英	軽 石	計
排水溝	$\frac{11}{960}$	$\frac{18}{670}$	$\frac{3}{20}$		$\frac{3}{120}$	$\frac{1}{50}$	$\frac{2}{675}$			$\frac{35}{5150}$	$\frac{13}{1700}$			$\frac{86}{9345}$
第I層	$\frac{14}{1090}$	$\frac{19}{440}$	$\frac{1}{5}$	$\frac{2}{60}$	$\frac{4}{50}$		$\frac{1}{85}$	$\frac{1}{20}$		$\frac{14}{715}$		$\frac{1}{5}$		$\frac{57}{2470}$
II	$\frac{17}{1330}$	$\frac{31}{430}$	$\frac{5}{285}$	$\frac{1}{160}$	$\frac{5}{85}$			$\frac{2}{58}$		$\frac{14}{700}$		$\frac{1}{140}$	$\frac{1}{4}$	$\frac{77}{3192}$
III	$\frac{7}{210}$	$\frac{10}{170}$	$\frac{1}{75}$		$\frac{1}{70}$				$\frac{1}{1.35}$	$\frac{16}{1180}$		$\frac{2}{280}$		$\frac{38}{1986.35}$
IV	$\frac{42}{1640}$	$\frac{74}{1450}$	$\frac{5}{68}$	$\frac{3}{390}$	$\frac{6}{180}$	$\frac{1}{35}$				$\frac{62}{4000}$			$\frac{1}{20}$	$\frac{194}{7783}$
計	$\frac{91}{5230}$	$\frac{152}{3160}$	$\frac{15}{453}$	$\frac{6}{610}$	$\frac{19}{505}$	$\frac{2}{85}$	$\frac{3}{760}$	$\frac{3}{78}$	$\frac{1}{1.35}$	$\frac{141}{11745}$	$\frac{13}{1700}$	$\frac{4}{425}$	$\frac{2}{24}$	$\frac{452}{24776.35}$

※ 分子は個数、分母は重量 (g)

a) 石製品

石製品は第8図1に示す1点で、細粒砂岩を素材とする。この種の石製品は本遺跡では数点出土している(註2)。

本標品は全体的に扁平で、上下両端を欠失する。平面形は短冊形をなしていたかと思われる。縦断面は長方形で、横断面は一つの平面の両側が若干外傾して低平な梯形状をなす。表裏両面とも入念な研磨が施され、両側面も同様である。上端の破損面ではわずかながら手馴れようの摩耗も見受けられる。以上の形態から利器や器具などの実用具とは異った、装身具あるいは呪術などに関連した用途が考えられる。現存長3.8センチ、短径2.8センチ、厚さ5ミリ。重量12.40g。排水溝の出

土(P-11)であるから、正確な時期は不明である。

b) 石器

石器は小破片も含め総数67個の出土である。そのうち用途の判明するものは石斧、凹石、砥石、磨石、石皿の5種類であった。石器の層位別出土状況は第3表のとおりで、地区別ではP-12(15点)と排水溝(12点)の2か所で出土が多く、M-12、Q-11、S-12の3グリットでは出土がなかった。石器に使用された岩石の種類、産出層、重量、用途等を第4表に記した。

第5表は石斧の種類や出土層位を調べたものである。

第3表 石器の出土状況

層序	種類							計
	石斧	凹石	なめし用石器	磨石	石皿	その他の石器	不明	
排水溝	3			1	1	1	6	12
第I層	1	1		2			6	10
II	4						4	8
III	3			1	1	1	3	9
IV	13	1	1	4		2	7	28
計	24	2	1	8	2	4	26	67

図版	出土グロット	重量(g)	石質	産出層名	備考	図版	出土グロット	重量(g)	石質	産出層名	備考
第8図1	P-11排水溝	12.40	細粒砂岩	名護	タブレット状製品	第10図7	R-11第4層	281.00	輝綠岩	名護	石斧
2	O-11第2層	39.77	砂質千枚岩	名護	石斧	第11図1	O-12第3層	38.33	砂	"	"
3	R-13第4層	37.45	黒色千枚岩	"	"	2	R-12第1層	210.00	砂質千枚岩	"	凹石
4	N-12第3層	122.68	黒色千枚岩	"	"	3	P-12第4層	385.00	細粒砂岩	島尻	"
5	R-11第4層	197.50	粗粒角閃岩	名護(慶良間島)	"	4	P-12第4層	150.00	砂	"	なめし用石磨石
6	P-12第4層	254.00	輝綠凝灰岩	名護	"	5	P-12第4層	90.00	砂	嘉陽	磨石
第9図1	Q-12排水溝	139.63	粗粒角閃岩	名護(慶良間島)	"	6	R-13排水溝	190.00	砂	島尻	"
2	R-13排水溝	30.00	角閃岩	名護	"	第12図1	S-13第1層	129.00	砂	嘉陽	"
3	S-11第2層	98.00	輝綠岩	"	"	2	N-12第3層	134.00	砂	"	"
4	P-11排水溝	88.41	輝綠凝灰岩	"	"	3	O-11第4層	130.00	砂	島尻	"
5	Q-12第4層	91.00	千枚岩質輝綠岩	"	"	4	R-13第1層	135.00	砂	嘉陽	"
6	P-12第4層	37.73	細粒輝綠岩	"	"	5	R-11第4層	540.00	砂	"	"
7	R-13第4層	43.00	粗粒輝綠岩	名護(?)	"	6	O-11第4層	141.00	砂	"	"
8	O-12第3層	23.39	千枚岩質輝綠凝灰岩	名護	"	第13図1	P-12第3層	545.50	砂	"	石皿
第10図1	R-13第4層	168.84	粗粒變輝綠岩	慶良間島	"	2	排水溝	1,420.00	砂	"	"
2	R-11第2層	36.31	砂	名護	"	第14図1	P-12第4層	340.00	砂	"	その他の石器
3	S-13第4層	48.77	千枚岩質輝綠凝灰岩	名護	"	2	S-13第4層	80.00	砂	島尻	"
4	R-11第1層	139.65	シルト岩	"	"	3	P-12第3層	300.00	砂	嘉陽	"
5	O-11第2層	15.04	千枚岩質輝綠凝灰岩	名護	"	4	Q-12排水溝	230.00	砂	"	"
6	O-11第4層	63.44	千枚岩質輝綠岩	"	"						

第4表 石器の出土層位・重量・石質一覧表

イ) 石 斧

石斧は完形品4点、破損品20点の計24点で、第8図2～第10図7および第11図1に21点示したが、他の3点は頭部と胴部の破片で、ここでは実測図を省略した。石斧を層位的にみると第1層で1点、第2層で4点、第3層で3点、第4層では最も多く13点の出土をみた。また、排水溝でも3点得られた。これを製作技法の視点から観察すると総て何らかの研磨を行っており、中には局部磨製石斧も3点含まれる。打製石斧は採集されていない。また、両刃と片刃の両タイプが認められ、前者が多かった。

次に製法を中心に局部磨製石斧から記述を行うことにする。

1) 局部磨製石斧

これに属するものは第8図2～4の3点である。

同図2は扁平の小型局部磨製石斧で、刃縁を欠く以外は原形を保持する。両刃に分類してよいであろう。平面形は短冊形に属し、刃部では若干幅を減ずる。刃部を欠くため、その型態、つまり直刃か円刃かについては明らかにし得ない。刃縁には使用中に生じたと推定される剥離痕が見られる。製法をみるとまず周縁部と裏面を打欠によって整え、その後、刃部の両面に研磨を加えるが、研磨は不十分で、特に背面など注意しなければ見逃すほどである。表面は縁辺部を除けば、自然面を残す。最大長7.5センチ、最大幅3.1センチ、厚さの最大は9ミリである。重量39.77g。砂質千枚岩製。0-11第2層の出土。

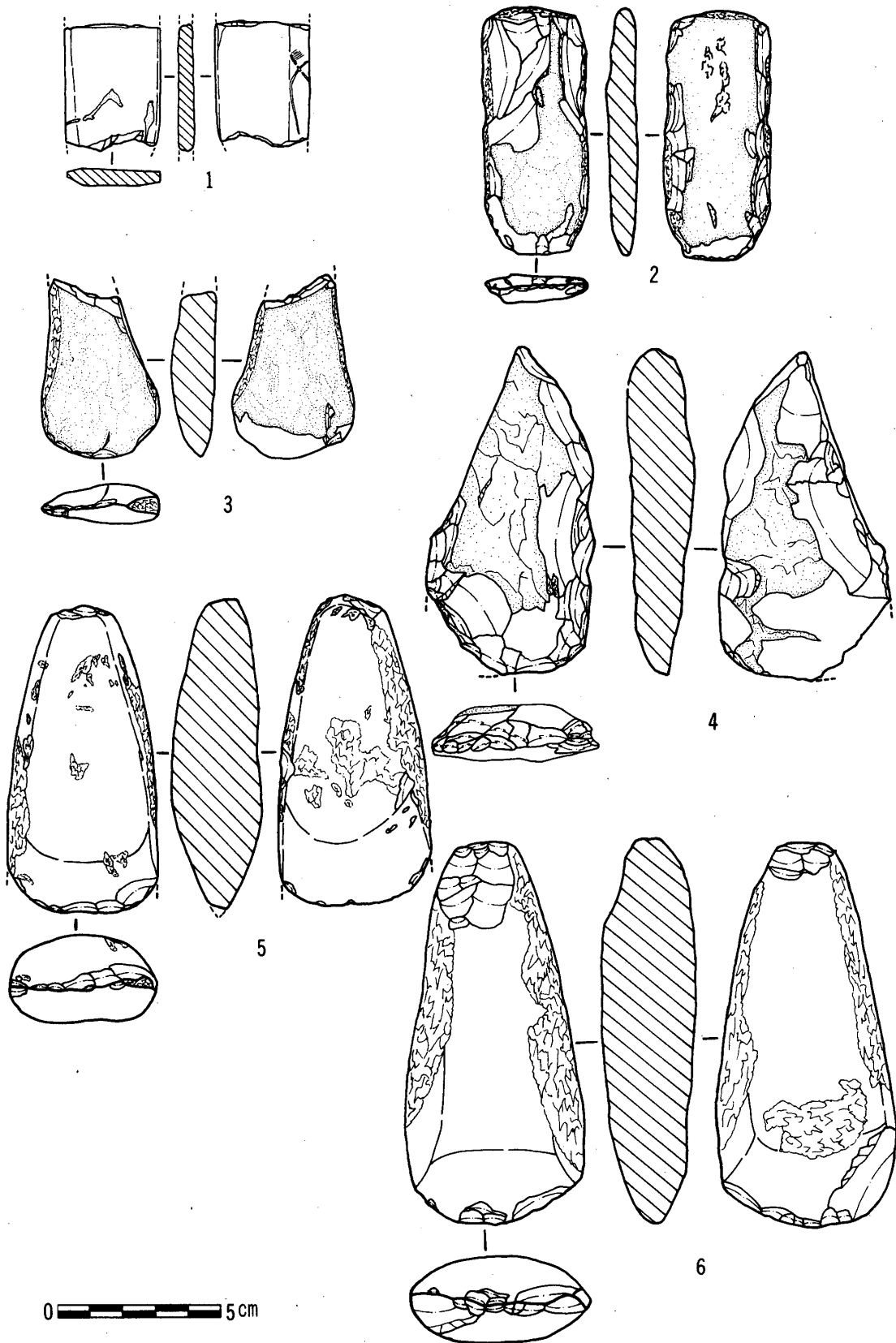
同図3は頭部欠失の小型の局部磨製石斧で、両刃である。平面形は刃部に最大幅のあるタイプで、頭部に細まる。横断面は頭部近くでは長方形、刃部側は三角形に近い。手頃な河

第5表 石斧の型態別出土状況

層序 \ 型態	局部磨製石斧	乳棒状石斧	定角式石斧	不明	計
排水溝		1	1	1	3
第I層				1	1
II	1			3	4
III	1			2	3
IV	1	2		10	13
計	3	3	1	17	24

原石を利用したもので、一部に敲打調整痕も見受けられるが、大部分は自然面のままで、刃部にのみ研磨を施している。しかし、研磨加工の範囲は刃縁にそうわずかの部分だけである。刃の研ぎ出し方は不徹底で、刃縁全体におよばず、そのことから未成品のようにも見受けられる。最大長5.5センチ、最大幅3.7センチ、厚さの最大は1.8センチ。重量37.45g。黒色千枚岩製。R-13第4層の出土。

同図4も局部磨製の石斧で、胴部と頭部の一部を欠く。刃は片刃である。平面の形は楕円形に属していたかと思われ、刃部も丸みを帯びている。横断面は背面が平坦で、上面は不規則な丸みをもつ。この石斧も表面は自然面を残し、背面と側縁を打欠で整え、そのあと刃部の表裏を研磨しているが、研磨は徹底せず、剥離面を多く残し、一見、打製石斧と見紛うほどである。破損部も含め、全体的に手馴れようの磨耗が著しい。最大長9.8センチ、最大幅5.2センチ。厚さの最大は1.7センチ。重量122.68g。黒色千枚岩製。N-12



第 8 図 石製品(1)および石斧 (2~6)

第3層の出土。

以上の3点が局部磨製石斧であるが、2と4は攪乱部、3はR-13の未攪乱層からの出土である。

2) 乳棒状石斧

次に乳棒状石斧とみられるもの3点について記述する。第8図5・6と第9図1の3点である。

第8図5はほぼ完形に近い磨製石斧で、両刃である。刃縁はほぼ全面破損し、原形をとどめない。平面形は刃部に最大幅のあるタイプで、頭部に細まる。横断面は楕円形である。背面の中央凹部と頭部および側面の一部には敲打痕も見受けられるが、他は入念に研磨されている。長さはやや短小だが、以上の形態および製法からみて、乳棒状石斧の一種とみていいかと思う。最大長9.2センチ、最大幅4.6センチ、厚さの最大は2.8センチ。重量197.50g。粗粒角閃岩製で、供給源は慶良間諸島といわれる。R-11第4層の出土である。

同図6は完形に近い磨製石斧で、両刃である。平面形は刃部に最大幅があり、頭部へ細まり、横断面は楕円形を呈する。これも乳棒状石斧とみていいだろう。一応、全面研磨の対象となっているが側縁部には敲打痕も多くみられる。刃縁は破損し、原形をとどめない。最大長11.5センチ、最大幅5.4センチ、厚さの最大は3センチ。重量254.00g。輝緑凝灰岩製。P-12第4層の出土。

第9図1は石斧の頭部破片で、平面形は刃部の拡大したものであろう。頭部近くの両側面には浅い抉りを設けている。横断面は楕円形である。裏面の一部には研磨も認められるが全体は敲打仕上げである。以上の特徴から乳棒状石斧の頭部破片とみていいかと思う。とくに抉りを設けているのが、この石斧の特

徴である。最大長7.3センチ、最大幅4.8センチ、厚さの最大は2.6センチ。重量139.63g。粗粒角閃岩製で、素材の供給地は慶良間である。Q-12排水溝の出土。

3) 定角式石斧

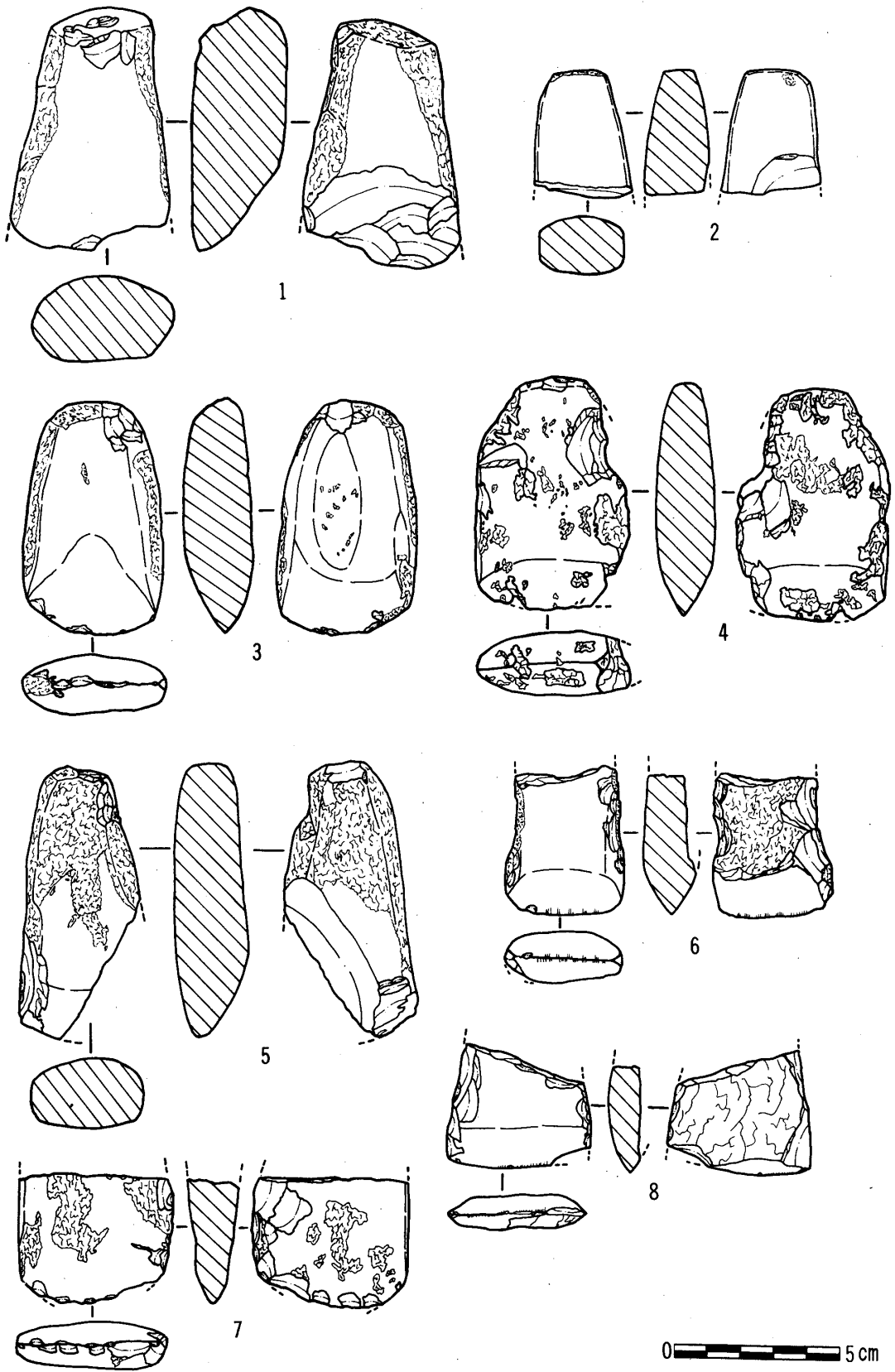
定角式石斧に属するとみられるものは第9図2に示す1点である。

本標品は小型磨製石斧の頭部破片で、平面形は刃部に最大幅のある形態であろう。横断面は三味線胴形に属し、定角式の典型的な資料かとみられる。頭部にはわずかに敲打痕もみられるが、全面研磨は入念で、光沢を有する。裏面の一部にみられる剥離痕は使用時の破損によるものであろう。現存長3.7センチ、最大幅3.0センチ、厚さの最大は1.7センチ。重量30.00g。角閃岩製。R-13排水溝の出土。

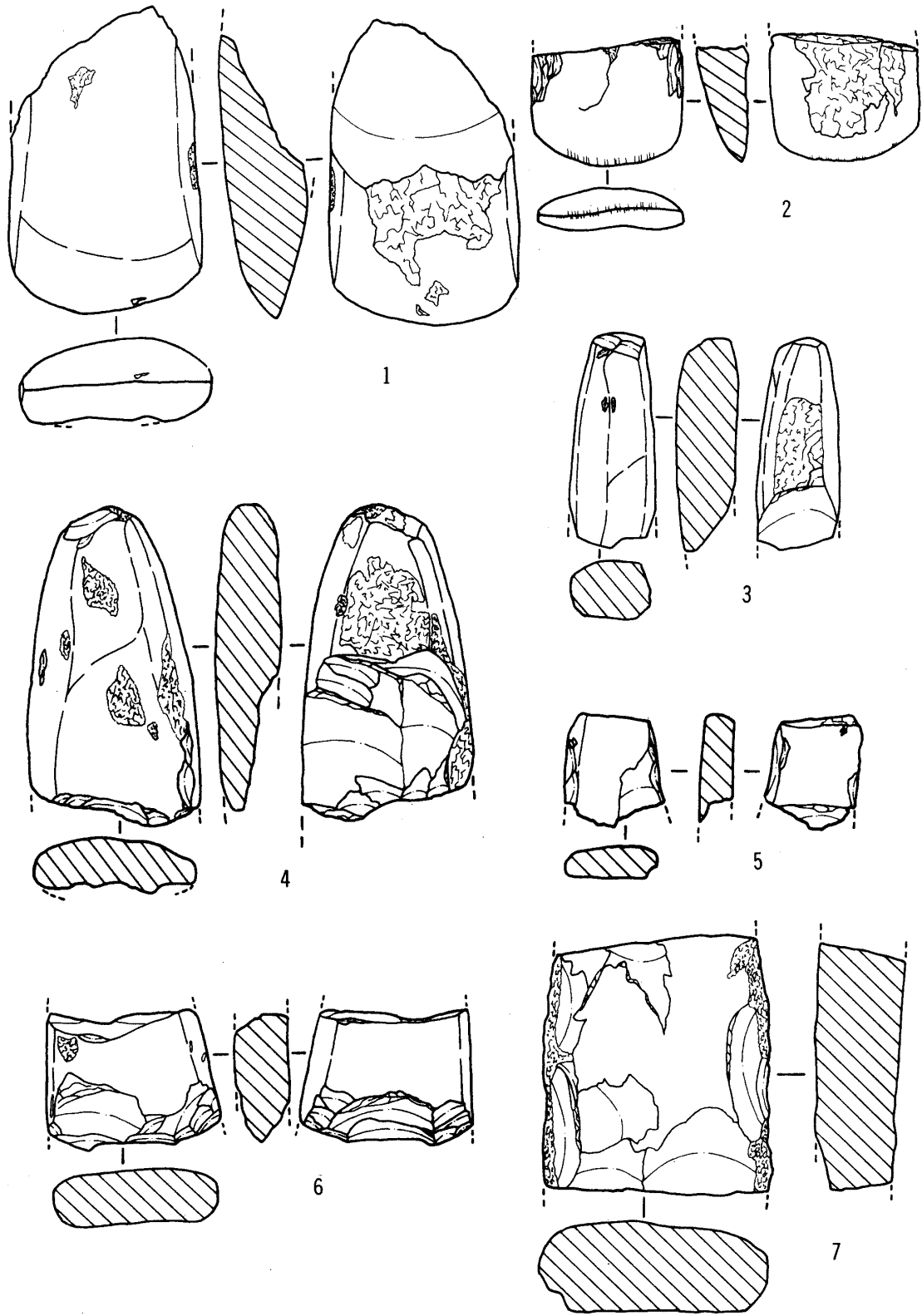
4) その他の石斧

本項で取扱う石斧は上記の7点の石斧を除く、磨製あるいは半磨製の石斧である。破損品も合わせると14点の出土である（第9図3～11図1）。

第9図3はほぼ完形の小型の磨製石斧で、両刃である。平面形は長方形に近いが、刃部で若干幅が大きくなり、頭部へ細まる。横断面は扁平の楕円形であるが、表面は弧状の丸みを帯び、背面はやや平坦である。背面の中央部には敲打調整によって生じたくぼみが縦に溝状に走っており、この部分の研磨は他面に比べると若干不徹底である。両側面の一部と頭部では敲打痕もわずかながら見受けられる。残りの部分は研磨が良く、光沢を帯びる。刃縁は大半が潰れているが、一部に鋭利な刃を残す部分もある。最大長6.9センチ、最大幅4.1センチ、厚さの最大は2.0センチ。重



第9图 石 斧



第10图 石 斧

量 98.00 g。輝緑岩製。S-11第2層の出土である。

同図4もほぼ完形に近い小型の磨製石斧で、両刃である。平面形はやや短小で、一方の側面が著しく破損して、正確なことは分らないが、これも刃部に最大幅のくるタイプに含めてよいであろう。同様に横断面も確実性に欠けるが、現状からすると扁楕円形とみて大過ないかと思う。打欠痕も随所に見受けられるが、研磨は入念で、滑沢を有する。側縁の一部には敲打痕も見受けられる。刃部は若干欠けているものの、未だ鋭利な刃を残している。最大長 6.9 センチ、最大幅 4.6 センチ、厚さの最大は 1.7 センチ。重量 88.41 g。輝緑凝灰岩製。P-11排水溝の出土。

同図5は刃部を欠く磨製石斧の破片で、平面形は刃部に最大幅のあるタイプであろう。横断面は楕円形で、表面はやや円みを帯び、背面はほぼ平坦である。この石斧は手頃な自然礫を最小限に加工したもので、頭部と側縁の一部に調整剥離と敲打を加え、胴部から刃部へかけて研磨を施すもので、頭部側の上半は表裏とも自然面を多く残している。したがって、どちらかといえば局部磨製的な面があるが、研磨が刃部に限定されず、一部胴部にも及んでいることから、とりあえず、本項で紹介することにした。最大長 8.0 センチ、最大幅 3.5 センチ、厚さの最大は 2.1 センチ。重量 91.00 g。千枚岩質輝緑岩製。Q-12第4層の出土。

同図6は両刃の小型磨製石斧で、頭部を欠く。刃部側の両側縁には浅い抉りが設けられている。平面形は刃部に最大幅のくるタイプであろう。両刃で、表面の研磨は入念である。背面は刃部以外は大きく破損して、したがって縦断面、横断面の正確な形は提示できないが、現状から推して、横断面は楕円形を

推定している。先述の側面の抉りの部分では調整剥離と敲打の両手法が認められる。まだ、鋭利な刃を残し、使用痕も観察される。最大長 4.5 センチ、最大幅 3.6 センチ、残存部の最大厚は 1.2 センチ。重量 37.73 g。細粒輝緑岩製。P-12第4層の出土。

同図7は磨製石斧の刃部破片で、両刃である。平面形は短冊形に属するものであろう。横断面は扁楕円形である。一応、両面に研磨痕と敲打痕が認められるが、研磨痕は表面に多く、裏面に少ない。しかし、現状から類推すると全体的に敲打痕を多く残す資料のようである。刃縁は破損し、直刃か円刃か推察し得ない。最大長 3.7 センチ、最大幅 4.6 センチ、厚さの最大は 1.6 センチ。重量 43.00 g。粗粒輝緑岩製。R-13第4層の出土。

同図8も磨製石斧の刃部破片で、刃は両刃である。刃部に幅の最大のくるタイプであろう。背面は破損し、したがって断面の形状を復元し得ないが、扁平の石斧であることは間違いない。刃部は一部破損しているものの、未だ鋭利な刃を残している。直刃の形態かと思われる。両側面には打欠痕も認められる。しかし、研磨は一応良好である（使用痕は表裏面の刃縁に垂直方向にみられ裏面は短いようである）。最大長 3.8 センチ、最大幅 4.4 センチ、残存部の厚さの最大は 0.9 センチ。重量 23.39 g。千枚岩質輝緑凝灰岩製。O-12第3層の出土。

第10図1も磨製石斧に属し、両刃である。平面形は短冊形と推定される。背面は欠けているが、残存部より推定すると横断面は楕円形であろう。表裏面とも研磨は入念だが、背面の中央部と側面の一部には敲打痕も観察される。刃縁は弧状を呈し、刃は鋭利である。最大長 8.8 センチ、最大幅 5.6 センチ、厚さの最大は 2.3 センチ。重量 168.84 g。粗粒

変輝緑岩製（慶良間島）。R-13第4層の出土。

同図2も磨製石斧の刃部破片で、片刃的傾向の強い石斧である。平面形は短冊形に属するようで、刃縁は弧状を呈する。横断面は扁平の楕円形で、背面中央部には研磨の施されない打欠痕のみを有する凹部が残っており、横断面は図のような彎曲を示す。両側面に製作時の打欠痕が残っているが、研磨は全体的に良好である。刃部には使用痕が顕著にみられ、刃縁に対して垂直方向をとり、表面の使用痕は裏面より若干長い。最大長3.5センチ、最大幅4.4センチ、厚さの最大は1.5センチ。重量36.31g。砂岩製。R-11第2層の出土。

同図3は磨製石斧の頭部破片である。この石斧は縦長の特異の形態を有するもので、刃部の形態は不明だが、本誌第2号で紹介した縦長のもの（表土層）と同一の形態に属するものであろう。横断面は方形に近い形をとる。頭部と背面には打欠痕も残っているが、研磨は概して良好で、背面の打欠痕を残す箇所も摩耗により平滑になっている。第4層の出土だから、現時点における、この種の石斧の最古の資料ということになる。最大長6.1センチ、最大幅2.5センチ、厚さの最大は1.8センチ。重量48.77g。千枚岩質輝緑凝灰岩製。S-13第4層の出土。

同図4は磨製石斧の頭部破片である。平面形は刃部から、頭部へ細まるタイプである。横断面は扁平の楕円形に近い。上下両平面および左右の両側面とも研磨は良好で、滑沢を有する。しかし、表面の中央部の一部や裏面の頭部近くには未だ自然面が残っており、また、頭部や側面のごく一部にも打欠痕が消え切らずに残っている。最大長9.4センチ。最大幅5.1センチ、厚さの最大は2.0センチ、重量139.65g。シルト岩製。R-11第1層

の出土。

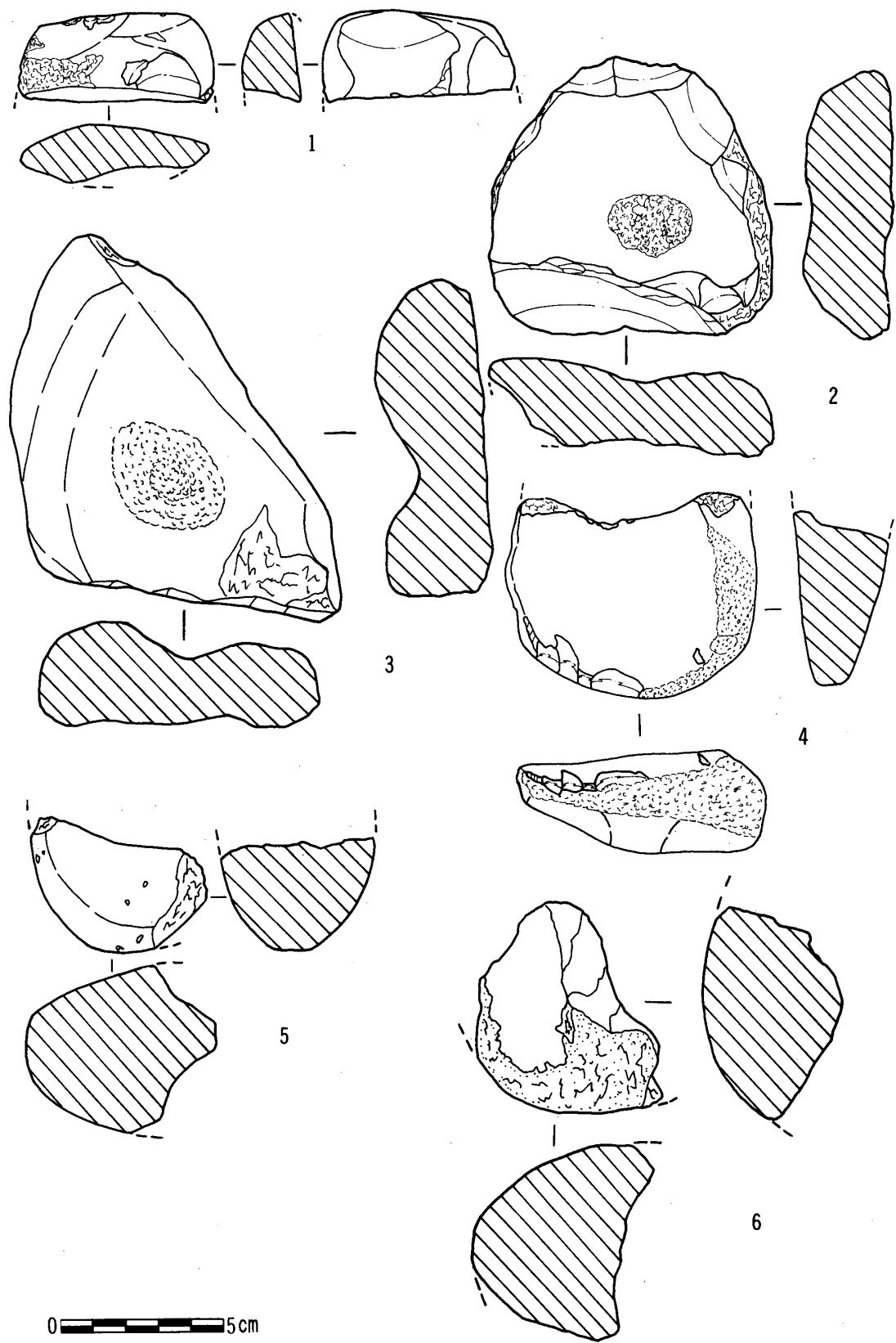
同図5は小型の磨製石斧の頭部破片で、平面形は頭部に向って幅を減ずるタイプかとみられる。扁平の石斧で、両側面の加工は雑である。平面の研磨も表面はやや良好だが、背面は自然面を大部残している。現存長3.1センチ、最大幅2.9センチ、厚さの最大は1.0センチ。重量15.04g。千枚岩質輝緑凝灰岩製。O-11第2層の出土。

同図6は石斧の胴部破片である。前記の石斧と製作技法は一致する。平面形は刃部に最大径のくるタイプであろう。横断面は扁平で、両側面は丸みをもつ。研磨は一応入念である。現存長3.8センチ、最大幅5.0センチ、厚さの最大は1.6センチ。重量63.44g。千枚岩質輝緑岩製。O-11第4層の出土。

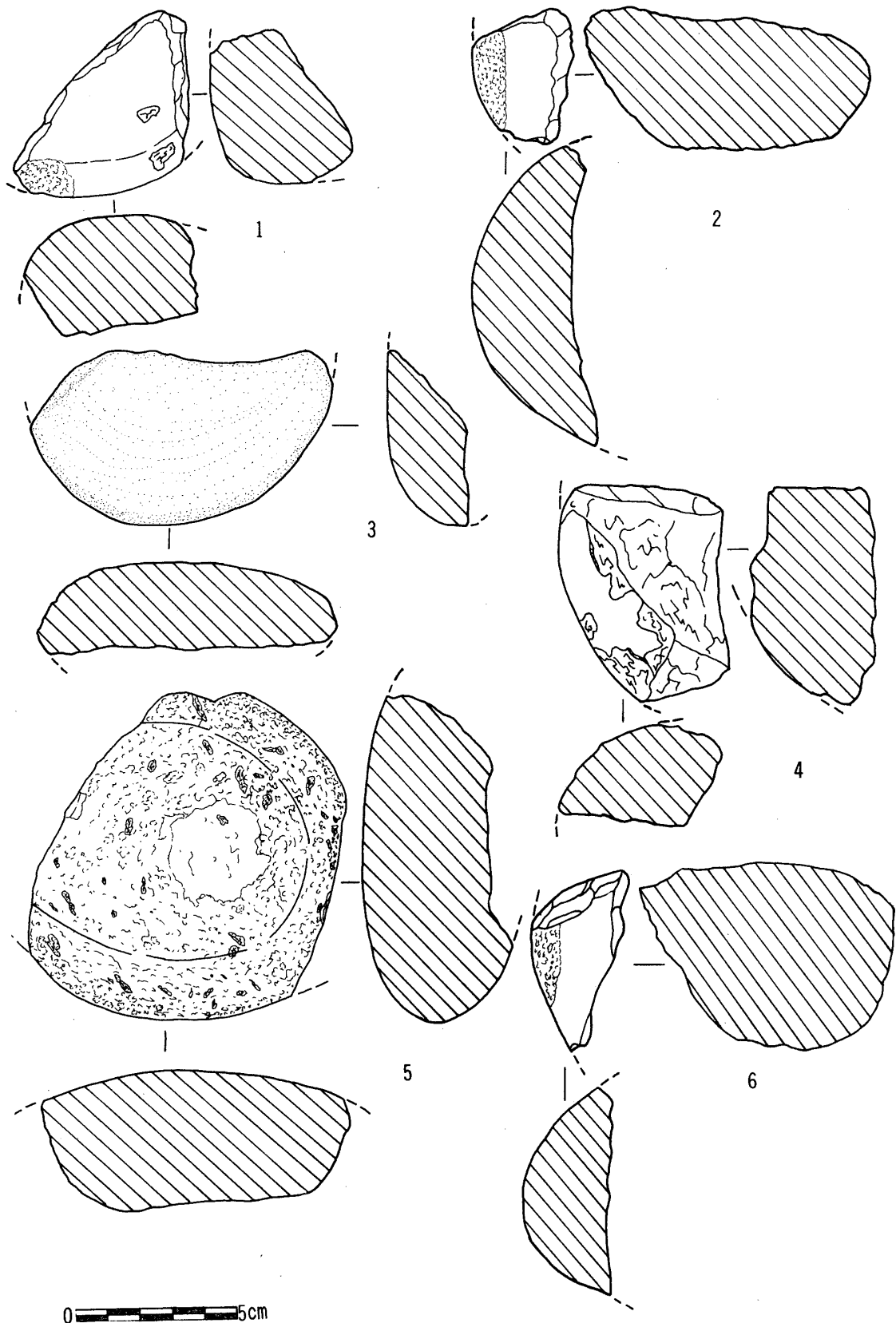
同図7も石斧の胴部破片である。残存部は短冊形に近いが、上端はやや幅を減じていることから、刃部に最大径のくるタイプかとみられる。横断面は扁楕円形に属するが、側縁部は剥離痕が大きく残っていて、そのため不整の扁楕円となっている。器面調整は雑で、研磨は表面の一部に限られ、その周縁と両側面には大きな剥離痕が残っており、裏面は全面敲打痕を残している。大型の石斧であろう。現存長7.6センチ、最大幅6.8センチ、厚さの最大は2.7センチ。重量281.00g。輝緑岩製。R-11第4層の出土。

第11図1は磨製石斧の頭部破片で、残存形態から扁平の石斧を推定している。器面調整は雑で、一応、研磨を施すが、随所に自然面や打欠痕が見受けられる。研磨痕は一部頭部にも及んでいる。現存長2.6センチ、最大幅5.9センチ、厚さ1.7センチ。重量38.33g。砂岩製。O-12第3層の出土。

以上、本地区の石斧について記述した。今回の調査では打製石斧は得られず、全面磨製



第11図 石斧(1)・凹石(2・3)・なめし用石器(4)・磨石(5・6)



第12图 磨石

か局部磨製に限られた。出土資料は破片が多く、そのため原形を示しうる資料も制限された。

局部磨製石斧は第8図2～4の3点で、4は片刃、他の2点は両刃である。3は自然礫を利用したもので、2・4も一面は自然面を残す。4は磨面は少なく、むしろ調整剥離の部分が多い。3点とも形状は異っており、一つのタイプにまとまることは困難である。2は第2層、3は第4層、4は第3層の出土。

乳棒状石斧に分類した3点のうち、第8図5と同図6はほぼ完形だが、5は短小である。第9図1は頭部破片で、両側面に浅い抉りをもつ。5・6は第4層、第9図1は排水溝の出土である。

他は全面あるいは半磨製の石斧で、先述のように破片が多く、全形を呈示できる資料は少ない。ほとんどが小型とみられるもので、多少とも重厚さを感じさせるのは第10図1と第10図7の2点ぐらいである。刃部を残す資料に片刃は少ない。また、定角式の頭部破片とみられるもの(第9図2)が、1点検出されたが、排水溝の出土であり、所属年代を知り得ないのは残念である。

ロ) 凹 石

凹石としたものは第11図2・3に示す2点である。

同図2はほぼ完形の凹石で、平面形は梯形類似の不規則な円形に属し、表面および周縁は調整剥離が加えられ、研磨は認められない。凹みは片面にのみ存し、大きさは2.8センチ×1.9センチで、凹みは浅い。裏面は自然面のままである。長さ9.1センチ、重量210g。砂質千枚岩製。R-12第1層の出土。

同図3は完形品とみられるものである。平面形は三角形を呈し、表面のほぼ中央に凹み

を設けている。凹みは4.1センチ×2.8センチの大きさで、深さは約1センチ、大型の凹みに属している。この石器は自然礫をそのまま使用したもので、他に加工は認められない。裏面は自然面のままである。重量385g。細粒砂岩(ニービ)製。P-12第4層の出土。

ハ) なめし用石器

なめし用石器としたものは第11図4に示す1点で、砂岩を素材とする。この種の石器は本遺跡のSトレンチでも出土例がある(註1)。

この石器は砥石の破損品をなめし用石器に転用したもので、上面の磨面はやや平坦、裏面は自然面のままで、山形を呈し、側面は加工により平坦になっているが、なめしに使用されたとみられる部分(下端)はやや丸みを帯びている。重量150g。砂岩製。P-12第4層の出土。

ニ) 磨 石

本地区出土の磨石は8点である。層位別の出土状況は第1層で2点、第3層で1点、第4層で3点、排水溝で2点の計8点で、第2層での出土はなかった。完形品はなく、総て破損品である。サイズは小さいもので径5.9センチ、大きいものは10.4センチであった。次に図示したものについて記述する。

第11図5は平面が円形もしくは楕円形に属するとみられる磨石の破片で、磨面と側面の一部を残す。表面はすべて研磨を加えている。横断面は楕円形であろう。砂岩製である。重量90g。P-12第4層の出土。

同図6は平面形が円形ないし、楕円形の磨石の破片である。表面は一応全面研磨を加えたと思うが、全体的に摩耗が著しく、自然面にみえる部分が多い。比較的厚手の磨石とみられる。第三紀の軟質の砂岩を用いているこ

とから、加工される対象も限定されていたであろう。重量 190 g。R-13排水溝の出土である。

第12図1も前記製品と同様の磨石とみられるもので、表面は研磨が施され、一部に光沢も見受けられるが、側面と裏面の一部は砥磨仕上げとなっている。横断面はおそらく扁楕円形であろう。砂岩製である。重量 129 g。S-13第1層の出土。

同図2は大型磨石の側面部の破片で、磨面の一部を残している。側面は敲打調整を行ない、次に砥磨を加えているが、敲打痕もかなり見受けられる。平坦部の磨面は若干光沢を有する。前記1の部類に属するものであろう。素材は砂岩製である。重量 134 g。N-12第3層の出土。

同図3は平面形が円形ないしは楕円形の磨石の破損品である。表面には研磨が認められるが、全体的に摩耗が著しく、自然面にみえる部分が多い。この磨石は横断面が扁楕円形の薄手のものであろう。第三紀砂岩製。重量 130 g。O-11第4層の出土。

同図4は破損の著しいもので、磨面も破損した部分が多く、研磨面は部分的に辛うじて残っている状態である。原形は不明だが、残存部の大きさや磨面のカーヴの状況から磨石と認められるものである。砂岩製である。重量 135 g。R-13第1層の出土。

同図5も磨石の破片とみられるもので、側面の大部分と背面を欠く。現状から平面は円形が推察される。全体的に摩耗が著しく、滑面は見受けられない。R-11第4層の出土で砂岩製。重量 540 g。

同図6は大型磨石の側縁部の破片である。表面は平坦で全面研磨が加えられているが、摩耗のため光沢は消え失せている。原形・大きさともに不明。砂岩製である。重量 141 g。

O-11第4層の出土。

以上の8点は磨石と分類できるものであるが、他に磨面を有する小破片が27点あり、中には磨石の破片も含まれると考えるが、識別が困難のため、別項で取り扱うことにした。

ホ) 石 皿

石皿は第13図1と2の2点である。

同図1は破損品で、原形を復元し得ないが、現状からみて長方形を呈していたかと推察される。側縁の一部は自然面を残すが、他は背面にかけて調整剥離を加えている。磨面は中央へ大きく凹んでおり、かなり使用されたものであろう。現存長 14.9センチ、幅 7.0センチ、重量 545.50 g。砂岩を素材とする。P-12第3層の出土。

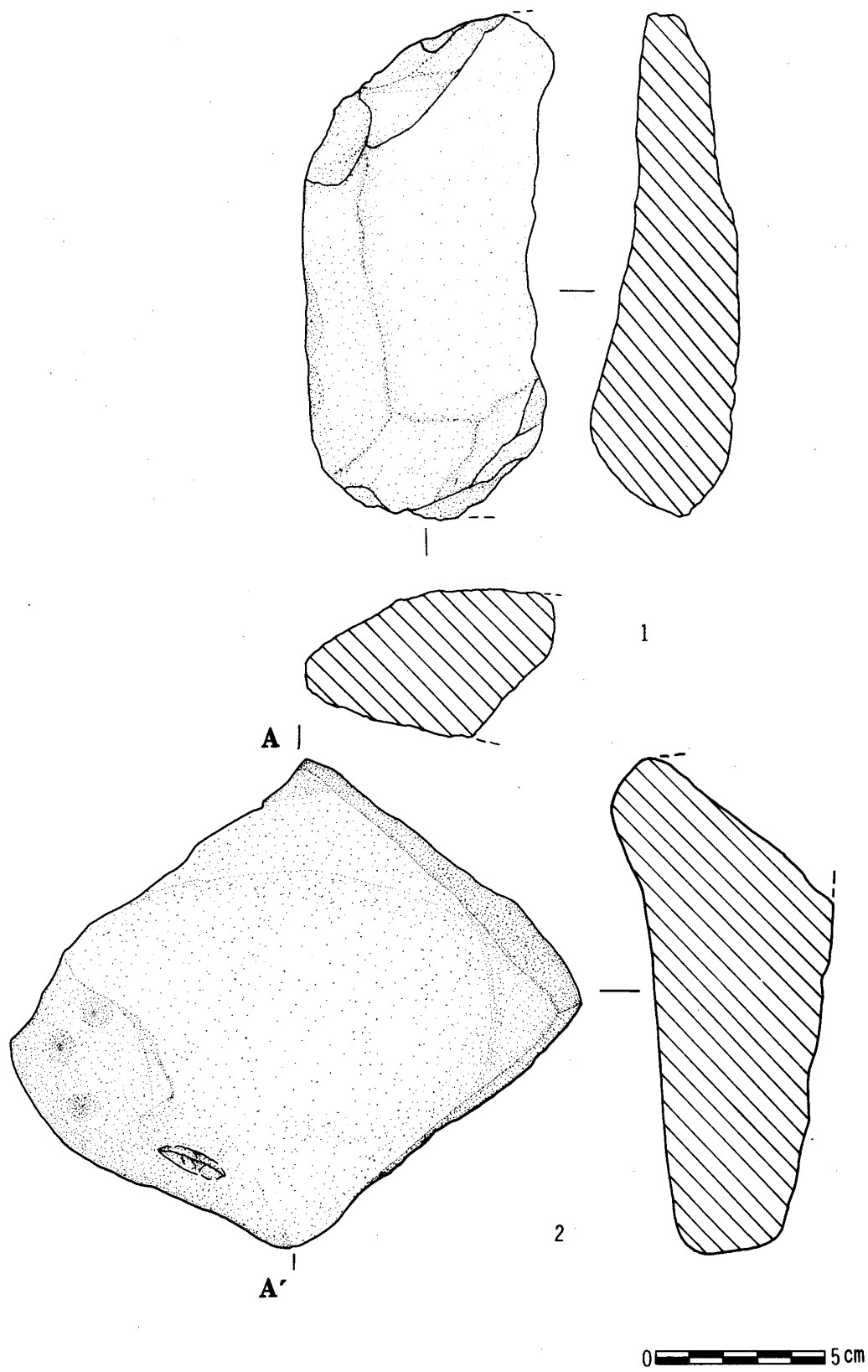
同図2も石皿の破片で、破損後かなりの時間を経過したものとみられ、全体的に摩耗し、破損面も粗さは全くみられない。この破片は図の上端に磨面の縁端部が残っているだけで、他は磨面の平坦部にあたる。この縁端部がなければ、石皿と認めることができなかつたであろう。大きさや形態は不明。縁端部から中央への磨面の傾斜やその断面をA-A'に示した。現存長 16.8センチ、幅 11.8センチ、重量 1,420.00 g。砂岩を素材とする。排水溝の出土。

ヘ) その他の石器

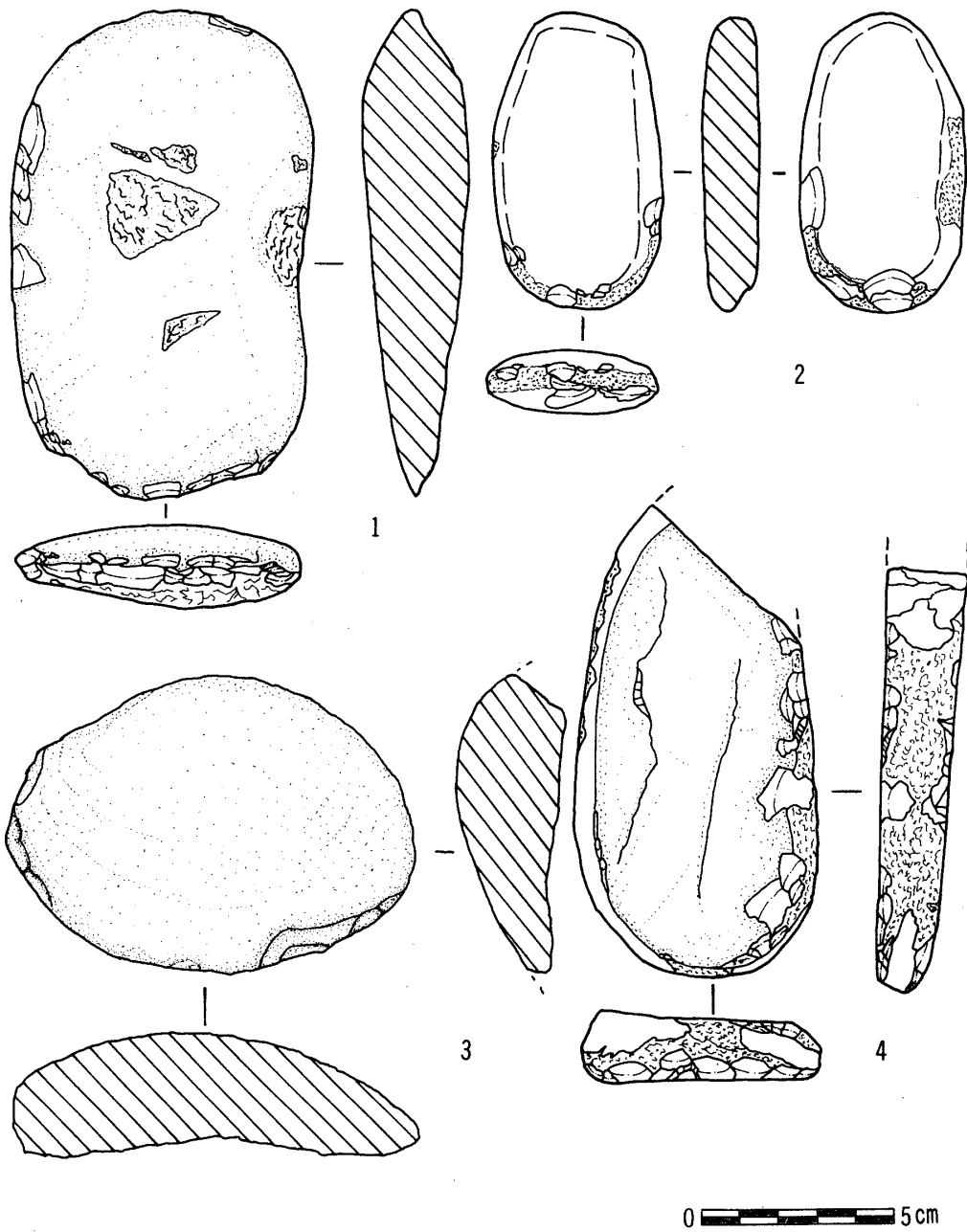
その他の石器としたものは第14図1～4に示す4点である。

同図1は片面のみを主として加工する石器で、はっきりした用途は分らない。類例も今のところはなく、本貝塚での出土が初めてであろう。

本標品はほぼ完形で、表面は自然面を利用し、背面は調整剥離を行なっている。自然面



第13図 石 皿



第14図 その他の石器

の中央部には浅い凹みが認められ、大きさは1.8センチ×1.2センチである。また、表面の右側縁中央部には彎曲の弱い挟りが設けられている。以上の特徴および本標品の平面形から、当初凹み石であったものを、再加工、別の用途に使用したものと思われる。側縁の挟りは把握保持あるいは緊縛用であろう。片面は自然面を利用し、他面のみ調整剥離を加えていること、縦断面でみると上端は厚みがあり、下端に次第に細くなっていることなどからホアビニアン型の石器を想起させるが、明確なことは分らない。土掘り具の用途も考えられるであろう。全体的に摩耗が著しい。長径12.5センチ、短径7.5センチ、重量340g。砂岩を素材とする。P-12第4層の出土である。

同図2の1点は完形の石器で、楕円形の平面を有し、横断面も扁楕円形である。加工は上下両端に限られ、他は自然面のままである。この石器は下端の様子からすると叩きに使用した可能性が強い。重量80g。砂岩製で、S-13第4層の出土。

同図3は大型磨石の破片を再加工したものである。まず、背面の破損部に調整剥離を加え、そして周縁を整えている。背面・周縁とも一様に摩耗し、打欠直後の粗さはみられない。表面は磨石の磨面をそのまま利用している。平面は楕円形を呈する。この石器の用途も不明であるが、現状のままで、磨石として使用することも可能である。砂岩を素材としている。重量300g。P-12第3層の出土。

第14図4は上端と側縁の一部を欠くが、平面形は楕円形に近く、縦断面は上端で厚く、下端で若干薄くなっている。本標品は側面に敲打と研磨を加えたもので、敲打は表面の周縁部にみられ、研磨は側縁にみられる。また、この磨面は敲打によって部分的に打ち消され

た箇所もある。以上の状況から、この石器は磨石の横断面を部分的に切り取り、再加工したと思われる。用途は不明。砂岩を素材とする。重量230g。Q-12排水溝の出土。

ト) 用途不明の破片

用途不明とした破片は素材の一部に磨面の認められるものであるが、小破片のため原形を推定し得ないものである。中には石斧、磨石、石皿なども含まれているかもしれない。26点出土をみたが、実側図は省略した。

シ) 土器

今回の調査で、2,000点余の土器片を得た。その中で、文様、器形等から型式名が判明するのは200点余で、9型式認められ、そのほか奄美の土器も若干検出された。以下、各型式について略述する。

第6表 各型式の層序別出土状況
(口縁と有文胴部)

型式 層序	伊波式土器	荻堂式土器	大山式土器	カヤウチバンタ式土器	室川式土器A	室川式土器B	室川上層式土器A	室川上層式土器B	宇佐浜式土器	奄美式土器	計
排水溝	7	6	6	2		1		1		1	24
I	2	3	1	1				1			8
II	4	6	3	3				1	1	2	20
III	4	6	5	12	3		3	4	2	1	40
IV	11	32	19	27	6	1	4	7		5	112
V											
計	28	53	34	45	9	2	7	14	3	9	204

a) 伊波式土器

本トレンチの伊波式土器は第15図1～2および第16図1～2に図示した以外に細分の不可能な破片が6点あり、総数は28点である。そのうち11点が口縁部破片で、他の17点は胴部の破片である。完形の土器はなく、すべて小破片である。

器形は口縁部破片から推定するとほとんどが深鉢形で、明確な壺形は見受けられない。

口径の推算可能なものが1点(第16図1)あり、推定復元を試みてみた。この土器の口径は推算21センチの大型の部類に入る。これは無文の土器であるが、有文資料には推定復元の可能なものはなかった。

次に本トレンチの文様について記述するが、細分は本誌第5号(註4)記載のものを若干修正して使用することにする。

第7表 各発掘区における伊波式の出土状況

発掘区 層序	M	N	O		P		Q		R			S			不 明	計
	12	12	11	12	11	12	11	12	11	12	13	11	12	13		
排水溝								1		1	1				4	7
I				1												1
II													4			4
III				1						2	1					4
IV			1		2	3		1	1	1	2	1				12
計			1	2	2	3		2	1	4	4	1	4		4	28

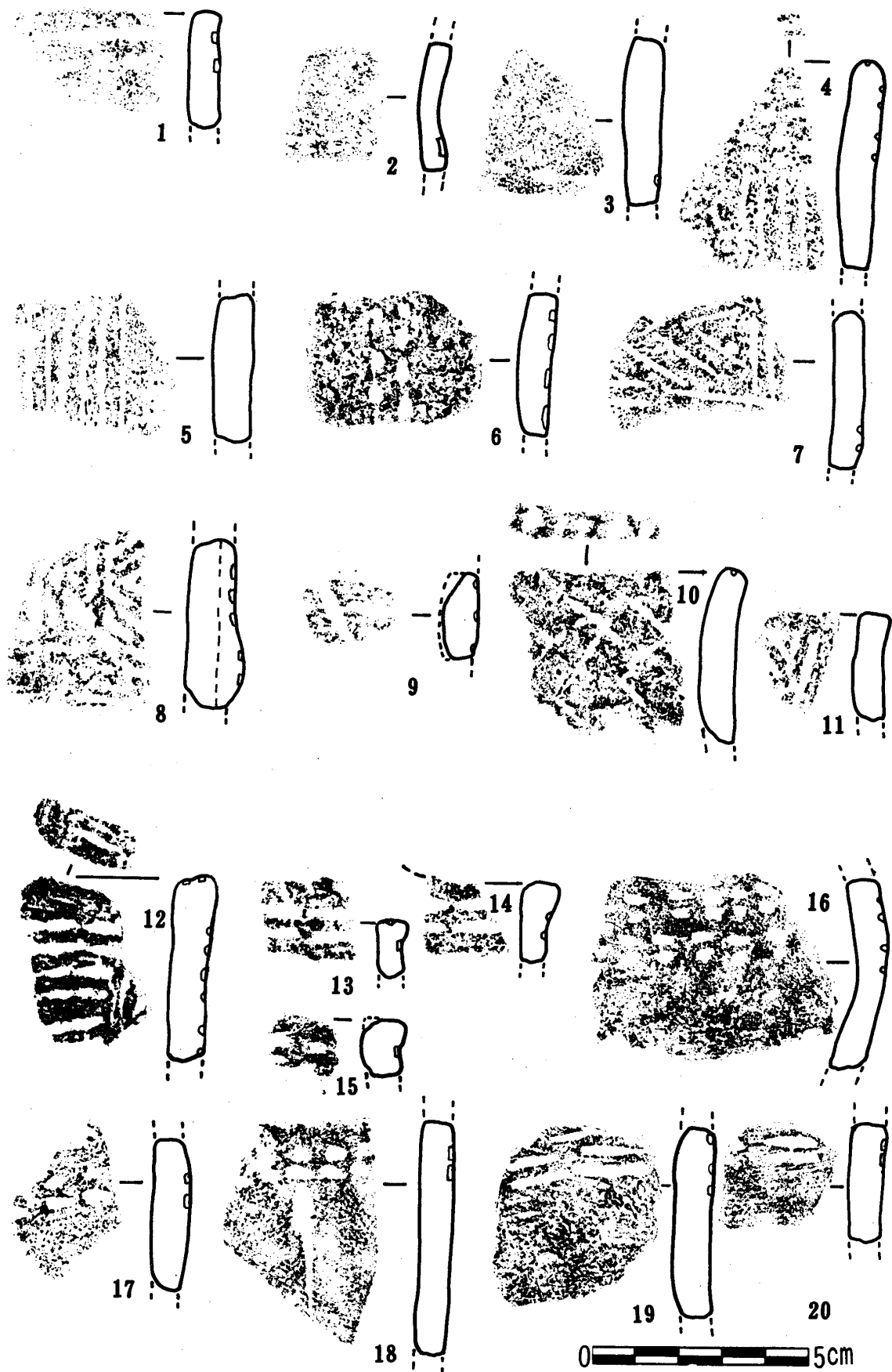
イ) 第1種

口縁部(上段)および胴上部(下段)に1条ないし2条の点刻文、連点文、短沈線文、長沈線文などを水平方向に施し、両文様にはさまれる部分、つまり中段(頸部)を無文のまま放置するグループであるが、本トレンチでは確実なものは出土していない。しかし第15図1～3はその可能性のあるものである。

同図1は平口縁の破片で、単篋を用いて口縁にそって横位に2条の押し引き文を左から右の方向に施文する。器面調整はナデによるものと思われるが、石灰分附着のため確実なことは不明。焼成は悪く、石英やチャートを混入する。器色は表裏面ともに暗褐色を呈している。S-12第2層よりの出土。

同図2は頸部の破片で、下端には半截竹管による横位の押し引き文を一条左から右に施文する。器面は表裏面ともにナデによって調整されている。焼成は普通で、石英のみを混入する。器色は表面は褐色、裏面は赤褐色を呈している。薄手の土器で焼成は悪い。P-12第4層よりの出土。

同図3も頸部の破片で、叉状工具によるとみられる押し引きが1条認められる。これは対の文様の上部にあたるものであろう。施文の方向は左から右である。器面調整は表裏面ともナデだが、表面には、わずかに擦痕も見受けられる。色調は表面が茶褐色、裏面は黒色を呈している。石英とチャートを混入する。焼成は普通。R-13の排水溝より出土。



第15图 伊波式土器

第8表 伊波式の文様別出土状況

種類 層序	第1種	第2種								第3種	種不明	計
		I	II	III	IV	V	VI	VII	不明			
排水溝	1								1	1	4	7
I					1							1
II	1							1			2	4
III								1		1	2	4
IV	1	3			1						7	12
計	3	3			2			2	1	2	15	28

ロ) 第2種

文様帯の中段を数種の文様で埋めるグループである。本項では前述のように本誌第5号記載の分類基準を下記のように若干修正して記述することにする。第15図4～11に示す8点はこれに属するが、本トレンチでは下記細分のうちII、III、V、VIの4種は検出されていない。

I 中段に縦位区画文のみを施文するグル

ープ。

II 中段を縦位沈線文のみで埋めるグループ。

III 組帯文（あるいは近似文様）で埋めるグループ。

IV 羽状（綾杉）文で埋めるグループ。

V 鋸歯文で埋めるグループ。

VI 斜行文で埋めるグループ。

VII 上段省略の文様。

2種 I

中段に縦位区画文のみを施すグループで、第15図4～6はこれに属する。縦位区画文の左右は無文空白部を形成する。

同図4は口縁の破片で、口縁にそって横位に2条1組の点刻文を2組、左から右の方向に施文し、その下方に叉状工具による沈線を施す。縦位文様は2組認められる。口唇上でも横位の単線文の一部が見受けられる。表裏面ともにナデによって調整されている。焼成は普通で、石英やチャートを混入するが、後者も比較的多い。器色は外面は暗褐色を呈し、

内面は茶褐色を呈する。Q-12の排水溝より出土。

同図5は頸部の破片で、縦位区画文は単篋（棒状）工具によって施され、6条認められる。施文は浅い。表裏ともナデによって調整されている。焼成は普通で、石英を多量混入。器色は内外面とも茶褐色を呈する。R-13第4層よりの出土。

同図6も頸部の破片で、単篋による点刻文が縦位に2本認められる。縦位文の左右は比較的広い無文空白部をつくるが、同標品の左下端には斜行文の一部がみられることから、

あるいは本項のⅥに分類すべきものかもしれない。器面は表裏面ともにナデによって調整されている。焼成は比較的良好、大粒の石英を混入する。器色は表裏面とも暗褐色を呈する。R-11第4層よりの出土。

2種Ⅳ

中段を羽状（綾杉）文で埋めるグループで同図7・8はこれに属する。

同図7は頸部の破片で、中段には横位の羽状文、下段には2条1組の長沈線を水平方向に施文する。また、中段では叉状工具による縦位区画文も見受けられる。口縁上端欠損のため、上段の文様は不明。器面は摩耗しているが、表裏面ともナデ調整を行ったものと思われる。器色はやや赤みを帯びた褐色だが、表面は煤けて黒ずんだ箇所もある。頸部における径は約11センチである。焼成は普通。石英を混入する。P-11第4層よりの出土。

同図8も頸部の破片で羽状文と凸帯文を組み合わす文様をもつ。凸帯文は縦位と横位のもの認められ、後者は下段、つまり胴上部のものだが、上端は欠損のため横位凸帯文を貼付していたかどうかは不明。凸帯上にはそれぞれ縦位、横位の点刻文が施されているが、横位凸帯上のは器面摩耗のため消えかかっている。縦位のは両側縁を含め5列みとめられ、2点1組の点刻文を3組施していたことになる。羽状文の施文数は不明だが、少なくとも横位のもものが2組見受けられる。点刻文も羽状文も施文は比較的良好。器面は表裏面ともナデ調整を行ったものと思われる。器色は暗褐色を呈する。焼成は普通、石英を多量混入する。O-12第1層よりの出土。

2種Ⅶ

上段の横位文様を省略し、口縁部直下から

すぐ綾杉文や斜沈線文などを施文するグループで、同図10・11がこれにあたる。

同図10は口縁の破片で、口唇部には縦位の刻目文が密に施されている。口縁では上位文様は見られず、いきなり羽状文からはじまる。羽状文は1.2センチ前後の間隔で描かれ、比較的シャープである。下部欠損のため下段にどのような文様を施文したかは不明。器面調整は表裏ともナデによるものと思われる。色調は茶褐色で、黄みがあった部分もある。焼成は普通。石英を混入する。S-12第2層の出土。

同図11も口縁部の小破片で、口縁部直下に縦位の羽状文を施す。施文は深く、文様は鮮明。但し、これも下段の文様の種類は不明。口唇上は無文。器面調整は表面がナデ、裏面は破損のため不明。色調は茶褐色、煤けて黒ずんだ箇所もある。焼成は普通で、石英を混入する。R-13第3層よりの出土。

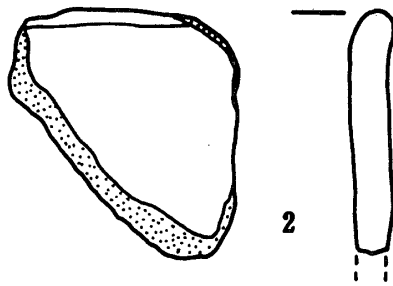
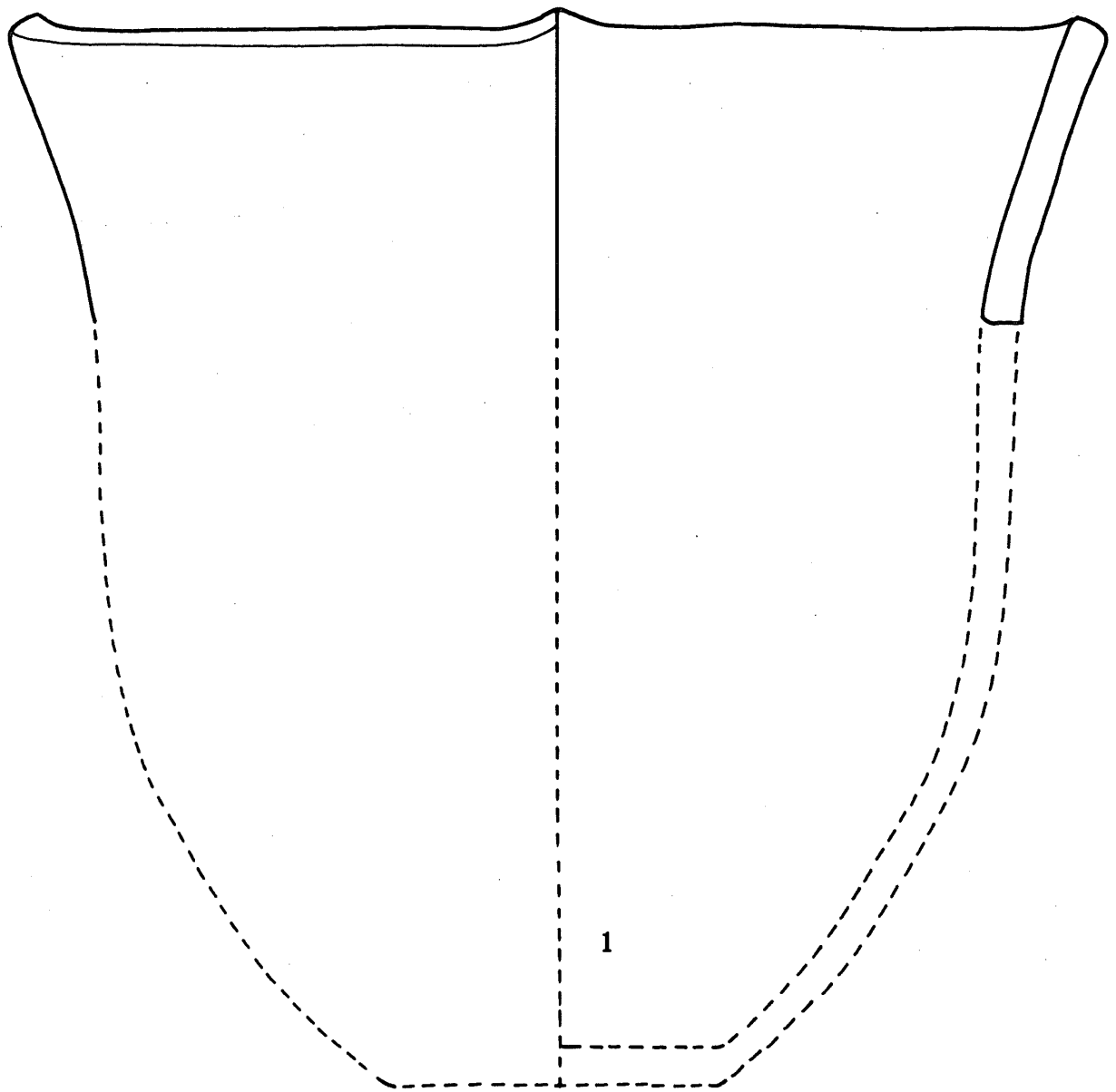
第2種の細分不能の資料

同図9は第2種に属するとおもわれるが、小破片のため文様の全体的展開状況がはっきりせず、したがって細分が不可能なものである。頸部下方の文様と思われ、斜線と横線が残っている。器面調整は表面がナデ、裏面は破損のため不明。器色は内外面ともに赤褐色を呈し、焼成は悪い。石英やチャートを混入する。出土地点は不明。

ハ) 第3種

無文の伊波式土器で、本トレンチでは2点（第16図1・2）検出された。

同図1は推定復元をこころみたもので、本トレンチの伊波式口縁の中では最も大きな破片である。口縁は外反し、口径は推算21センチである。現資料の口縁部右端はわずかに上



第16図 伊波式土器

昇しており、低平な山形突起をつくるものと思われる。山形突起はおそらく4個であろう。口唇は平坦で、無文である。表面のにはわずかに擦痕も認められるが、裏面はおそらくナデ調整であろう。器色は表裏面ともに茶褐色を呈する。焼成は普通で、石英を混入する。器高は口径からして、20センチ前後かと推定される。器厚は7ミリで、R-12第3層よりの出土。

同図2も無文の口縁破片で、表裏面ともにナデによって調整されている。器色は両面とも茶褐色を呈する。胎土の混入物は石英やチャートである。焼成は普通。口唇は若干丸みを帯びている。口径は推算18センチ。R-12の排水溝より出土。

二) 細分不能の伊波式土器

伊波式に属するものの、破片が小さく、そのため文様の展開状況がつかめず、細分の困難な土器が若干ある。第15図12~20の9点がそれだが、その他に図示を省略したものが6点ある。

同図12は山形口縁の破片で、口唇部に叉状工具による刻文を施す。口唇上の施文範囲は不明。口縁部の文様は横位に2条の連点文と、その下方に2条1組の沈線の1部が見受けられる。沈線は傾斜しており、羽状文か、斜行文か、鋸歯文のいずれかに属するであろう。施文はいずれも深く、鮮明である。また、本標品の右端には縦位文もみられるが、文様は不鮮明。表裏ともに粗い擦痕が認められる。器色は内外面ともに黒色を呈している。焼成はきわめて良い。石英やチャートを混入する。O-11第4層よりの出土。

同図13・14・15の3点はいずれも口縁部の小破片で、13は口唇に縦方向の刻文を施す。口縁部直下では叉状工具による横位沈線の一

部がみられるが、沈線の種類（短沈線か長沈線かなど）は不明。沈線は比較的力強く描かれている。第2文様帯以下は不明。器面は表裏ともにナデによって調整されている。器色は茶褐色だが黒ずんだ部分も見受けられる。やや大粒の石英を混入する。焼成は普通。S-11第4層の出土。

同図14は山形口縁の破片で、口縁部に短沈線を深く刻む。口唇上は無文。この標品も第2文様帯以下は不明。器面は表裏ともにナデによって調整されている。色調は暗褐色を呈し、石英を混入する。焼成は悪い。P-12第3層の出土。

同図15は口縁部直下に叉状工具による点刻文を刻む。この標品も第2文様帯以下は不明。口唇上に文様は認められない。器面調整は表裏ともナデ。色調は暗褐色。石英を混入する。焼成は悪い。S-12第2層の出土。

同図16は胴上部の破片で、叉状工具による点刻文が2条横位に施されている。この標品は第1、第2文様帯が不明。頸部は内側へ著しく傾いており、伊波式としては珍しい器形である。器面はナデ調整を行っているが、表裏の一部には擦痕も見受けられる。色調は表裏ともに暗褐色を呈し、石英を混入する。焼成は悪い。R-13第4層の出土。

同図17は胴部の破片で、横位の点刻文が一組認められる。点刻文の上下は無文空白部となっており、第1種か第2種のいずれかに属するものであろう。器面調整の方法は摩耗のため不明。色調は茶褐色。石英を混入する。焼成は普通。表面採集品である。

同図18は胴上部の破片で、点刻文が1組認められる。第1、第2文様帯は不明。器面はナデ調整を行っているが、表面では斜行の擦痕も見受けられる。色調は表面が暗褐色、裏面は茶褐色である。石英を多量混入する。焼

成は普通。P-11第4層の出土。

同図19は胴上部の破片で、横位に中沈線を施す。これも第1、第2文様帯が不明。表裏に擦痕を認めることができる。器色は赤褐色である。石英を多量混入する。焼成は普通。P-12第4層出土。

同図20も胴上部の破片で、横位の短沈線が一組認められる。第1、第2文様帯は不明。器面はナデ調整を行っているが、表面では擦痕も見受けられる。色調は暗褐色。石英の混入量は多い。焼成は良い。P-12第4層の出土。

以上、本トレンチの伊波式土器について記述した。器形のうかがえるものはほとんどないが、第16図1のように大部分は口縁が開くタイプに属するものと思われる。器形で特異なものは、第15図16で、頸部が大きく内彎している。伊波式ではこの種の器形は例外に属する。無文の伊波式についてみると、第16図1は口縁の外反の大きいもので、低平な山形突起を有し、器形は典型的な伊波式に属している。熱田原貝塚（註3）では直口の無文土器が検出されており、伊波期の無文土器には2種の器形のあることが分る。

文様についてみると、上下段の文様では点刻文が多く、中段では羽状文が多い。伊波式の文様特徴をよく表わしているといえる。

施文具の種類は叉状工具が11点、単筥が7点、半截竹管が1点、叉状工具と単筥を組み合わせたものが1点あり、叉状工具を使用したものが最も多かった。

施文部位は、すべて小破片で明確なものはないが、従来の資料からすると、口唇部と口頸部に限定されるとおもわれる。

器面はほとんどナデによって調整されている。表裏両面に擦痕を施すものは、細分不能のものに4点、外面のみに擦痕を施すものは5点、内面のみというものはない。擦痕は器

面全体に及ぶものはなく、部分的に施されており、残りの大部分はナデ調整を行っている。

混入物は石英やチャートであるが、石英が圧倒的に多い。焼成は一般に悪く、したがって脆弱である。器色は茶褐色、暗褐色のものが多い。

総数28点のうち細分可能なものは13点で、その中では第2種が最も多く（8点）、第1種がこれに次ぎ（3点）、第3種（2点）は最も少なかった。この28点は焼土層より上の層で検出されており、本来、焼土層下にあったものが、後に何らかの理由で焼土層の上に持ち上げられたと考えられるもので、同様の状況は先に報告を行ったSトレンチやTトレンチでも観察された。伊波式は第7表記載のように各層で検出されたが、先述のような出土状況から、今回の資料は編年資料としては不適であり、あえて各種間の先後関係の吟味は行なわなかった。

第9表 伊波式における擦痕の残存状況

種別	擦痕の有無					計	
	両面	外面のみ	内面のみ	両面なし	不明		
第1種				3		3	
第2種	I			3		3	
	II						
	III						
	IV				2		2
	V						
	VI						
	VII				1	1	2
不明				1		1	
第3種		1		1		2	
不明	4	4		7		15	
計	4	5		18	1	28	

b) 荻堂式土器

本トレンチで出土した荻堂式土器は第17、18図に示すもののほか、図示を省略したもの

が23点あり、合計53点となる。すべて小破片で、完形品はない。今回の資料は口縁が35点、残りの18点は頸胴部の破片である。

第10表 各発掘区における荻堂式の出土状況

発掘区 層序	M	N	O		P		Q		R			S			区 不明	計
	12	12	11	12	11	12	11	12	11	12	13	11	12	13		
排水溝					1		1				2		1		3	8
I				1												1
II				4								1	1			6
III			1	1						3			1			6
IV			4	2	2	10	1	1	6	1	2	1		2		32
計			5	8	3	10	2	1	6	4	4	2	3	2	3	53

イ) 器形

荻堂式には壺形と深鉢形の2種があるが、今回の出土資料のうち器形の判明する口縁破片についてみると、総て深鉢形で明確な壺形は検出されていない。深鉢形の器形については本誌第2号において、次の2種に分類されている。

i) Aタイプ

口縁が開き、径の最大が口縁にあるもので、胴部の脹らみの弱いもの。

ii) Bタイプ

胴部が脹らむもので、胴の最大径が口径とほぼ同じか、それより大きいもの。

以上の2種であるが、本トレンチの口縁部破片は小破片が多く、したがっていずれが多いか明確にし得ないが、大部分は第17図1のようにBタイプに属するものではないかと思われる。

山形口縁のうちやや形の分るのは4点で、

そのほか不明瞭なものが5点ある。山形口縁は山形頂部の肥厚するものと、肥厚しないものの2種に大別される。山形頂部の肥厚しないものは第18図3の1点で、同図6もこれに含めてよいかと考えられる。山形頂部の肥厚するものは同図10~12の3点である。

本トレンチでは瘤状を呈するものが3点検出され、本誌第2号では、(イ) 肥厚部外面が凹面を形成するもの、(ロ) 肥厚部外面がV字状に尖がるもの、(ハ) 肥厚部外面が平坦なもの3種に分けられている。本トレンチでは(イ)と(ロ)の2種は検出されたものの、(ハ)の形態は見受けられなかった。

(イ)に含まれるものは第18図10の1点で、(ロ)に含まれるものは同図11の1点である。

12は前記の分類からはずれるものであるが、山形頂部を肥厚させており、荻堂式の特徴を示している。同図9は縦位の凸帯を口唇に鞍状に貼付するもので、これも一種の山形突起とみることができる。

サイズは口径を基準とすると20センチ前後の大型、15センチ前後の中型、10センチ前後

の小型の3種に大別される。本トレンチ出土の口縁破片のうち口径の推算可能なものについてみると、大型に含まれるものはなく、15センチ前後の中型が3点（第18図1、2、16）、10センチ前後の小型が4点（第18図3、5、

8、17）であった。

本トレンチでは伊波、荻堂期のものとみられる底部が7点出土している。すべて平底であることから荻堂式の底部も平底とみていいと思われる。

第11表 荻堂式の文様別出土状況

種類 層序	第1種								第2種	第3種					第4種	第5種	不明		計	
	イ		ロ		ハ			不明		i		ii					又	単		
	又	単	又	単	又	単	半(?)	又		単	又	単	又	単						半(?)
排水溝						1			1								5	1	8	
I															1				1	
II						1	1	2							1			1	6	
III												1			3		1	1	6	
IV					1	7									1		16	7	32	
計					1	9	1	2	1			1		1	5		22	10	53	

（注）半截竹管工具によるものは分類不能で、(?)を付した。

ロ) 文様

本トレンチの資料について、施文部位を見てみると、文様は口唇部と口頸部に限られているようで、胴下半部と解されるものに施文する例は見受けられない。文様要素は連点文、押し引き文、鋸歯文などがあり、点刻文も僅かながら確認できる。施文具は又状工具が最も多く、次いで単筒工具、そして半截竹管状工具は2例だけであった。

文様は器面調整を行ったあと施文する。器面調整の方法についてみると、ほとんどがナデを行っており、53点のうち44点認められた。また、部分的に擦痕を施すものがあり、表裏面に認められるものは2点、表面だけのもの5点、不明2点、裏面だけのものはない。擦痕の認められるものは全体的に少なかった。

次に文様について説明する。本誌第2号では文様の種類やその組み合わせは5種に細分されている。本トレンチではそのうち4種は

得られたものの、無文の荻堂式（第5種）は未発見であった。

第1種

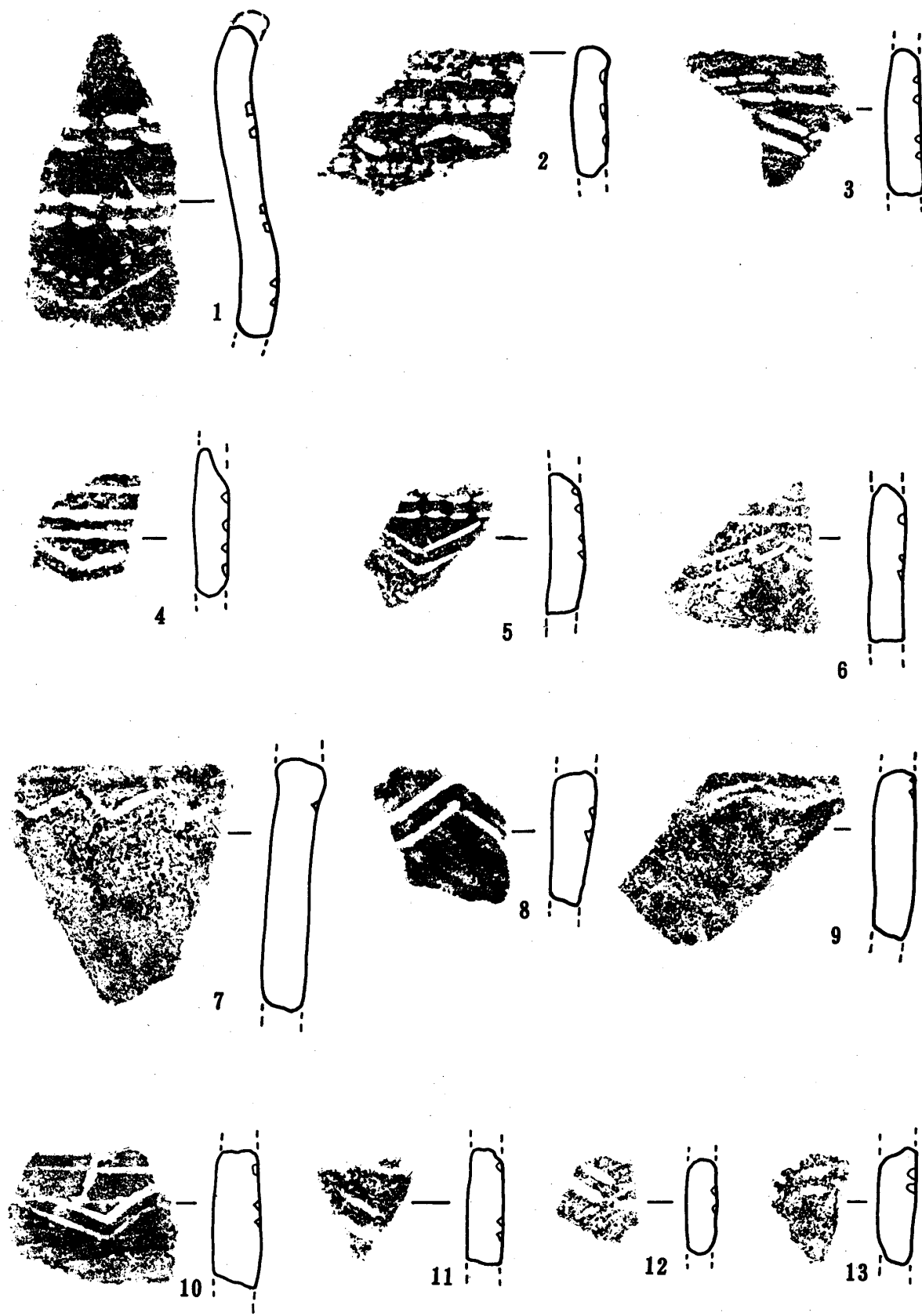
横位の沈線や連点文などと鋸歯文を組み合わせるもので、鋸歯文の施文部位により次の(イ)～(ハ)の3種に細分される。

(イ) 文様帯の中間にのみ鋸歯文を施すもの。

(ロ) 文様帯の中央部（第2段目）および最下段に鋸歯文を施すもの。

(ハ) 文様帯の最下段のみ鋸歯文を施すもの。

第1種の資料は第17図1～13の13点で、すべて頸部や胴部の小破片である。したがって上記3種のどれに属するか、細分はむずかしい。



第17图 荻堂式土器

0 5cm

第17図1は、口縁部の破片で口唇部をわずかに欠くが、文様の展開状況を知りうる数少い資料である。文様は2組の横位連点文の下方に鋸歯文を組み合わすもので、後者も連点文によって描かれている。以上の特徴から第1種(ハ)に属する資料とみていい。文様はいずれも深く施文されている。O-11第4層よりの出土。

同図2は口縁部の破片で口縁直下に単筒工具による押し引き文を2組左から右に施し、その下に同じ工具によって鋸歯文を描き、その下に同種工具による横位の押し引き文を施している。以下の文様は不明だが、(イ)か(ロ)のいずれかに属するものであろう。器面は摩耗し、文様は消えかかっている。S-11第2層よりの出土。

同図3~13の11点は、最下段に鋸歯文を施すもので、(ロ)か(ハ)のいずれかに属するものであろう。3、11、12の3点は短沈線を用いて鋸歯文を描くもので、3、12の2点は最下段の鋸歯文とみられる。3の鋸歯文上方の文様は点刻文と短沈線文の組み合わせとなっている。文様はいずれも力強く描かれている。3は排水溝、11はO-11第4層、12はS-11第4層の出土である。

同図13は点刻文によって鋸歯文を描く珍しい文様である。下方に無文空白部のあることから、この鋸歯文はおそらく最下段のものであろう。点刻文は深く刻まれている。P-12第4層の出土である。

同図4、5、6の3点は又状工具による連点文を横位に施し、下方に同種工具による鋸歯文を刻む。5、6の2点は最下段の鋸歯文である。4の鋸歯文の施文部位は不明。5、6の鋸歯文は中沈線。4は短沈線に近い。施文は4がやや力強く、他はそれより浅いが、文様はいずれも鮮明である。4はR-12第4

層、5はO-12第3層、6はS-12第2層よりの出土。

同図7は胴部の破片で最下段の鋸歯文を残すもので、鋸歯文は単筒によって描かれ、シャープである。鋸歯文上方の文様は不明。O-12第2層よりの出土。

同図8も鋸歯文のみを残すもので、上方の文様は不明。おそらく最下段の文様であろう。鋸歯文は又状工具によって描かれ、中沈線による構成と思われる。S-12第3層よりの出土。

同図9は半截竹管によって鋸歯文を施すもので、最下段のものであろう。器面は摩耗し、文様は消えかかっている。O-12第2層よりの出土。

同図10も文様帯下方の資料で、文様は横線も鋸歯文もすべて沈線によって構成されている。施文具は又状工具を使用し、施文はいくらか浅めだが、文様ははっきりしている。鋸歯文は中沈線によって描かれている。S-13第4層よりの出土。

第2種

横走る文様の最下段に斜沈線、または斜行の点刻文などを施すもので、本トレンチでは1点(第18図1)だけ検出された。

本標品は口縁部の破片で、文様は又状工具を用いて、口縁部に3組の連点文を横走させ、その下方に短沈線による斜行文を描いている。短沈線の斜度はゆるやかで、水平に見える部分もある。施文は浅いが、文様ははっきりしている。口唇上は無文。この土器は非常に薄く器壁は約4ミリである。口径は推算14.5センチ、排水溝よりの出土。

第3種

口縁の文様が水平方向の文様に終始するも

ので、本遺跡のものは下記のように2種に細分されている。

- i) 横位文様の上下の間隔が比較的密なもの。
- ii) 上記の文様が等間隔を置いて施されるもの。

本トレンチではこの種の明確なものが1点、これに含めてよいかと考えられるものが1点検出されている。

第18図2は口縁の破片で、叉状工具を用いて3組の連点文を口頸部に施文する。連点文の上下の間隔は8～9ミリである。下位の2列の連点文は一部弧状をなす部分もある。叉状工具はやや幅広のものを使用している。上記細分の(ii)に属する資料である。口唇上は無文。R-12第3層の出土。

第18図3は山形口縁左半部の破片で、口縁部と口唇部に文様を施文する。いずれも半截竹管状工具によって描かれている。口縁部の文様は3条の押し引き文で、上方は約1.2センチ、下方は約8ミリの間隔で描かれている。施文は力強く、無文部は盛り上ったように見える。口唇部の文様も同種工具を用いたもので、爪形状の弧文となっている。下方における文様の有無は不明だが、もし、施文されていたとすれば、第1種の(ハ)か第2種になる可能性もある。しかし、もし、横位の押し引き文に終始したとすれば、本項の(ii)に分類すべきものである。O-12第2層の出土。

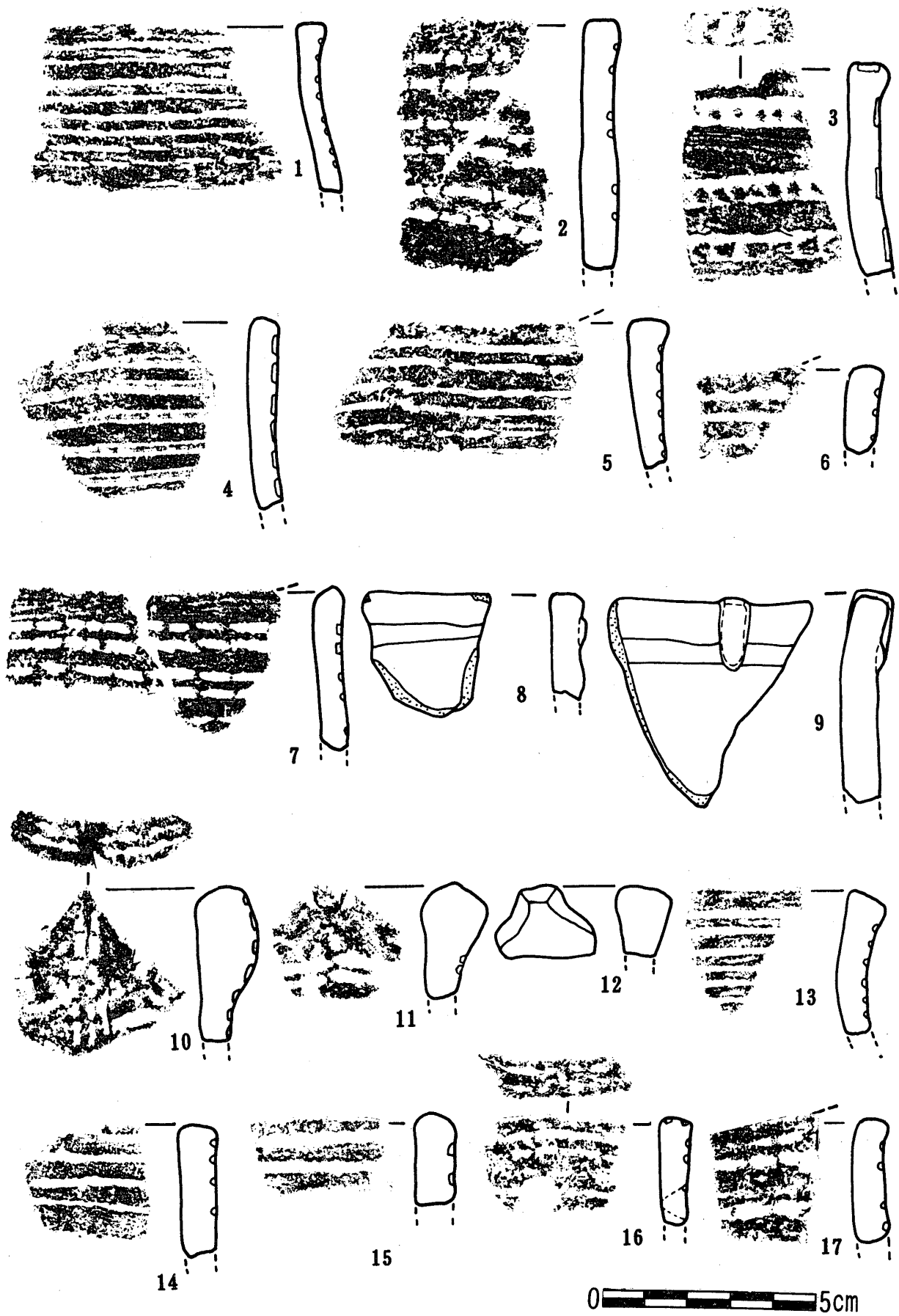
同図4～7の4点は口縁の破片で、第1文様帯だけを残す資料だが、第1種(ハ)か第2種、あるいは第3種のいずれかに属する資料である。同図4は押し引き文が6条認められる。施文は浅い。Q-11の出土だが出土層は不明。同図5は山形口縁の左半部の資料で、

横位の連点文が3条認められる。Q-12第4層の出土。同図6も山形口縁の破片で2条1組の沈線文が2組認められる。S-12の出土だが、出土層は不明。同図7も連点文を施すもので、排水溝よりの出土である。以上の4点は口唇上無文。

第4種 (凸帯を貼付するもの)

凸帯を貼付するものは、第18図8、9の2点である。この2点は焼成、色調、その他の特徴が一致しており、接合はできないが、同一個体の破片と考えられる。8は口縁にそって断面がほぼ四角形の凸帯を1条貼付する。その他の文様はみられない。9も口縁破片で、同種の凸帯を口縁にそって1条横位に貼付し、その上方に縦位の凸帯を貼付する。縦位の凸帯は口唇上に及び、山形突起の1種とみなすことができる。この口縁は右端が上昇きみで、波状口縁の一部のようにも見受けられる。8はR-12第3層、9はP-12第4層よりの出土。

同図10、11、12の3点は波状口縁の破片で、10は本誌第2号の瘤状の分類からすると(イ)の肥厚外面が凹面を形成するものに属する。比較的大型の突起で、荻堂式の中では雄渾の部類に属するであろう。文様は叉状工具によって凹面から頸部に縦位の連点文を1組施し、同種の文様を口唇部および口縁部にも施文する。R-12第3層の出土である。11は細分の(ロ)に属するもので肥厚部外面がV字状に尖がる。比較的小型の瘤状突起である。文様は瘤状突起下に叉状工具による横位の連点文を施文する。しかし、下端欠損のため文様の全体像は不明。O-12第1層の出土。12は瘤状突起とは異なるが、山形頂部を肥厚させており、荻堂式の特徴を具備している。文様の有無は不明。P-12第4層よりの出土。



第18图 荻堂式土器

細分不能な荻堂式土器

第18図13～17の5点の破片は、文様、その他の特徴から荻堂式に属することは間違いなが、破片が小さく文様の全体的構成がつかめず、いずれに細分すべきか不明のものである。このような荻堂式土器の破片は全部で28点出土し、そのうち5点を図示した。

同図13は口縁部の破片で、口縁にそって沈線を施すもので、3組認められる。沈線は又状工具によって描かれている。口唇上は無文。14も口縁破片で先の尖がった単篋を用いて刺突文を連続的に施す。本標品では4条認められる。口唇上は無文。山形口縁の右半部の資料である。15も口縁の破片で、単篋によって押し引き文を施すもので、2条認められる。口唇上は無文。16は有孔の口縁資料で口唇部には又状工具によって連点文を施す。連点文は小型で浅い。口縁部にも連点文を施す。連点文は2組認められ、口唇部のものより若干大きい。施文は雑である。孔は両面より穿たれているが、表面の方を多く加工している。径は約5ミリ。17は山形口縁の破片で口縁にそって連点文を繞らす。口唇上は無文。13はR-11第4層、14はO-11第3層、15はR-11第4層、16はS-13第4層の出土。17は表採品である。

胎土および混入物

胎土は一般にやや粗い。混入物は石英だけのものと、石英の他にチャートを少量混ぜるものの2種に分けられる。出土量は前者が14点、後者が39点であった。混入物はほとんどが2ミリ以内のものであるが、稀に3～4ミリの大粒の石英なども見受けられる。

擦 痕

器面はほとんどナデによって調整されてい

て、両面に擦痕を施すものは2点のみで、外面に擦痕を施すものは5点、内面にのみ施すものは今回は見受けられなかった。総数53点のうち擦痕を施すものはわずか7点である。

第12表 荻堂式における擦痕の残存状況

種別	擦痕の有無					
	両面	外面のみ	内面のみ	両面なし	不明	計
第1種	イ					
	ロ					
	ハ		2		9	11
	不明		1		1	2
第2種				1		1
第3種	i					
	ii	1			1	2
第4種				5		5
第5種						
不明	1	2		27	2	32
計	2	5		44	2	53

焼成、器色

焼成は一般に悪く、脆弱なものが多い。そのため器面の摩耗したのも多い。器色は暗褐色や茶褐色を呈するものが多く、稀に赤褐色を呈するものなども見受けられる。また煤けて部分的に黒色を呈するものもみられる。

層位的出土状況

本トレンチの荻堂式土器は第1層～第4層の各層で出土しているが、第4層では32点検出され比較的多かった。しかし、第1～4層は本来の荻堂式の層ではないので、おそらく下層から何らかの理由で、上層に持ち上げられたものである。

伊波か荻堂のいずれかの資料

伊波か荻堂式のいずれかに属するものであるが、破片が小さかったり、文様帯の部分が破損したりして、型式決定の困難なものが12点ある。その内3点は口縁部の破片で、あとの9点は胴部の破片である。文様は連点文が多く、大部分は荻堂式に属するかとみられるが、小破片のため決定を保留した。中には伊波式とみられるものもある。

C) 大山式土器

出土量

本地区の大山式土器は第19図1～9、第20図1～20、第21図1～4、第22図1に示す34点である。完形品の出土はなく、すべて破片である。その内5点は推定復元が可能であった。

第13表 大山式土器の出土状況

トレンチ グリット 層序	O		P		Q		R		S		計
	12	11	12	12	11	12	13	11	13		
排水溝		3		1			1		1		6
第I層		1									1
II	2								1		3
III						3	2				5
IV		2	8	1	1	2	4	1			19
計	2	6	8	2	1	5	7	2	1		34

器形

本区出土の大山式の器形については推定復元を試みた5点と、その他器形のうかがえる資料を見た限りでは、壺形に属する資料はなく、ほとんどが深鉢形である。

深鉢形は径の最大が口縁にあるものと胴部にあるものの二種に分つことができる。器形の判明する10点についてみると、前者は4点で、後者は6点である。また後者は径の最大

が胴下半部にくる例はないが、上半部の場合頸部に近い位置のもの(2点)や胴中央部に近い位置のもの(4点)など、若干のヴァリエーションがみられる。

口頸部の形状についてみると、第19図5・6の2点はやや直線的に開く器形に属するが、他は程度の差こそあれ、頸部が若干しまり、口縁部が外反するという器形に属し、後者の出土例が圧倒的に多い。第19図5は第4層、同図6は第3層の出土である。

口縁部は平口縁が一般的であるが、その中で、完全に水平でなく、緩やかな波をうつ口縁が1点(第21図4)ある。第4層の出土である。

大山式のサイズは推定復元を試みた5点の他に、口径だけについてみると推算可能なものが10点あり、最大は約21センチ、最小は約7センチであった。10センチ以下のものは1例だけで、他は10センチ以上のものであるが、これらは大型(20センチ前後)、中型(15センチ前後)、小型(10センチ前後)の3種に細分され(第14表)、中型が比較的多い。

大型に属するものは第19図7と第22図1の2点で、前者の口径は推算19センチで、後者は推算21センチである。中型のものは最も多く、7点認められた。中型の最小は13センチ強のものが2点、最大は15センチで、15～18センチのものはなかった。小型(12センチ以下)は5点で、超小型のものが1点ある。小型の場合、ふつう口径が10センチ以下というのは稀で、前述の1点(第19図9)は壺形の可能性も考えられる。第4層の出土。

次に器高であるが、確実なものは1点もない。ただ、推定復元を試みたものについてみると、第22図1は約27センチ、第21図1～4の4点は20～23センチの範囲にあり、いずれ

も20センチを超している。

底部については大山期のものとみられるものが3点あり、すべて平底である。この3点については後項で詳述するが、その中にはカ

ヤウチバンタ式土器の底部も含まれているとみられるから、この3点はすべて大山式のものとするわけにはいかない。

第14表 大山式土器の推算口径

No	文様	図版	推定口径(cm)	サイズ	出土グリット	備考
1	第1種	第22図1	21.0	大型	R-13 第3層	器高推定 26.7 cm
2	"	第19図7	19.2	"	P-12 第4層	
3	"	第21図4	15.0	中型	R-12 第4層	器高推定 20.8 cm
4	"	第19図5	14.8	"	P-12 第4層	
5	"	第21図2	14.8	"	S-11 第4層	器高推定 22.6 cm
6	"	第21図3	14.4	"	S-11 移行層 F-13 第4層	器高推定 22.0 cm
7	"	第19図4	13.4	"	Q-12 第4層	
8	"	第19図1	12.6	小型	R-13 第4層	
9	"	第21図1	12.5	"	R-12 第3層 S-9 第3層	器高推定 20.7 cm
10	"	第19図2	10.8	"	S-11 第2層	
11	第3種	第20図1・2	14.6	中型	R-13 排水溝	
12	"	第20図5	13.7	"	S-13 排水溝	
13	"	第19図9	7.2	小型	P-11 第4層	
14	不明	第20図12	11.4	"	R-12 第4層	
15	"	第20図20	10.4	"	P-12 第4層	無文

文様

まず、施文部位についてみると、文様は口

頸部に限られ、口縁内面、口唇および胴下半部は施文の対象となっていない。

第15表 大山式土器に使用された単篋・半截竹管工具の篋幅

施文具の幅(mm)	種別		第1種		第3種		第5種		不明		計
	施文具	種別	単篋	半截竹管	単篋	単篋+棒状工具	単篋	単篋	半截竹管		
1.6 ~ 2.5					1						1
2.6 ~ 3.5			4(注)			1		3			8
3.6 ~ 4.5			6(注)		1		1	4	3		15
4.6 ~ 5.5			3	1	1			1			6
5.6 ~ 6.5									1		1
不明									1		1
計			13(注)	1	3	1	1	8	5		32

※棒状工具の幅は省略。

(注) としたものは、中に1個だけ2種類の施文具(3ミリと4ミリ)を使用するものがあり、両項目にふり分けた。そのため合計は13となっているが実際は12個である。

施文具には単篋や半截竹管などが見受けられ、前者が多く使用されている（第15表）。施文具の幅は単篋で最大5.5ミリ、半截竹管で6.5ミリを測るが、両者とも4.5ミリ前後のものが一般的である。また、単篋工具では幅2ミリという小型のものが1例見受けられた。また、第19図9は幅3.5ミリの単篋と幅0.3ミリ前後の棒状工具の両者が使用されて

いる。第21図1は幅3ミリと4ミリの単篋を用いて文様を施している。この2例は異なる施文具を使用する例であるが、一般的には同一の施文具を使用するのが常である。施文具と文様の種類およびその層位的出土状況を第16表に示した。第4層に於ては各種の文様が見られたものの、それらの層位上の変遷をとらえるまでにはいたらなかった。

第16表 大山式土器の施文具・文様別出土状況

層序	工具 文様	半截竹管					計	
		単	篋	工 具				
		押し引き文	横捺刻文	押し引き文	横捺刻文十 押し引き文	横捺文十 斜沈線文	横捺文十斜行 の押し引き文	
排水溝				2			4(注)	6
I				1				1
II			2	1				3
III		1	2	1	1			5
IV		6	5	2	3	1	1	18
計		7	9	7	4	1	5	33

(注) 排水溝出土の4点の内3点は同一個体

横位文様の施文方向は左から右が多く、逆方向のものは6点（第19図3、第20図9・13・16、第21図3・4）だけであった。第20図16は第3層で、他は第4層の出土である。

器面調整については34点の口縁部を検討した（第19表）。表裏両面に擦痕を残す資料は第21図2・3の2点で、図にみる如く、擦痕は両面に著しい。文様帯の部分はナデ調整を行なっているが、擦痕を残す箇所もある。

ナデ調整を表裏両面に施すものは19点みられた。擦痕とナデの両者を併用したもの（表面4点、裏面2点）もあった。器面が摩滅して調整方法を知り得ないものが表面で4点、裏面で1点あった。

前記34点の破片の大半は文様帯の部分でナデ調整を行っている。胴部（文様帯下方）でもナデ調整を示すものがみられるが、確実

な資料は少ない。

以上のことから大山式土器の場合も施文に際しては、文様帯の部分に施された擦痕を消したあと施文するという順序が認められた。

文様の種類は横捺刻文、押し引き文、斜行沈線文、斜行押し引き文、凸帯文などが見受けられ、横捺刻文や押し引き文を横位に2～3条めぐらすのが最も多く、その他、前記横捺刻文や横位押し引き文と他の文様を組み合わせる例もみられた。

これまで本貝塚で出土をみた大山式の文様の種類は下記の通り（註1）であるが、本地区では第2種と第4種は未発見であった。

第1種 横捺刻文か押し引き文に終始するもの（両者を組み合わせた文様もこれに含める。）

第2種 第1種に横位沈線文を加えたもの

- 第3種 第1種に斜行文を加えたもの
 第4種 第1種に羽状文または綾杉文を加えたもの
 第5種 第1種に凸帯文を加えたもの
 次に各種別に記述する。

第17表 大山式土器の文様別出土状況

種別 層序	第1種	第3種	第5種	不明	計
排水溝	1	4(注)	1		6
I				1	1
II	1			2	3
III	2			3	5
IV	9	2		7	18
計	13	6	1	13	33

(注) 排水溝出土の4点の内3点は同一個体

第1種

横捺刻文が押し引き文に終始するもの(両者を組み合わせた文様もこれに含める)で、これに属する確実なものは、第19図4～8、第21図1～4および第22図1の10点である。

横捺刻文の確実な資料は第19図4の1点だけで、縦長の刻文を3条横位に施す。この資料は先端の幅5ミリの単篋を使用しており、施文は深く、文様は鮮明である。第4層の出土である。

第19図1～3も横捺刻文を施すが、下端欠損のため同種文様に終始したかどうかは不明である。同図1は3列の文様のうち上部2段は対になっており、点はやや大きめだが、伊波式の可能性もある。施文の方向は同図3(右から左)を除けば左から右の方向である。この3点の施文具はいずれも単篋工具で、施文具の先端の幅は4ミリと3ミリが認められ、前者は同図2・3、後者は同図1である。同図1・3は第4層、同図2は第2層の出土である。

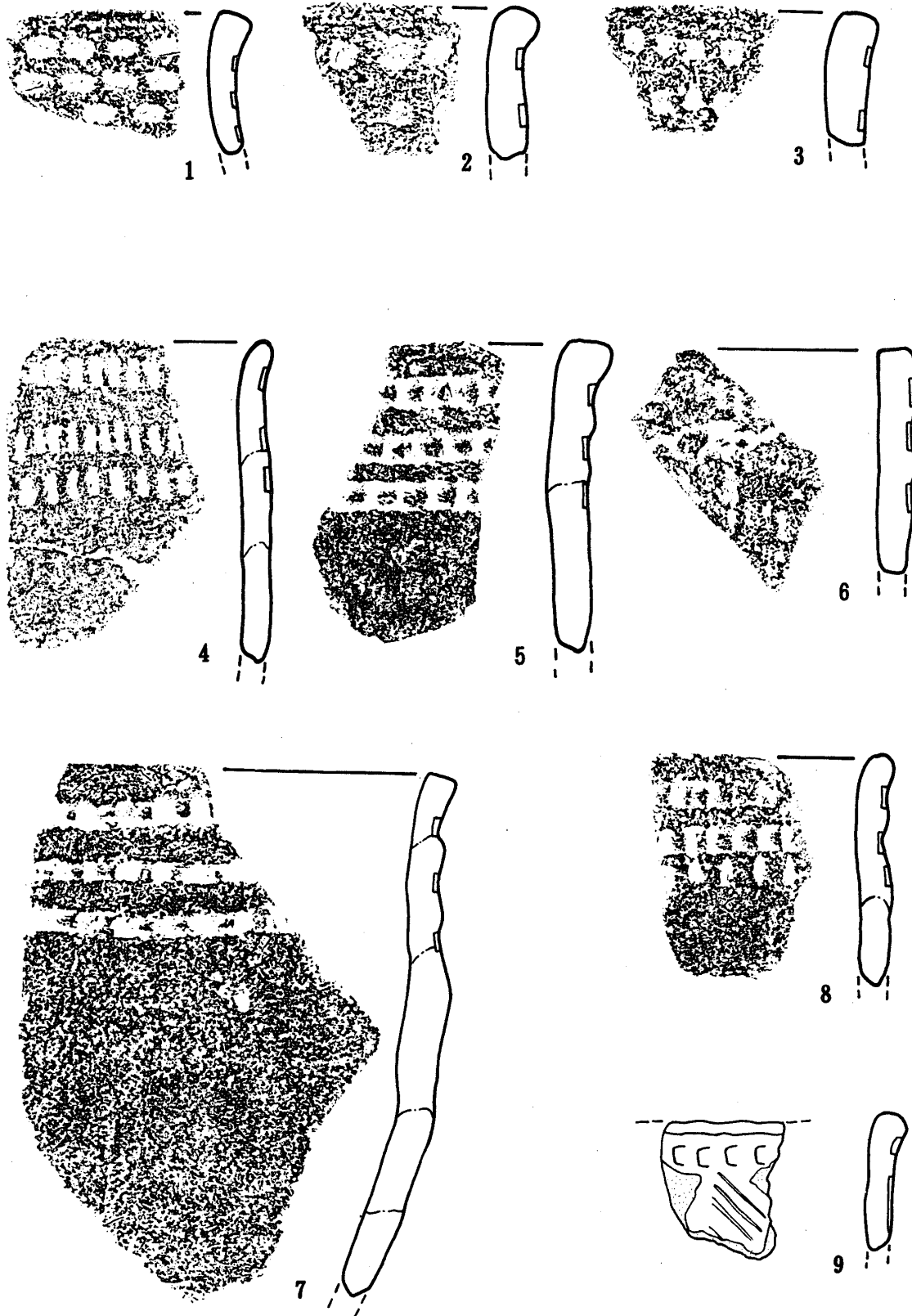
横捺刻文と押し引き文を組み合わせる例は第19図8、第21図2・3の3点で、両者が交互に組み合わせる場合(第21図2)と横位押し引き文の下方に横捺刻文を加える場合(第19図8と第21図3)の2通り認められる。施文は左から右方向であるが、3の一例は逆に右から左の方向を採用している。第19図8の1例は器面摩耗のため文様は不鮮明であるが、他の2例は力強く施文されている。

第21図2・3は先端の幅約4ミリの施文具を使用し、第19図8は3ミリのものを使用している。いずれも単篋工具である。3点とも総て第4層の出土である。

横位の押し引き文のみに終始するものは、第19図5～7と第21図1・4、第22図1の6点で、単篋を使用するものは6・7、第21図1・4の4点、半截竹管を使用するものは第19図5、第22図1の2例のみである。

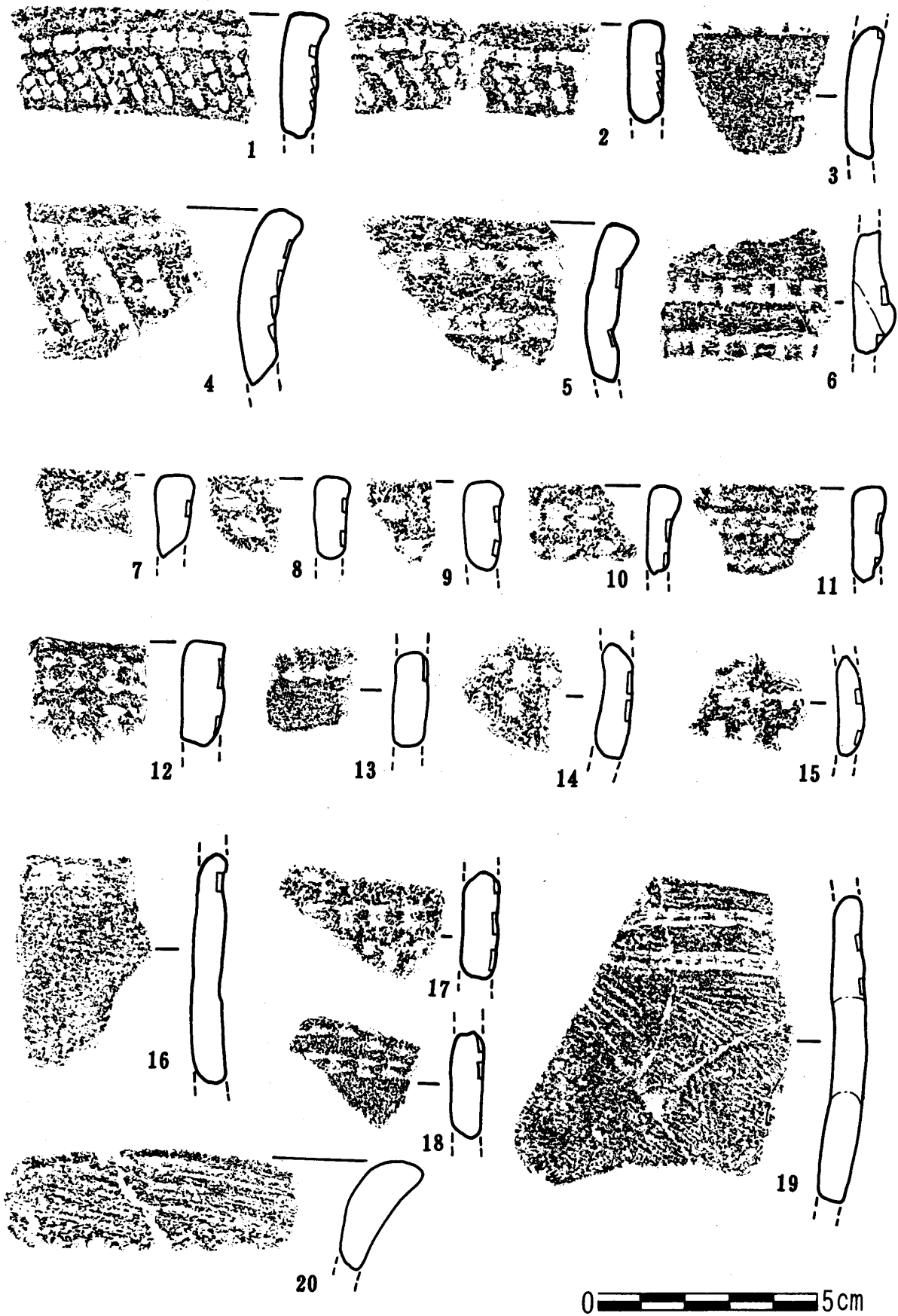
文様は3条施すものと4条施文するものがあり、前者は4点(第19図5～7、第22図1)である。この4点についてみると単篋工具によるものが第19図5～7の3点、半截竹管によるものが第22図1の1点で、いずれも施文具の先端の幅は5ミリである。第19図6は施文が浅く、文様は不鮮明であるが、他は力強く描かれ、明瞭である。文様はすべて左から右の方向である。前者は排水溝の出土で、他は第4層の出土である。

押し引き文を4条施すものは2例である。第21図1は上下の文様に4ミリ幅の単篋を用い中段の2列の文様には3ミリ幅のやや狭い単篋工具を使用するという珍しい例であるが、他方、文様構図の上でもやや特異なものをもっている。つまり、第3段目の文様が一部で第2段目へ移行し、そして、また第3段目へ下るといふ、いわば凸状(∪)の構成をとることである。奄美の土器にはステップ状

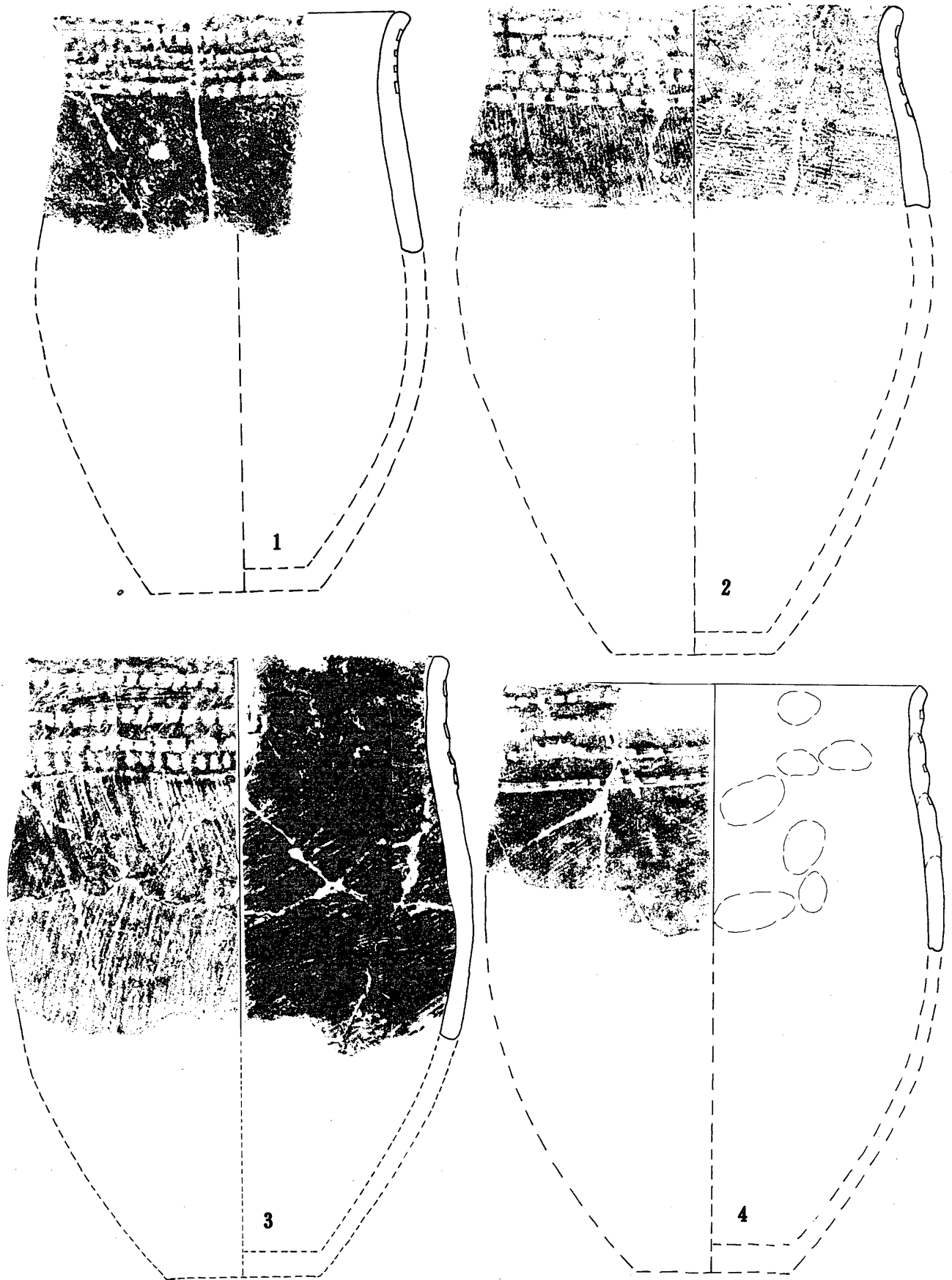


0 5cm

第19图 大山式土器



第20図 大山式土器



第21図 大山式土器

の構成をとるものがあり、それとの関係が考えられる。施文は左から右の方向である。この破片はS-9第3層のものとR-12第3層出土の破片を接合したもので、本誌第4号においても紹介した。

第21図4も4条施文する例で、篋幅は小さく、約3ミリである。押し引き文を施すが、連続しない部分もある。施文の方向は右から左で、深く刺突する部分も見受けられるが、全体的には浅めである。R-12第4層の出土。

以上の12点が第1種の確実なものである。

第3種

横捺刻文や押し引き文を何条か施し、その下方に斜行の沈線文あるいは、押し引き文を加えるもので、これに属するものは第19図9および第20図1～5の6点である。

第19図9は口縁部に施文具の先端が3.5ミリ幅の施文具を用いて横捺刻文を1条左から右の方向に施し、その下方に先端の尖った棒状工具で描いている。口縁にそう押し引き文はやや明瞭であるが、斜沈線文は浅く、不鮮明。頸下半部欠損のため文様帯下端の状況も不明。第4層の出土。

第20図1～3は同一個体に属する破片であるが接合はできない。3は1や2の下方にくる胴部の破片である。文様は頸部の上下にそれぞれ押し引き文を1条施し、その間を右傾の斜行押し引き文で埋める。横位の押し引き文は左から右の方向で描かれ、斜行のものは上から下の方向で描かれている。文様はいずれも力強く押し引きされ鮮明。施文具の先端の幅が2ミリ前後という小型の施文具を使用している。これらの3点は排水溝の出土である。

第20図4も口縁の破片で、口縁にそって押し引き文を1条施し、その下方に右傾の押し

引き文を描く。文様帯下端の状況は不明。先端の幅5ミリ前後の施文具で施されている。文様は横位の押し引き文は左から右の方向、斜行文は上から下の方向で、いずれもやや強く描かれている。第4層の出土。

第20図5は口縁にそって2条の押捺刻文を横走させ、その下方に幅広の斜沈線文を描いている。下方の斜行文は2本認められ、同標品の左側下端は斜行文にそって割れている。施文具は先端の幅4.5ミリの単篋で施され、押し引き文はやや浅めだが、斜行文は深く刻まれている。排水溝の出土。

第4種

第1種に羽状文または綾杉文を加えるものだが、本地区ではこれに分類される資料はなかった。

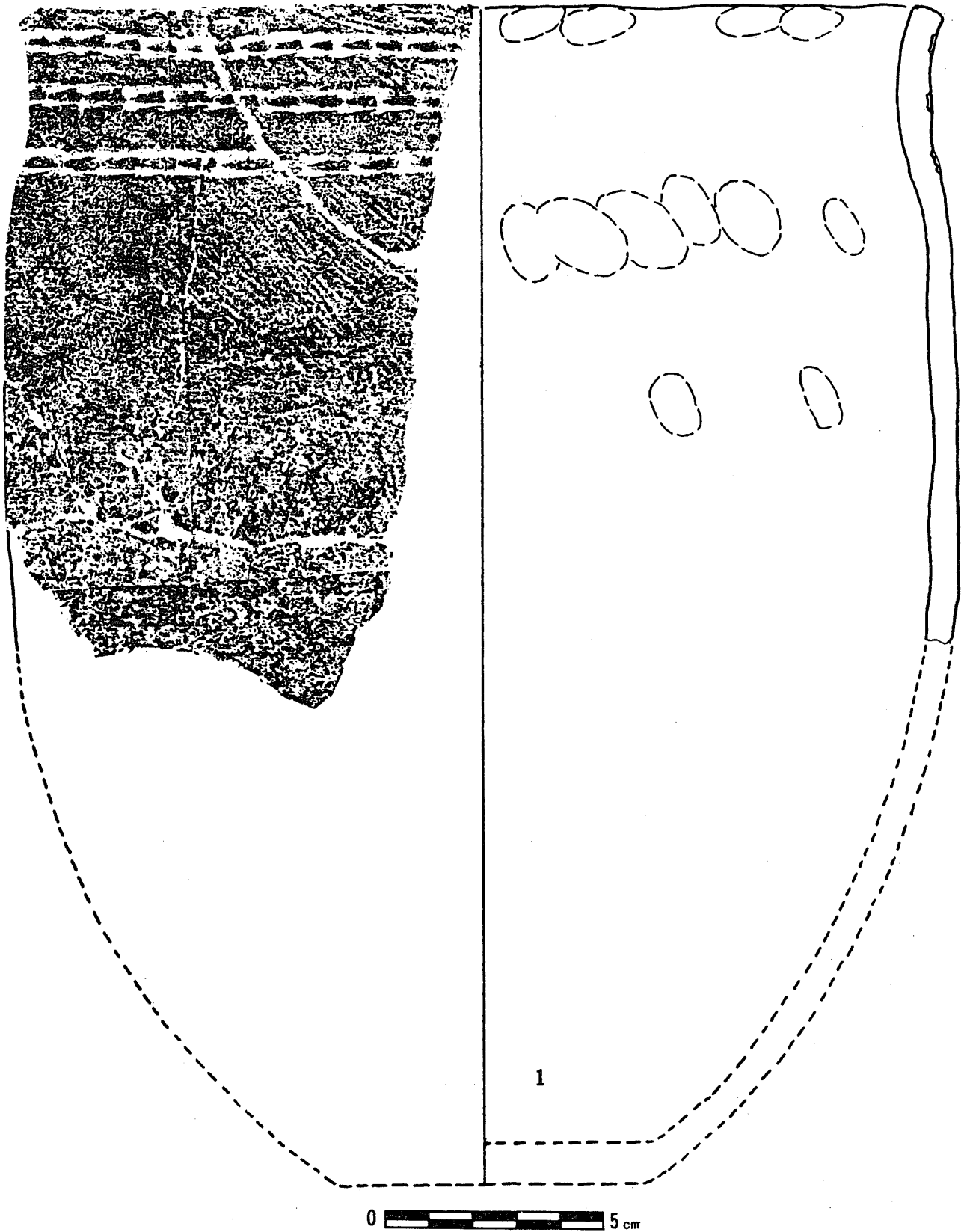
第5種

第5種は第1種に凸帯文を加えたもので、これに分類されるものは、第20図6の1点だけであった。断面方形の扁平な凸帯の上下に先端4.5ミリ幅の単篋を用いた押し引き文がそれぞれ1条認められる。凸帯はやや規格的で、押し引き文も深く明瞭である。排水溝の出土。

分類不能のもの

ここにまとめるものは第20図7～19に示す13点で、幅広の単篋工具や半截竹管などによって横捺刻文や押し引き文を施し、大山式に分類できるものであるが、小破片のため文様による細分が困難なものである。

このグループに使用された施文具を見ると幅4ミリ前後の単篋工具と半截竹管がほぼ半々に用いられている。単篋で横捺刻文を施すものは第20図7～9、14～17、19の8点で、



第22図 大山式土器

押し引き文を施文するものは4点であった。同図17は横捺刻文と押し引き文を組み合わせたもので、2条の横捺刻文の間に1条の押し引き文を認めることができる。この標品は第1種の可能性のあるもので、第3層の出土。

半截竹管を用いるグループは第20図10~13、18の5点で、押し引き文を施す。

第20図18の資料は横位に2条の押し引き文を残し、上段の文様はやや曲線を描く。施文は浅い。焼成、色調等から荻堂式の可能性がある。第4層の出土。

無文土器

第20図20は大山期に属するとみられる無文の土器で、口縁の外反が著しく、特異な形態を有する。外面には若干擦痕が見受けられるものの、全体的にはナデ調整を行なっている。焼成は悪く、吸水性のやや強い土器である。器色はチョコレート色に近い暗褐色で、胎土の混入物は石英を主体に、磁鉄鉱も散見される。口径約10センチ、深鉢形であろう。以上の特徴から大山期末、室川式に近い時期のものとみられる。第4層の出土。

第18表 大山式土器の混入物

混入物	分類	第1種	第3種	第5種	不明	計
石	英	13	3	1	13	30
石英	磁鉄鉱		3		1	4
計		13	6	1	14	34

胎土及び混入物

胎土は一般的に粗く、粒子の細かなものはみられなかった。

胎土の混入物は2種類確認できた。すなわち石英のみを含むものと、それに幾らかの磁鉄鉱を混ぜるものの2種である。両者の出土

量を第18表に載せたが、磁鉄鉱を含むものは少なかった。

焼成および器色

焼成の良好なものは数点で、他は普通か、やや悪い方に属する。したがって一般的に脆い土器ということになる。

器色は茶褐色のものが一般的だが、中には黄褐色のものや赤褐色のものなどが若干含まれ、煤けて黒色を呈する部分もある。また、大山期のものはチョコレート色に近いものもあり、この種の器色は大山期末ごろのものに多い様である。

第19表 大山式土器における擦痕の残存状況

擦痕の有無 種別	両面	外面のみ	内面のみ	両面なし	不明	計
第1種	2	2	2	6	1	13
第3種				6		6
第5種				1		1
不明		2		8	4	14
計	2	4	2	21	5	34

擦痕

大山式の器面調整についてみると、ナデ（両面なし）によるものが、全体の3分の2を占め、両面に擦痕を施す例は2点、外面か内面のいずれかに施すものは6点であった。

出土状況

大山式土器は第13表にみられるように34点の出土であった。

それらの層位別出土状況をみると第1層で1点（約3%）、第2層で3点（約9%）、第3層で5点（約14.7%）、第4層で19点（約55.8%）、排水溝で6点（約17.5%）とな

っており、第4層で最も多かった。大山式内部の序列について考えてみたが、利用できる層位上の資料がなく、見通しを得るまでにはいたらなかった。

d) カヤウチバンタ式土器

本地区採集のカヤウチバンタ式土器は45点で、すべて破片である。そのうち比較的大きな口縁破片5点については、図上復元を試みた。この45点の資料は、大山期後半から室川上層期に位置付けられる。本型式の細分編年は未だ確立していないので、本文では各期ごとに分けて記述する。

第20表 カヤウチバンタ式土器出土表

期別 層序	大山期	室川A期	室川B期	室川上層A期	室川上層B期	計
排水溝		2				2
I		1				1
II	1				2	3
III	4	7			1	12
IV	19	1		2	5	27
V						
計	24	11		2	8	45

i) 大山期の資料

今回採集された各期のカヤウチバンタ式土器の中では大山期のものが最も多く、24点の出土をみた。そのうち5点については、先述のように図上復元を試みた。器種は深鉢形に属し壺形は見受けられなかった。層位上の出土状況は第20表の通りである。

深鉢形の器形は概ね2種に分かっことができる。(1)は胴部がやや張り、頸部で多少しま

り、口縁部でわずかに外反するタイプと(2)他は底部から口縁部に向けて鉢形に開くタイプである。第23図2の1点は後者の資料で、全体的に口縁へ向けて開くタイプとなっている。破片が小さく口縁の形状のはっきりしないものも若干あるが、判明するものについてみるとほとんどが前者(1)に属し、これが本地区におけるカヤウチバンタ式の一般的器形のものである。

口縁の推算可能なものが10点あり、その中で最も大きいものは約20センチ、最小は約10センチで、15センチ前後の中型が最も多い。

今回の資料には底部までつながるようなものがないので、底部について確実な資料を提示することはできないが、これまでの例に従えば、平底を想定してよいと思われる。

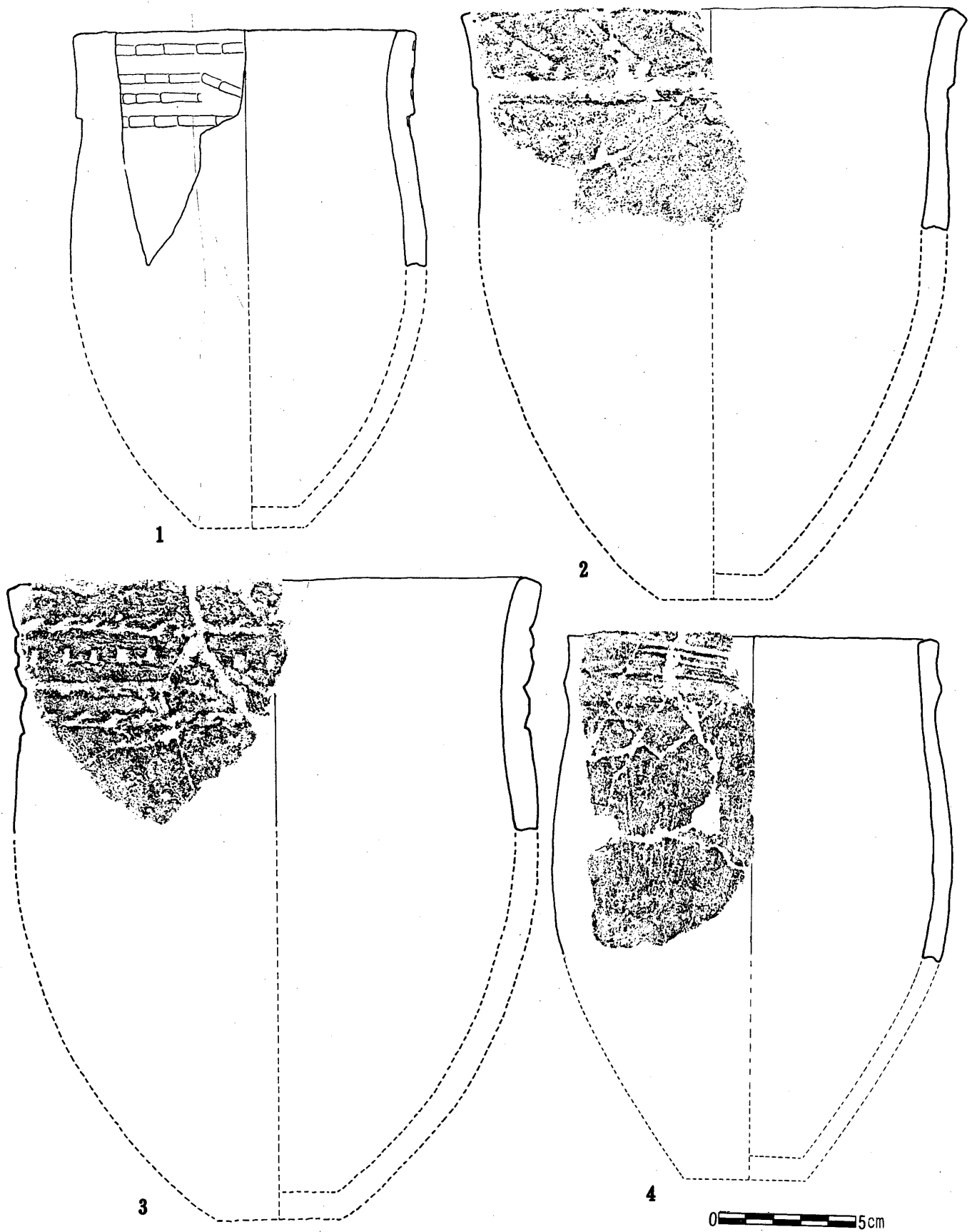
本期に属する24点のうち文様を施すものは7点である。文様は口縁の肥厚帯外面および同直下に施され、それ以下は無文であるが、口唇および口縁内面も無文であり、施文部位はかなり限られている。

施文には単筥工具を使用し、叉状工具や半截竹管状工具は認められない。単筥工具は先端が方形状のものを使用したとみられる。

文様は横位押し引き文、斜行文、羽状文、爪形類似文などが施文されている。

第23図1は肥厚部外面および同直下に押し引き文を横走させる例で、肥厚部に3条、同直下に1条施している。肥厚部の3条のうち、中央の押し引き文は途中で、下方へ傾斜し、ステップ状の文様を構成する例かとみられる。文様は左から右の方向で描かれている。施文はきわめて浅く、また器面は摩耗しており、文様は不鮮明。単筥の先端の幅は約5ミリ。ピットR-11第4層の出土。

同図2は肥厚部外面および同直下に施文する。肥厚部外面は右下りの斜行の押し引き文



第23図 カヤウチバンタ式土器

を約3センチ間隔で施文する。施文は上から下の方向である。肥厚部直下では横位の押し引き文を1条施す。文様は左から右の方向で描かれている。施文はいずれも浅く、文様は不鮮明。これも約5ミリの先端をもつ単篋を使用している。ピットR-11第4層の出土。

同図3も肥厚部外面および同直下に施文する例である。肥厚部外面の文様は2列の横捺刻文で構成され、上段の1列は斜め方向の施文となっており、斜行文類似の文様となっている。肥厚部直下の文様も2列の横捺刻文よりなる。この2列の上下の間隔は約1.8センチで、肥厚部下の文様帯としては幅広い方に属する。上下の横捺刻文はそれぞれ方向の異なる斜行文となっており、1種の羽状文を構成する。4列の文様はいずれも左から右の方向で描かれている。施文は深く、大山期独特の施文手法とみていい。これも先端約5ミリの単篋工具を使用している。ピットR-11第4層の出土。

第24図1は口縁肥厚部の小破片で、文様は肥厚部のみに施文するものようである。まず、肥厚部の上下に押し引き文を横走させ、次に両者の間を左下りの押し引き文で埋める。横走の押し引き文は左から右の方向で、斜行の押し引き文は下から上の方向で描いている。この種の構図は市来式の貝殻文の中にも見受けられ、それを模倣したものかとも考えられる。施文はいずれも浅く、文様は不鮮明。使用の篋幅は約5ミリである。ピットQ-12第4層の出土。

同図3は口径約16センチの深鉢形で、肥厚部外面および同直下に施文する。肥厚部の文様は2条の押し引き文で、いずれも力強く、左から右の方向に描かれている。肥厚部直下の文様も押し引き文で、左から右へ力強く描かれている。篋幅は約4ミリ。ピットR-11

第4層の出土。

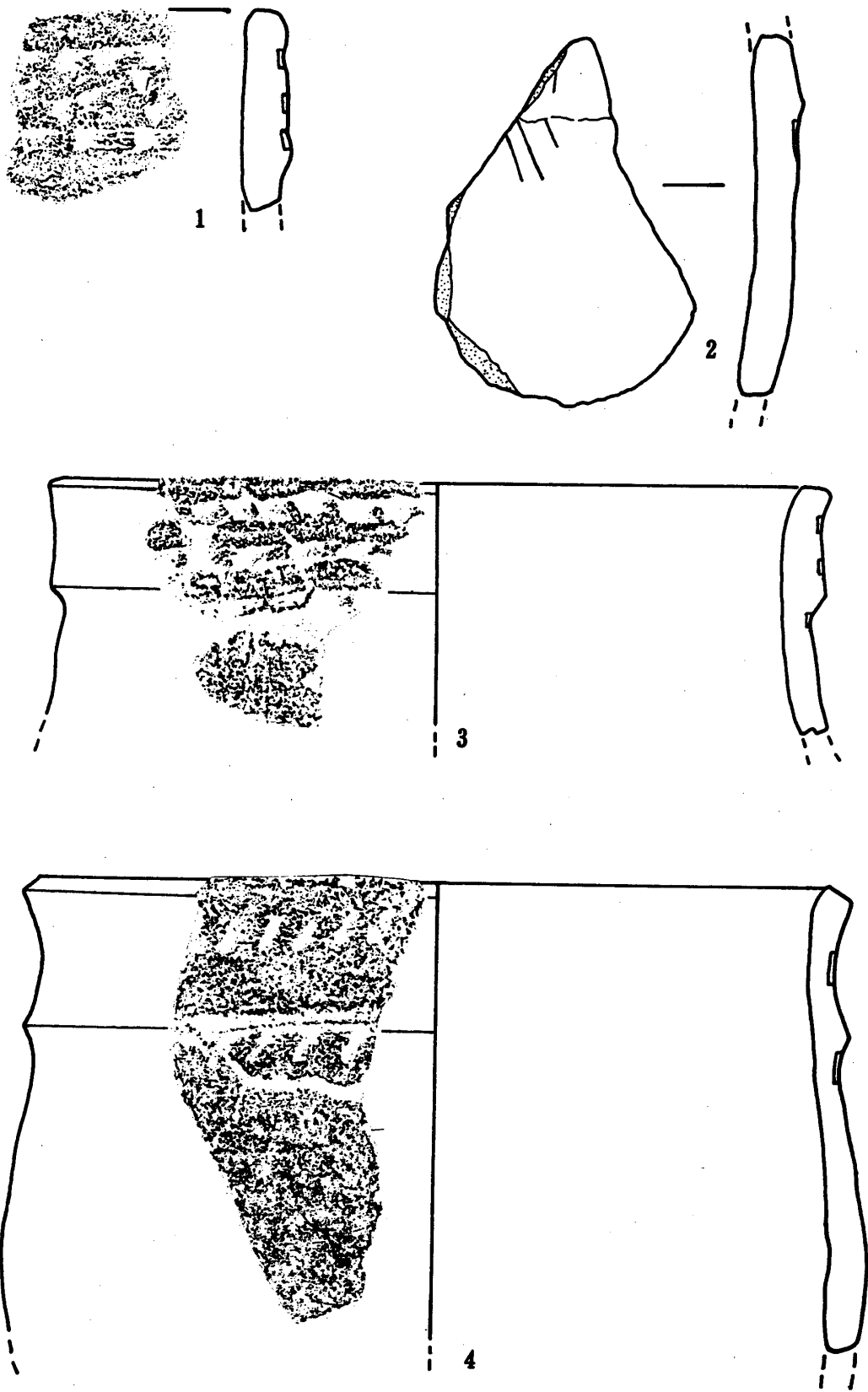
同図4は口径約17センチの深鉢形で、肥厚部外面と同直下にそれぞれ1条の横位文様を施す。先端の幅約8ミリの単篋を用いて、斜め方向に刻文類似の文様を刻むもので、文様は一見爪形的である。施文は上下とも浅い。この文様は篋幅約8ミリの単篋工具で描かれており、このような幅広の単篋を使用することはきわめて稀である。ピットR-11第4層の出土。

同図2は口縁肥厚部の下半部を含む資料で、肥厚部外面と同直下に施文する。器面はかなり摩耗していて文様は消えかかっているが、肥厚部では縦位沈線の下端がみられ、同直下では斜行の細沈線を施文する。肥厚部の細沈線は浅く、下方の細沈線はシャープである。この種の文様はカヤウチバンタ式では稀である。斜沈線の間隔は約5ミリである。ピットS-12第3層の出土。

以上に述べた7点の土器は第24図2（第3層）を除き、すべて第4層の出土である。器面は茶褐色で、焼成は一般的に悪く、脆弱である。胎土の混入物は石英主体のものが多いが、第24図4の1点は石灰質砂粒を主体としている。しかし混入物は少ない。また石英を主体とするものについてみると、第23図1～3および第24図1・3のように磁鉄鉱を少量混ぜるものもある。器面の残っているものについてみると、ナデ調整を行ったものはあるが、擦痕は見受けられなかった。

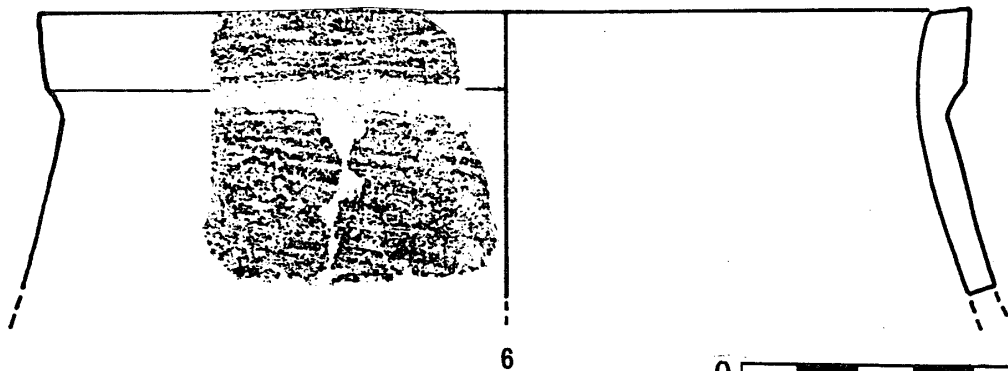
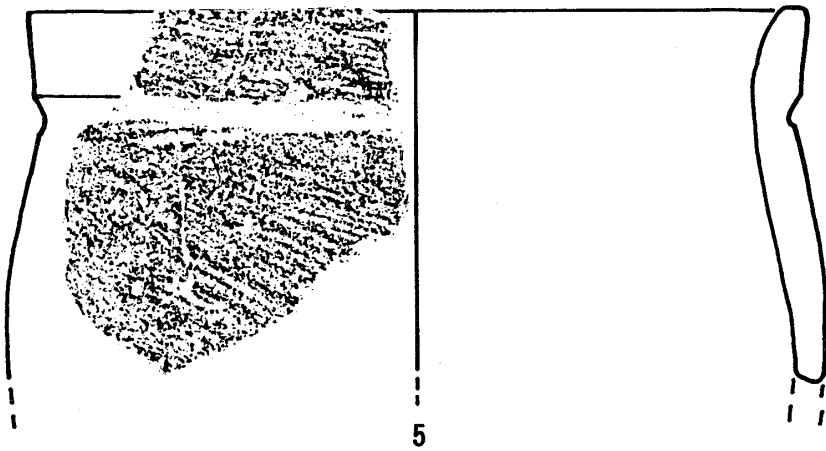
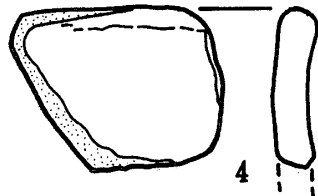
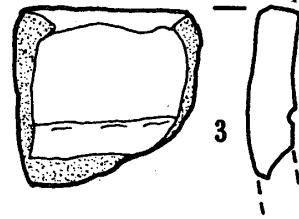
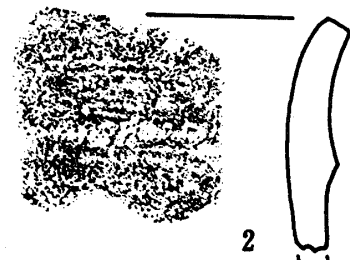
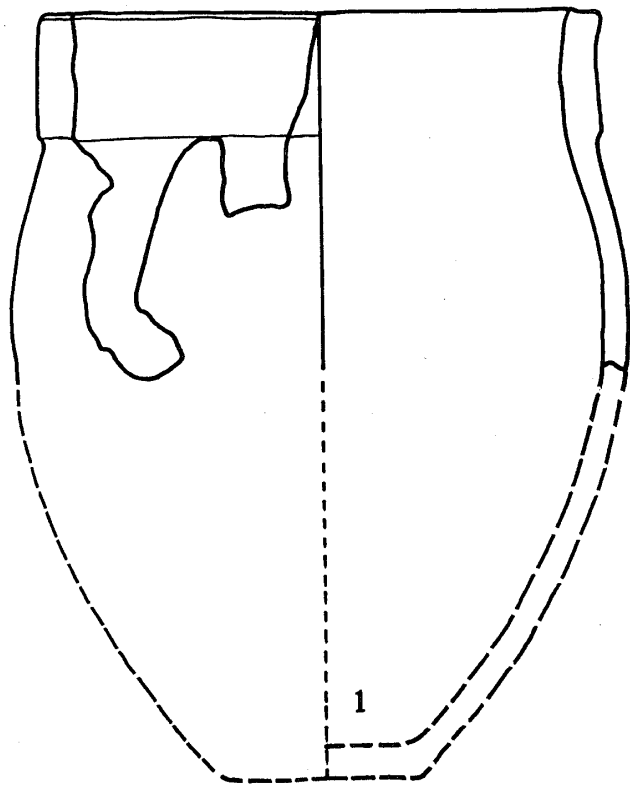
次に同期の無文のものについて記述する。出土量は前述のように17点で、第23図4、第25図1～6、第26図1～7、および第27図1～3の17点である。

肥厚部の形態はまちまちで、典型的な肥厚を示すものから、断面が長方形の肥厚を示すものまであり、後者をカヤウチバンタ式の終

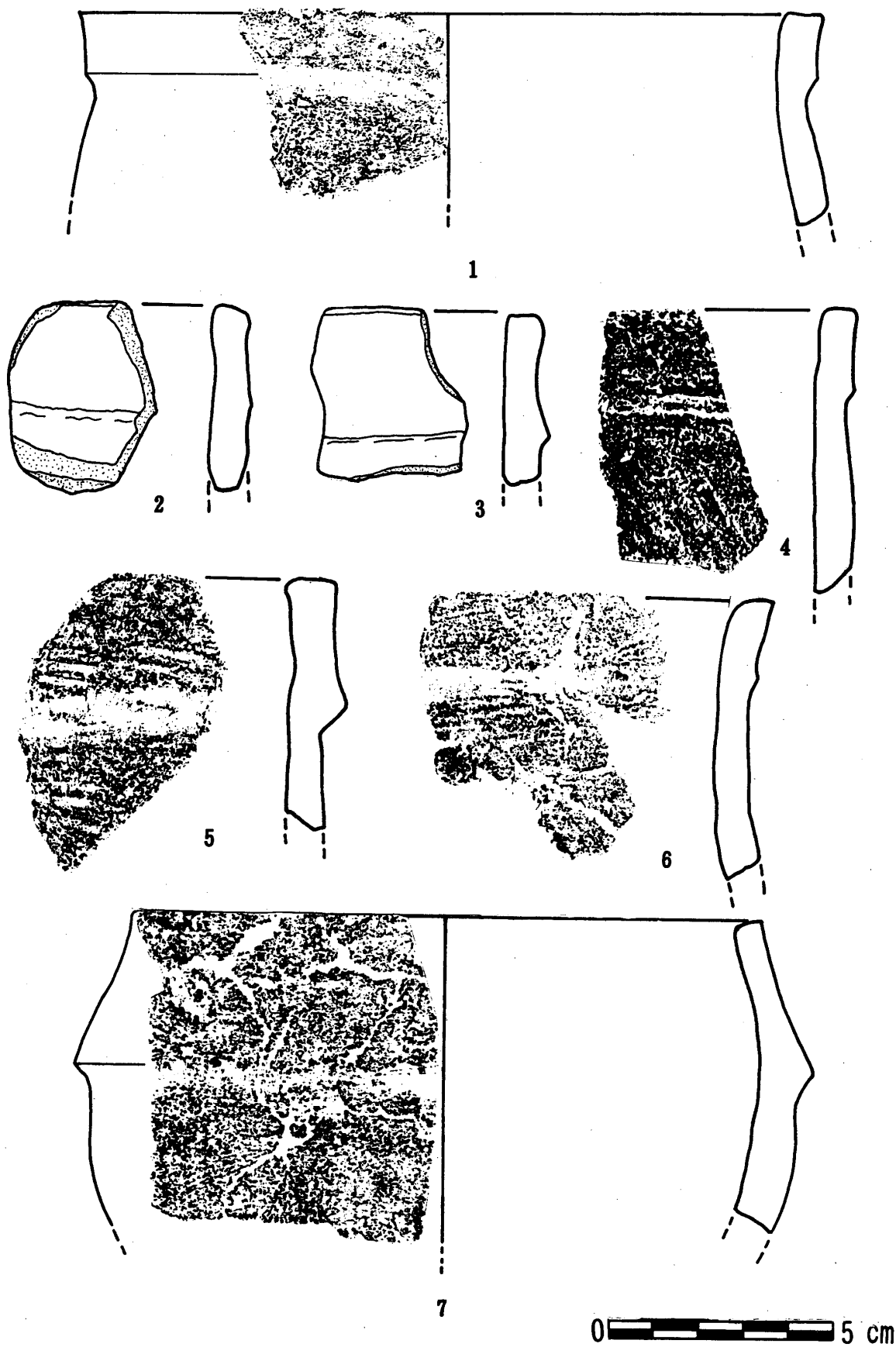


0 5 cm

第24図 カヤウチバンタ式土器



第25図 カヤウチバンタ式土器



第26図 カヤウチバンタ式土器

末形態とみなして本型式に含めるか、あるいは別型式として分離するか、今後の研究課題である。第26図7は口縁の内彎する珍しい例で、口縁の断面形態は、口唇の幅が小さく、肥厚部下端が厚いというカヤウチバンタ式肥厚とは異った形式に属している。これをカヤウチバンタ式の変形とみるかどうか、これについても今後の資料を俟って決定すべきものであろう。

器色は茶褐色のものが多いが、第23図4、第25図1・2・4および第26図2・3の6点は暗褐色である。器面はナデ調整を行なったものが多い。しかし、拓影にみるように擦痕を施す例も比較的多い。数点を除き焼成は一般に不良で、脆弱である。胎土の混入物は石英を主体とするものと石灰質砂粒を主体とするものに分けられる。前者は10点、後者は24点で、石灰質砂粒を含むものが全体として多い。なお、前記混入物のほかに磁鉄鉱を含むものがある。

ii) 室川期のカヤウチバンタ式土器

第27図4～13および第28図1の11点で、すべて室川A期の資料である。その中に文様を施すものが4点あり、後者より見ていくことにする。いずれも深鉢形の口縁破片とみられるものである。

第27図5は肥厚部が文様帯となっている。口唇部は無文である。器面はナデ調整を行い、その後に施文する。文様は篋幅約1.5ミリの細い単篋を利用し、折帯文状の文様を施文する。文様は左から右へ描いている。施文はそれ程深くはない。全体的に脆弱で、石灰質の微砂粒を含む。器色は暗褐色。R-12第3層の出土。

同図7は肥厚帯下半から胴上部の資料で、肥厚部外面と同直下に文様が見受けられる。

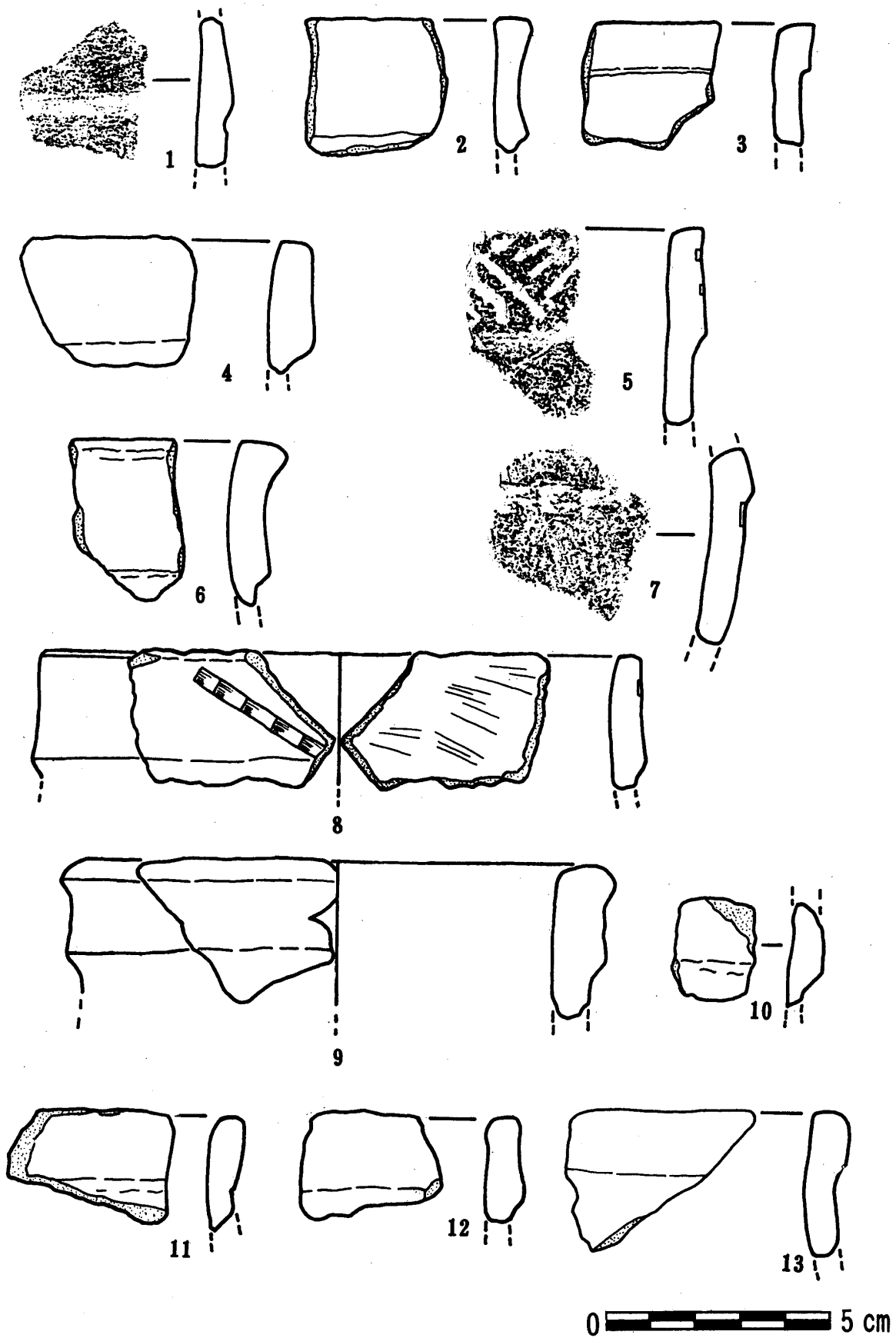
肥厚部外面の文様は破損面にわずかに残っているだけで、文様の種類は不明だが、肥厚部直下のもは半截竹管状工具による押し引き文になっており、肥厚部の文様も同様のものと類推される。下方の文様は左から右へ浅く描いている。両面ともナデ調整を行っているが、表面の擦痕は消え切っていない。また、裏面には工具による調整痕も見受けられる。多量の石灰質微砂粒を混入する。器色は暗褐色、焼成は悪い。P-12第3層の出土。

同図8は口径約14センチの小型の土器である。肥厚部外面に単篋による斜行沈線が1条認められるが、施文がきわめて浅く、注意しないと見逃すほどである。おそらく間隔のある斜行文を施していたものと思われる。肥厚帯下における文様の有無は不明。両面ともナデ調整を行っているが、裏面では篋による調整痕が斜めに施されている。器色は暗褐色で、前記の土器に比べるとやや硬い。石灰質の微砂粒を多量混入する。排水溝の出土。

第28図1はそれ自体ではカヤウチバンタ式かどうか判断できないが、同種の文様あるいは特徴をもつカヤウチバンタ式がNトレンチで出土しており、後者を参考にすれば、本標品は肥厚帯の部分の破片とみてよいかと思う。文様は斜行の連点文で、力強く描かれ、鮮明である。器色は黄褐色で、その点は室川B期に近いが、焼成は良く、室川A期のものとみて差支えない。混入物の主体は石英だが、石灰質の微砂粒を少量含む。P-11の排水溝の出土。

第27図4も肥厚部に文様を施していたかと思うが、器面が著しく摩耗しており、特徴がつかめない。茶褐色の大変脆い資料で、焼成は不良。石英を多量含む。P-12第4層の出土。

残りの6点は無文のものである。第27図6



第27図 カヤウチバンタ式土器

・9の2点は口唇を強調し、室川期の特徴をよく表わしている。同図10は上部破損のため全体的な形状は掴めない。同図11・13の2点は肥厚部の断面が長方形に属し、典型的なカヤウチバンタ式とは異っている。

器色はいずれも茶褐色で、器面はナデ調整を行っているが、6・13の2点は、裏面に篋による調整痕を残す。焼成は6はやや良好だが、残りの5点は悪い。胎土の混入物についてみると、6は少量の石灰質砂粒のほか石英も散見される。13は石英が主体である。他の4点は石灰質の微砂粒を多量混入する。

同図6はS-13第1層、9はR-12第4層10はR-11第3層、11・12・13はともにR-12第3層の出土である。

iii) 室川上層期のカヤウチバンタ式土器

室川上層期の確実な資料は第28図2～5の4点である。そのほか第29図に示す6点も室川上層に近い特徴を有するので、本項で取扱うことにする。室川上層式には焼きが良く硬質のものと、焼きが悪く、吸水性の強い泥胎質のものがあり、前者をA、後者をBとする。第28図2・3はAグループ、同図4・5の2点はBに属する。いずれも器面がアバタ状に多孔質になっているのが特徴である。

同図2は口径約24センチの深鉢形の口縁で、肥厚部は口唇をやや広めに造形する。文様は肥厚部の直下に押し引き文を1条めぐらすだけである。文様は単篋工具によって描かれ施文の方向は左から右である。施文が浅いため文様は不鮮明。器面は両面ナデ調整を行っているが、裏面では横位の擦痕も観察される。焼成はきわめてよい。器色は茶褐色。S-13第4層の出土。

同図3は口径推算28センチ、大型の深鉢形である。これも口唇を幅広く造形する。口縁

部に先端が三角形に尖った篋を用いて、刺突文を連続的に2条施す。下方の刺突文は肥厚帯の下端に沿って施されている。施文は比較的深くなされているが、器面がポーラスなために余り目立たない。器面はナデ調整を行っているが、雑である。器色は茶褐色。焼成は良好。S-11第4層の出土。

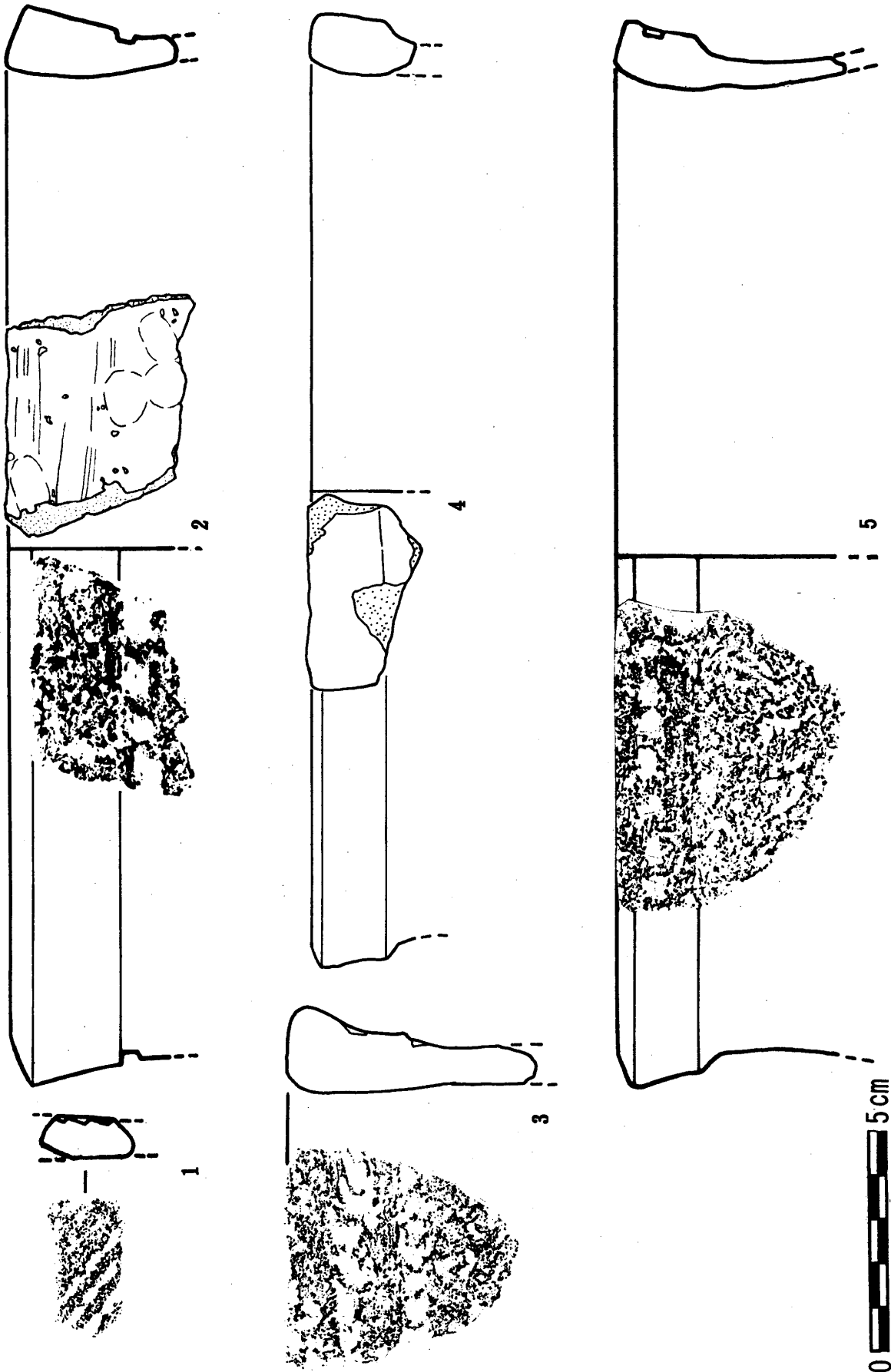
同図4はB期の口縁資料で、口径約21センチ。肥厚の形状は、断面がやや長方形に近い形態である。器面は摩耗しており、本来の器面はみられない。焼成は悪く、脆弱である。器色は黄褐色、R-11第2層の出土。

同図5もB期の資料で、口径約24センチ、大型の深鉢形である。胴のやや張る器形である。肥厚部外面に横捺刻文を1条施す。文様は力強く描かれている。器色は明るい褐色、石灰質の微砂粒を少量含む。焼成は良く、Aに近い特徴をもつ。但し、裏面はB期特有の器肌を呈している。R-13第4層の出土。

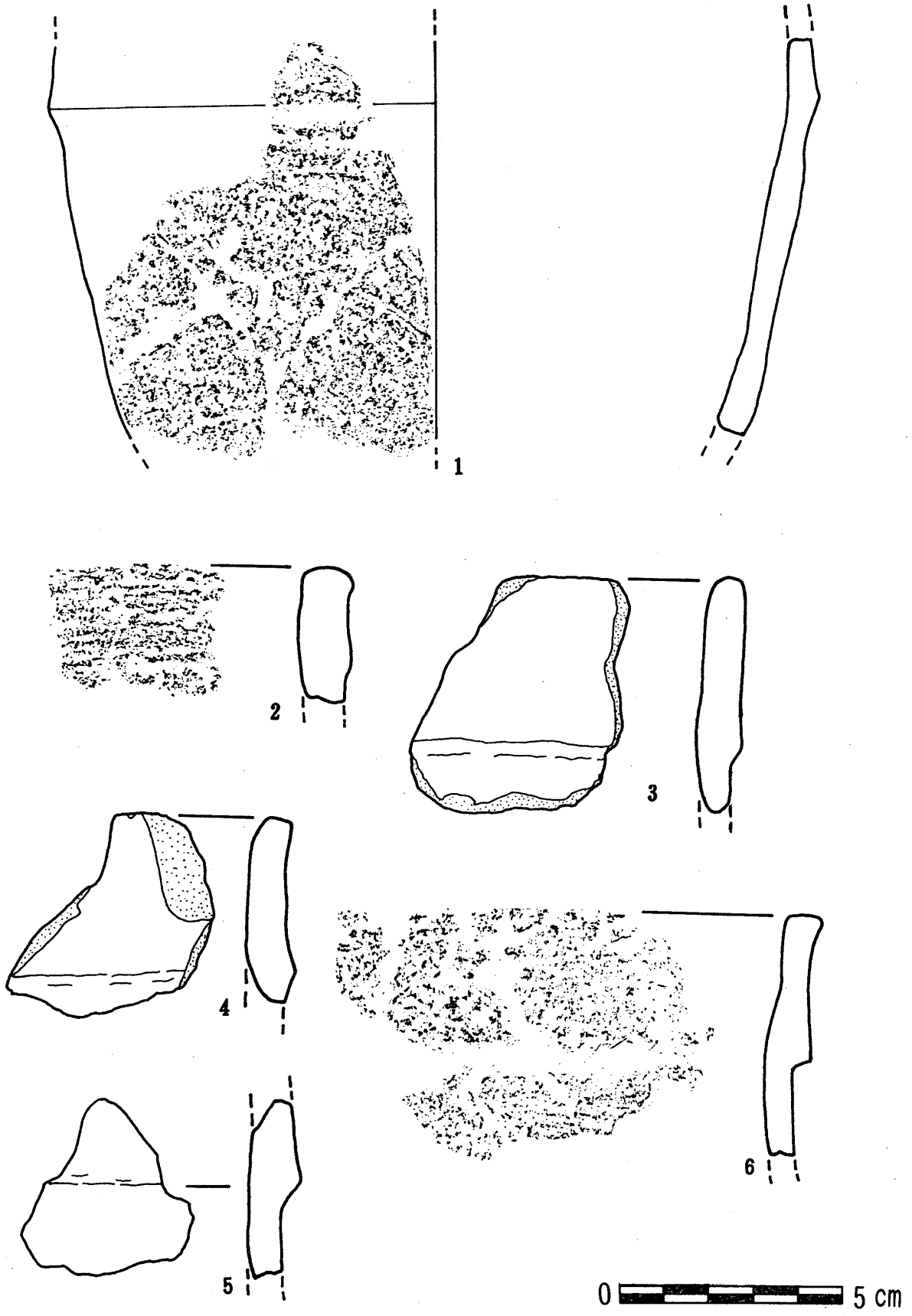
次は第29図の6点だが、器面のポーラス性は弱いものの、全体的特徴は室川上層式に類似するので、本項で取扱うことにする。

このグループの器面は一応ポーラスにはなっているが、室川上層式のものの方が一般に粗く、目立ち易いのに対し、このグループのものは針の先ぐらいに小さく、しかも浅く、また、疎らなものがあったりして、その点で通常の室川上層式と異っている。焼成は悪く、どちらかといえばB期のものに近い。胎土の混入物は石灰質砂粒を少量含むのが一般的で、それに石英を少量加えるのも見受けられる。器面の残っているものについてみると、ナデ調整を行ったものがほとんどで、擦痕やその他の調整痕を施すものは見当たらない。

出土層位は1がP-12第4層、2がR-12第2層、3がR-13第4層、4がS-11第4層、5がP-11第3層、6がP-12第4層で



第28図 カヤウチバンタ式土器



第29図 カヤウチバンタ式土器

ある。

e) 室川式土器

本型式に属する破片は約 270 点で、第 4 層で最も多かった。石灰質の微砂粒を含み、暗褐色に近い器色を有する A グループと石灰質の粗砂粒を含み、明るい褐色の器色を有する B グループに分けられ、時間的には A グループが若干先行するものと考えられる。本文では A グループから記述する。

第 21 表 室川式・室川上層式・宇佐浜式

土器 型式	室川式		室川上層式		宇佐浜式		計
	A	B	A	B	室川上層期	宇佐浜期	
排水溝		1		2			3
I							
II				1		1	2
III	3		3	4	2		12
IV	6	1	4	7			18
V							
計	9	2	7	14	2	1	35

A グループ

資料が 200 点近く採集され、その中に口縁破片が 9 点含まれている。本文ではこの 9 点について記す。器種は壺形と深鉢形の 2 種認められるが、前者は 1 例だけであった。

第 30 図 1 は壺形の口縁破片で、口径は約 6.5 センチ、口縁は外反し、口唇は外側へ傾斜する。口唇には小型の横捺刻文が深く刻まれている。施文は左から右の方向である。器色は暗褐色、石灰質の微砂粒を少量含む。器面はナデ調整を行っており、捺痕は認められない。焼成は良好である。R-12 第 3 層の出土。

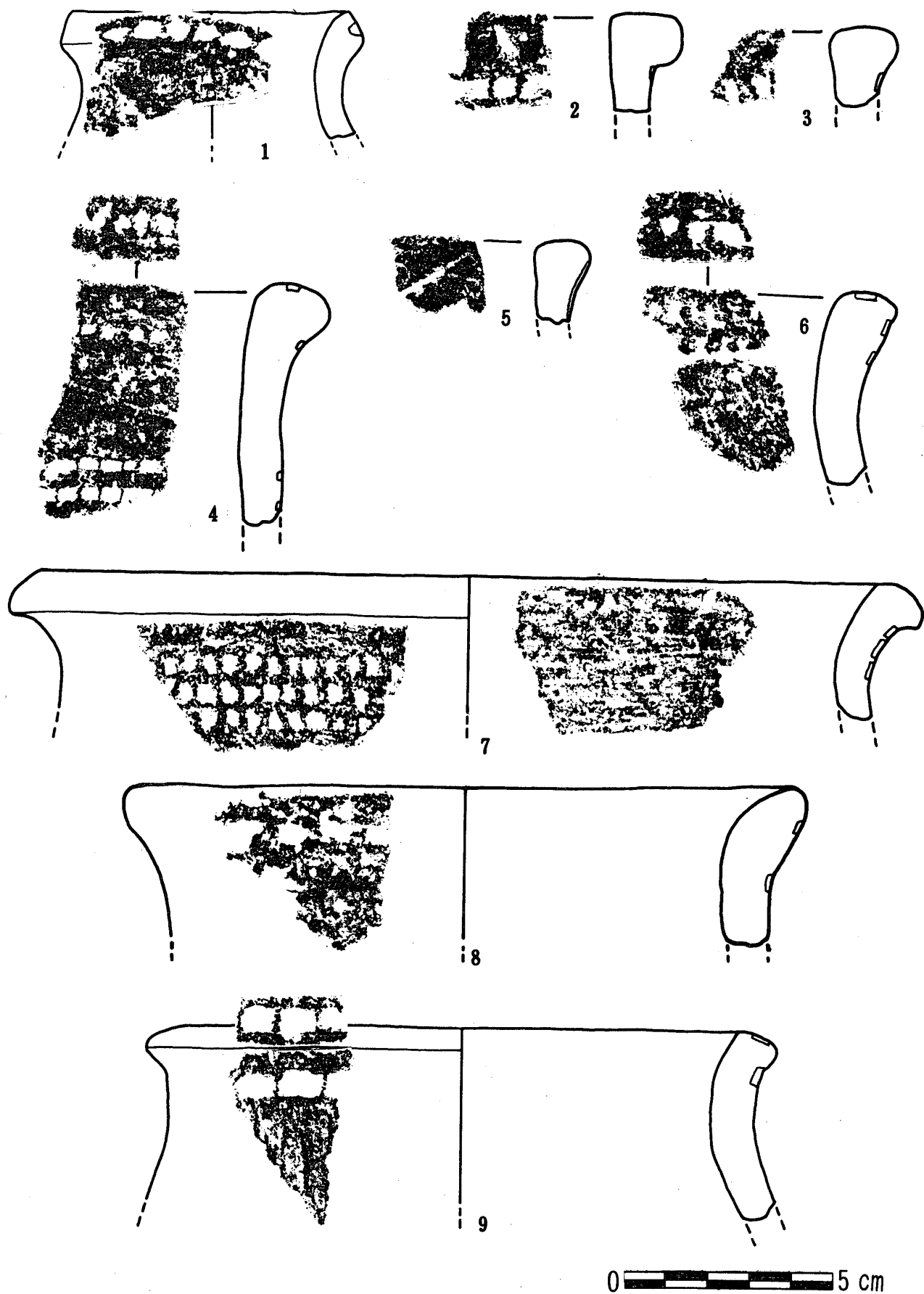
上記の 1 例を除くと他はすべて深鉢形の口

縁破片である。同図 2 は典型的なもので、凸帯を貼付して肥厚帯をつくり、幅広い口唇を造形する。口唇の幅は約 2 センチである。無文で肥厚帯直下の刻文様のものは器面調整時の傷痕であろう。器色は暗褐色。器面はナデ調整を行っている。石灰質の微砂粒を含み、まれに石英も見受けられる。焼成は比較的よい。R-12 第 3 層の出土。

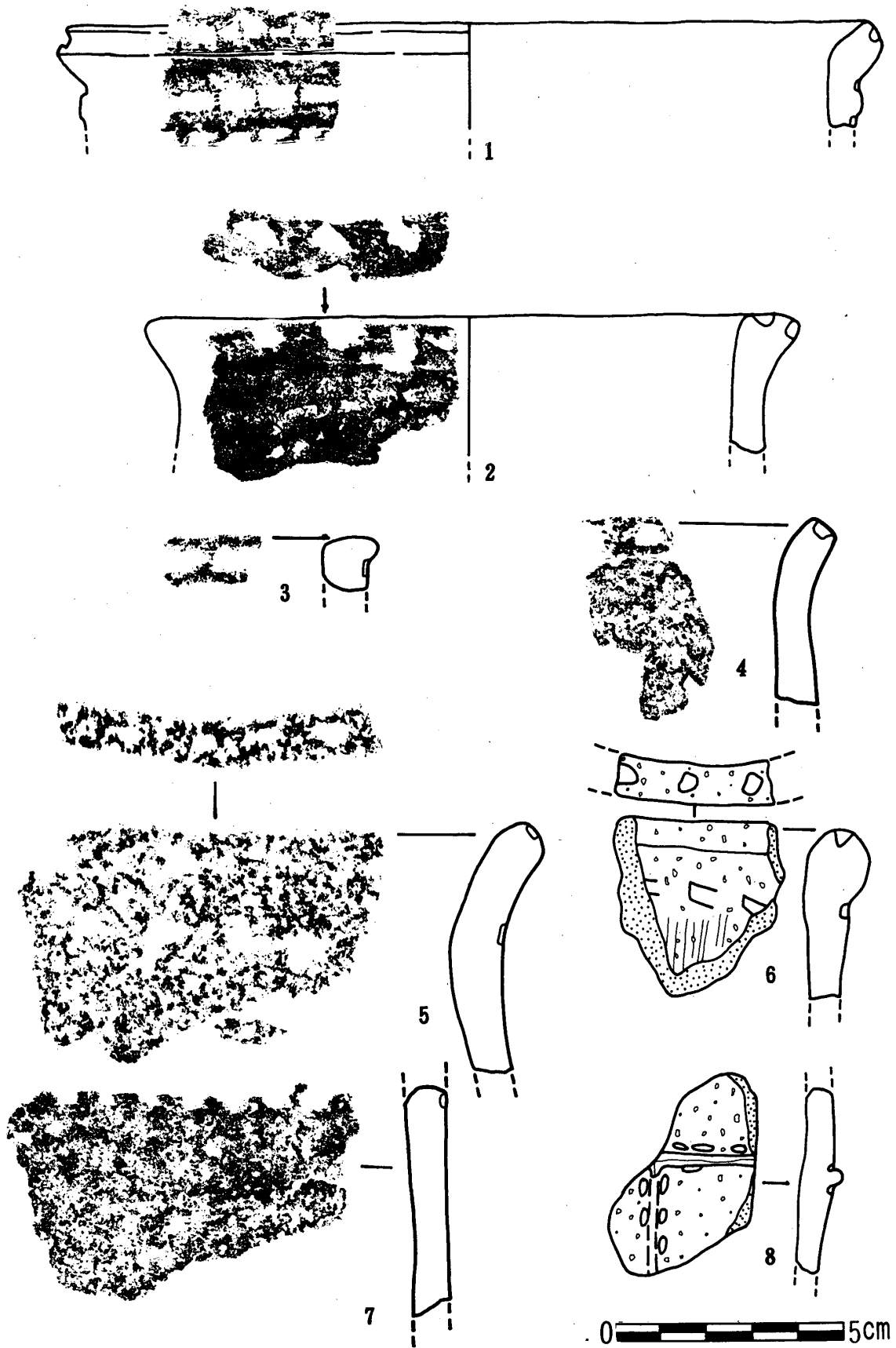
同図 3 も幅広い口唇を造形する。断面は三角形ないしは梯形に近い形状をなすものと思われる。下端に横捺刻文の一部が残っている。施文はやや深めである。器色は茶褐色のいく分暗い方に属し、胎土には石灰質の砂粒を混入するが、石英も散見される。器面はナデ調整を行っている。焼成は比較的よい。S-13 第 4 層の出土。

同図 4 はやや大型の口縁破片で、矢張り口唇部を強調する。口唇の断面はやや丸形となっている。器色は茶褐色で B グループに近い。器面はナデ調整を行い、胎土には多量の石灰質砂粒を混入するが、石英もわずかながら認められる。やや胴の張る深鉢形が想定される。口唇と肥厚帯直下および胴上部に押し引き文を施文するが、施文は浅く、文様は不鮮明。先端の幅約 3 ミリの篋を使用している。焼成は比較的よい。Q-12 第 4 層の出土。

同図 5 の口縁の断面形態は 3 に近似する。器色は茶褐色で、器面はナデ調整を行っている。混入物としては石英がわずかに見受けられるものの、石灰質砂粒は認められない。その点は他の室川式と異なっている。器色は一部黄みがかかったところもあり、赤褐色のところもあって、全体に明るい色に属している。表面に斜沈線が 1 本みられるが、浅く、華奢で、文様とみるべきかどうか、はっきりしない。焼成は比較的よい。Q-12 第 4 層の出土である。



第30図 室川式土器



第 31 图 室川式土器 (1・2), 室川上層式土器 (3~8)

同図6は胴のやや張る深鉢形の口縁破片で、口唇を幅広く造形するが、他の標品に比べるとそれ程顕著ではない。器色は黄褐色で、器面はナデ調整を行っている。石灰質の微砂粒を混入するものの、石英も散見される。口縁にそって刺突文状の刻文を2列刻む。施文は浅く、文様は不鮮明。焼成はAグループの中では悪い方に属し、吸水性の強い土器である。R-13第4層の出土。

同図7は口径約20センチの深鉢形で、これに類するものの大型破片がT-8区(註4)で1例出土している。口唇の形態はやや丸形の肥厚をつくるもので、口縁は外反する。器色は黄褐色、器面はナデ調整を行っているが、内面では横位の擦痕も見受けられる。石灰質の微砂粒を含むが、混入量は多くはない。器形は胴のやや張るタイプである。肥厚帯直下の頸部に横捺刻文を3条施す。文様は浅く、不鮮明で、施文の方向は左から右である。焼成はよい。Q-12区第4層の出土。

同図8は口縁を折り曲げて外反させるもので、口縁内面が一眼口唇に見えたりする。口径約16cm。器色は茶褐色、器面はナデ調整を行っている。胎土には石灰質の微砂粒を含むが、混入量は少ない。石英も散見される。口唇はやや丸みを帯びている。外面には横捺刻文が2条認められる。施文は深く、左から右の方向へ描いている。焼成は悪く、脆弱。Q-11第4層の出土。

同図9は口径推算14cmの深鉢形で胴が多少張るタイプとみられる。口縁部の肥厚は微弱である。器色は暗褐色で、器面はナデ調整を行っているが、ヘラによる調整痕も見受けられる。胎土には多量の石灰質砂粒を混入するが、石英もわずかながら認められる。口唇と頸部上方に押し引き文をそれぞれ1条施す。文様は力強く、深く描かれ、施文の方向は左

から右である。焼成は比較的よい。R-12第3層の出土。

Bグループ

このグループはAグループより少なく、出土量は約80点である。その中に口縁破片が2点あり、本文ではこの2点について記述する。

第31図1は口径約18センチの深鉢形で、口縁上部は「く」の字形の、やや角度のある屈折を示す。しかし、口縁内面の稜はそれほど顕著ではない。器色は赤に近い明るい褐色で、器面はナデ調整を行っている。胎土には多量の石灰質砂粒を混入する。口唇と頸上部には押し引き文を施す。施文は深く、いずれも左から右の方向である。焼成は普通だが、多少吸水性の強い土器である。Q-12第4層の出土。

同図2は口径約14センチの深鉢形で、口唇はやや水平である。器色は茶褐色、器面はナデ調整を行っている。大小さまざまな石灰質砂粒を多量混入する。口唇部と口縁上端に大型の刻文を深く刻む。焼成は良好。排水溝からの出土であり、正確な時期は不明。

f) 室川上層式土器

この土器は室川式に比べると出土量は多い。排水溝以東の地域に多かったが、そこではS-12・13区に特に集中的にみられた。この土器は器面がポーラスになっているのが特徴で、室川式の後続型式と考えられ、口唇を強調するものもみられる。硬質と軟質泥胎の2種があり、前者をA、後者をBとする。AはBに若干先行するものと思われる。室川遺跡における層位的出土状況から前V期初頭を代表する土器とみられる。次にA・B両グループについて記述する(第21表)。

Aグループ

100点余の資料が採集され、その中に口縁や有文資料が7点含まれている。第31図3は口縁の小破片で、器種、口径ともに不明。器面のポーラス性は他の土器に比べると弱く、一見、大山式に近似する特徴をもつ。器色は茶褐色だが、表面は煤けて黒ずんでいる。器面はナデ調整を行っている。石灰質砂粒を少量混入する。口縁上部には押し引き文が1条認められる。施文は左から右で、比較的強く押し引きされている。焼成はよい。S-13第4層の出土。

同図4は深鉢形の口縁破片で、胴が多少張る器形とみられる。口縁は軽く外反する。口径は不明。この標品も器面のポーラス性は弱い。器色は黄色に近く、器面はナデ調整を行っている。器面や破損面に混入物はみられない。口唇にだけ横捺刻文を施文する。施文はやや深めである。焼成は良い。S-13第4層の出土。

同図5も深鉢形の口縁破片で、口縁は軽く外反し、胴が多少張るタイプに属する。口径は推算26cmで、大型の部類に入る。器色は黄みの強い褐色、器面はナデ調整を行っている。口唇に刻文、頸部に押し引き文をそれぞれ1条施す。施文は浅く、しかも器面がポーラスとあって、文様は注意しないと分からないほどである。混入物は石灰質の砂粒と思われるが、器面や破損面では観察できない。比較的堅い土器である。S-13第4層の出土。

同図6も深鉢形の口縁破片で、直口状を呈する。口唇はやや誇張され、幅広く造形されている。口縁の断面は円形に近い。器色は黄白色、器面はナデ調整を行っているが、裏面では横位の、表面では縦位の篋調整痕が観察される。器面はポーラスで、胎土の混入物は見受けられない。口唇部と頸上部に刻文をそ

れぞれ1条施す。施文は深く、文様は鮮明である。焼成は良好。S-12第3層の出土。

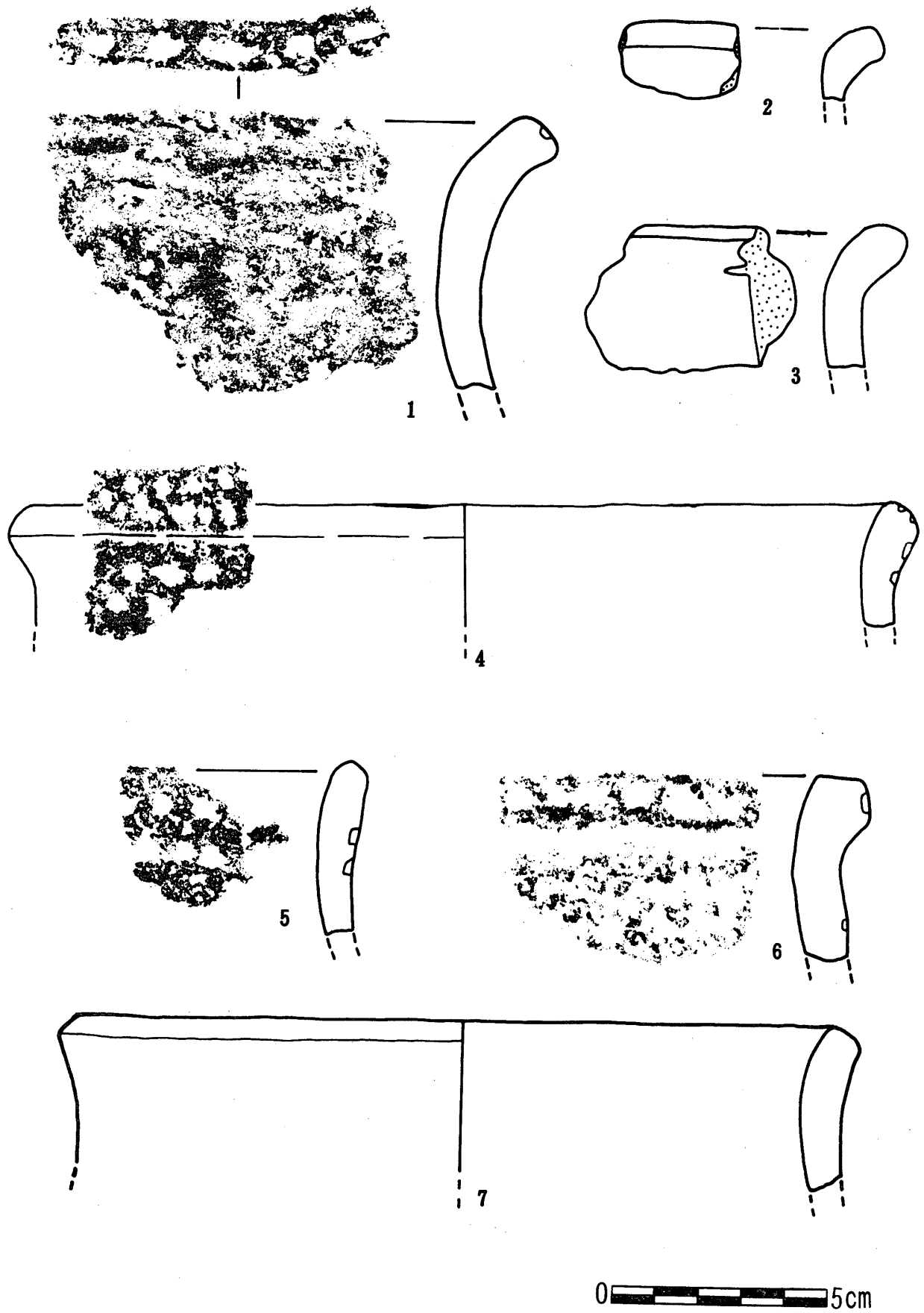
同図7は胴部の破片であるが、上端に文様が認められることから口縁に近い部分の資料である。胴径は推算19センチ、大型の小さい部類に入る。器面のポーラス性は弱い。器色は茶褐色、器面はナデ調整を行っている。石灰質砂粒を少量混入する。先述のように同標品の上端には横捺刻文が1条認められ、左から右の方向に施文する。焼成はよい。R-12第3層の出土。

同図8も胴部の破片で、ミミズ脹れ状の凸帯が横位に1本貼付され、その上下に刺突文を施文する。また、凸帯下方でも縦位の刺突文が2条見受けられる。しかし、器面がポーラスなため、特に刺突文は注意しないと見逃しそうである。器色は暗褐色、表面は摩耗して不明だが、裏面ではナデ調整を認めることができる。Aグループの土器にしては脆い方に属する。R-12第4層の出土。

第32図1は大型の口縁破片だが、全体的に平べったく口径を推算し得ない。口縁は外反し、口唇は外側へ傾斜する。胴の多少張る器形であろう。器色は外面は暗褐色、内面は赤褐色。表面はナデ調整を行っているが内面も一部これを認めることができる。石灰質の砂粒を少量含み、石英も散見される。口唇部に刻文を深く刻む。裏面に比べ、表面はポーラス性が弱い。焼成はよい。R-12第3層の出土。

室川上層 B

これに属する資料は370点を越しており、多量の出土をみた。この中に口縁資料が10点含まれているので、本項ではこれについて記す。第32図2は深鉢形の口縁破片とみられるもので、口縁は外反する。口径は不明。器色



第32図 室川上層式土器

は黄褐色で、器面はナデ調整を行っている。石英が数点見られるほかは他の混入物は見当らない。器面はポーラスで、吸水性の強い土器である。R-12第4層の出土。

同図3も深鉢形の口縁の破片で、やや大きく外反する。器色は茶褐色、器面はナデ調整を行っている。口径は不明。石英や石灰質砂粒をわずかに含む。器面はポーラスで、吸水性の強い土器である。S-13第4層の出土。

同図4は口径約21センチの深鉢形の口縁破片で、口唇をやや丸く、厚く造形する。器色は黄褐色、器面は大分摩耗しているが、原形を保持している箇所ではナデ調整を認めることができる。胎土の混入物は石灰質砂粒でなく石英だが、混入量は他の資料同様きわめて少い。口唇上に2組、口縁上端にも2組の刻文を施す。施文は深く、左から右の方向に描いている。器面はポーラスで、焼成は悪く、吸水性の強い土器である。S-13第4層の出土。

同図5は深鉢形の口縁破片で、口縁の外反は微弱である。器色は黄褐色、器面はナデ調整を行っている。石灰質の微砂粒を比較的多量含む。口縁に2条の横捺刻文を施す。刻文は浅く、施文は左から右の方向である。器面はポーラスで、焼成はこのBグループの中では比較的よい方に属する。口径は不明。R-12第3層の出土。

同図6も深鉢形に属し、口縁の断面形は方形に近く、胴の多少張るタイプの器形と考えられる。口径は推算15センチ。器色は表面は暗褐色、内面は赤褐色。表面は器面調整は雑で、平面をなさず凹凸が激しい。内面は大部分摩耗しているが、一部ナデ調整を認めることができる。石灰質の微砂粒を少量含む。肥厚部外面と頸下部に横捺刻文をそれぞれ1条刻む。表面よりも内面はポーラスで、これも吸水性の強い土器である。R-13第4層の出

土。

同図7は口縁が外反する深鉢形で、口径は約19センチ。口唇は外傾する。外面は暗褐色、内面は黄褐色。表面はナデ調整を行っているが、内面は不明。石灰質の微砂粒を少量含む。表面より内面はポーラスである。焼成は悪く、脆い。R-12第3層の出土。

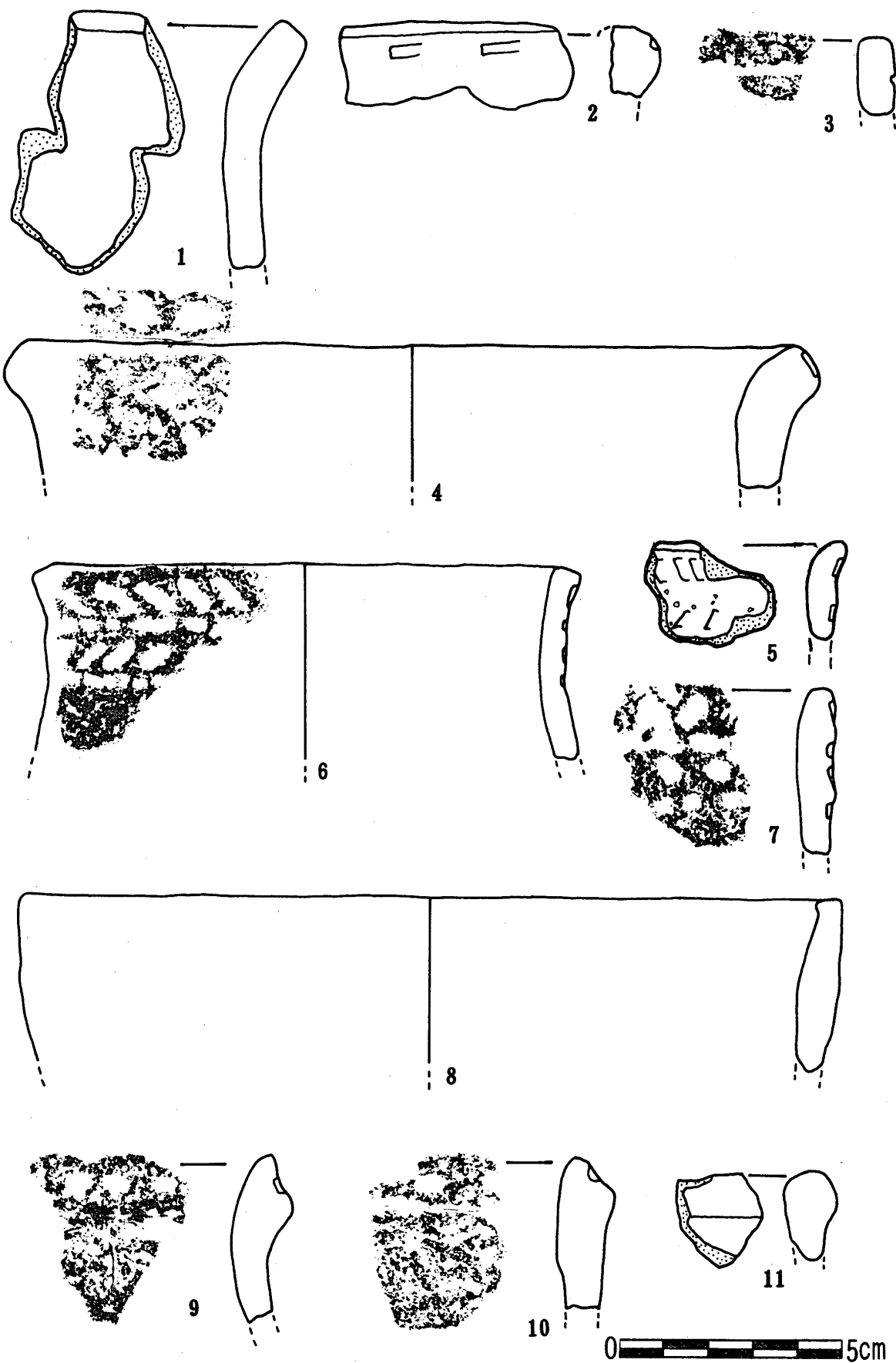
第33図1は外反の大きい深鉢形の口縁破片で、口唇は外傾する。口径は不明。外面は暗褐色、内面は黄褐色。表面はナデ調整を行っているが、裏面は不明。石英が散見されるが、石灰質砂粒は見当らない。焼成は悪い。表面より内面はポーラスである。R-12第2層の出土。

同図2は破片が小さく器種・器形等明言できないが、強いて類推すれば、深鉢形の口縁とみられるものである。器色は黄褐色、器面はナデ調整を行っている。意識的な混入物は見受けられない。口唇と口縁に横捺刻文を刻む。施文は深い。器面はポーラスで、焼成は悪い。S-12第3層の出土。

同図3も破片が小さく、器種・器形等不明である。器色は黄褐色、表面はナデを行っているが、裏面は不明。石灰質砂粒をわずかに含む。表面にはやや間隔のある押し引き文を施している。器面はポーラスで、焼成は悪い。S-13第4層の出土。

同図4はやや外反の強い深鉢形の口縁破片である。口径は18.3センチである。器色は黄褐色。器面摩耗のため、器面調整の方法等は不明。口唇に比較的大きな刻文を施す。意識的に混入したとみられる物質は見受けられない。吸水性の強い土器である。器面は両面ともポーラス。R-12第3層の出土。

同図5～8の4点は器面の孔がひじょうに小さく、かつ器壁は薄く、その点では典型的な室川上層式と若干異っている。しかし、器色



第33図 室川上層式土器（1～8），宇佐浜式土器（9～11）

が黄褐色で、吸水性が強く、かつ石灰質の微砂粒を含むことから室川上層式の範疇に含めてよいと思われる。同図5は横捺刻文か押引文を施文していたかとみられるが、器面が著しく摩耗していて確かなことは不明。口唇はやや平坦である。

同図6は口径約12.3センチの深鉢形で、口縁部に棒状工具で斜沈線と横捺刻文を組み合わせた文様を刻む。上下段の斜沈線は方向が異っており、有軸羽状文と見做すこともできる。口唇は平坦である。同図7は直口状を呈し、同図6と同じ文様を施文する。しかし、やや幅のある単篋を使用しており、かつ沈線は短小であるので、6とは別個体のものである。同図8は無文の口縁破片で、口径約18.5センチ、口唇は平坦につくられている。口縁下端がわずかに張るが、全体としては直口に近い。

この4点の出土地区および層位についてみると、5はR-13第4層、6はR-13第4層、7はP-11の排水溝、8はR-11第4層の出土である。

以上、室川上層のA・B両グループについて述べた。記述の対象となった資料は少なかったが、今回新たに気付いた点があり、それについて述べることにする。器面のポーラス性の問題であるが、原器面にその特徴をよく表わしているものとそうでないものがあるということである。第32図1、6、7や第33図8をみると外面は暗褐色で原器面を残す。ポーラス性が極めて弱く、表面だけの特徴からすると室川上層式と認めることはきわめてむずかしい。しかし、裏面をみると黄褐色や赤褐色の明るい色で、アバタ状になっており室川上層式の特徴をよく表わしている。表面と器色が違うということは内面は原器面が剥落したためとも受取れる。もし、これが事実

だとすると剥落以前においても室川上層式と認知する方法を考案せねばならない。この点は今後の課題としたい。

g) 宇佐浜式土器

イ) 室川上層期の宇佐浜式土器

口縁部が2点出土している(第21表)。第33図9は深鉢形の口縁破片で、口径は不明。口縁の断面は三角形を呈する。器色は黄褐色。口唇に横捺文を施す。施文は深めである。混入物は見当らない。器面はポーラスで、吸水性の強い土器で泥胎質である。口縁の断面形態を除くと、他の特徴は室川上層Bグループと一致する。R-11第3層の出土。

同図10も深鉢形の口縁破片と思われる。口径は不明。口縁部断面は三角形に属するが、肥厚が弱く、ルーズな形態となっている。器色は黄褐色、石灰質の微砂粒を混入する。口唇に横捺刻文を施文する。器面はポーラスで、焼成は悪く、泥胎質である。この土器も口縁の形態を除くと、他の特徴は室川上層Bグループと一致する。R-12第3層の出土。

ロ) 宇佐浜期の資料

同図11は口縁の破片で、その断面形態は丸みの肥厚を示す。肥厚は微弱である。胎土は粗く、器面はザラザラしており、石英を多量混入する。器色は茶褐色、焼成は比較的よい。以上の特徴から宇佐浜式と認められるものである。N-12第2層の出土だから、攪乱部の出土ということになる(第21表)。

h) 奄美式土器

本発掘区出土の奄美系土器は第34図1～9に示す9点(第6表)である。土器の型式分類は河口貞徳氏のそれに従った(註5)。本発掘

区のもは、面縄東洞式、嘉徳Ⅰ式、嘉徳Ⅱ式などがその主なものである。以下それについて記述する。

面縄東洞式（第34図1）

第34図1は口縁部断面が三角形の肥厚を示す。肥厚部外面には爪形文（三角形刺突文）が横位に3条施されている。爪形文は上位と下位のものは右から左の方向へ、中位のものは左から右の方向へ描いている。この3条とも押し引き文で、押し引きは力が加えられているため、施文部は凹線になっている。器面はナデ調整を行なっている。器色は暗褐色を呈し、焼成は良好である。器壁は薄い（6.5ミリ）。胎土には粒の細かい石英が見受けられる。ピットO-11第4層の出土。

爪形文（三角形刺突文）

第34図2は頸部の小破片とみられるもので、器面に斜行の爪形文（三角形刺突文）が3条見受けられ、羽状文類似の文様を施文していたかと思われる。器面摩耗のため、一部文様の不鮮明なところもある。器面は表裏面ともナデ調整を行なったものと思われる。器壁は薄い。器色は褐色を呈し、焼成は良好である。胎土には石英の微砂粒とチャートが見受けられる。ピットQ-12第4層の出土。

嘉徳Ⅰ式（第34図3、4）

爪形文または刺突文と沈線文を組み合わせる文様を構成する。

同図4は爪形文と沈線文を施すもので、両者の組み合わせは従来のものとやや異なっているが、本文では嘉徳ⅠAに含めておく。器面は摩耗し、文様は不鮮明である。器壁は薄く、胎土は細かである。器色は茶褐色を呈し、焼成は悪く、胎土には石英の微砂粒を混入する。ピッ

トR-11第4層の出土。

同図3は小破片で、三角形刺突文と沈線文が施されているが、文様の全体的展開状況は不明である。刺突文も沈線も施文は深い。器面は両面ともナデ調整を行なっている。器壁は薄い。器色は暗褐色を呈し、焼成は良い。胎土には石英の微砂粒とチャートを混入する。ピットR-13第4層の出土。

羽状文を施文する土器（第34図5）

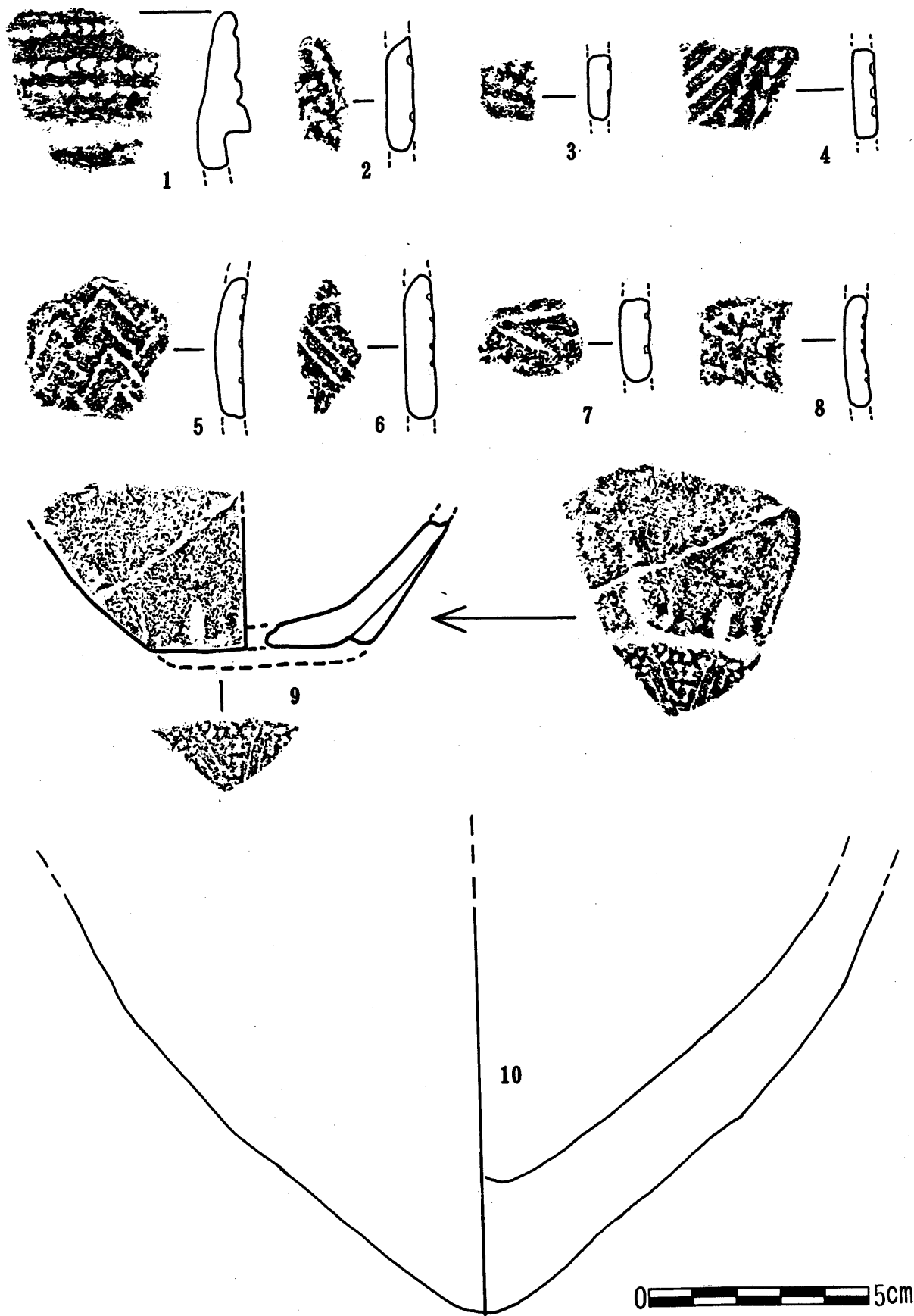
同図5は口縁部を欠くが、外反の状況から口縁に近い部分の資料であろう。羽状文を配する例は嘉徳Ⅰ式にも認められるが、前述のように口縁に近い資料と考えられることから、むしろ嘉徳Ⅱ式の可能性が強い。器色は茶褐色を呈し、胎土には石英の微砂粒を含む。器壁は薄く、胎土は細やかで焼成は良い。表面は摩耗のため不明だが、裏面はナデ調整を行っている。P-11第4層の出土。

沈線文土器（第34図6・7）

同図6・7の2点は沈線文を施す資料である。この沈線が羽状文に属するか、折帯文に属するかは不明であるが、6は折帯文になる可能性が強い。沈線はシャープである。6の器色は暗褐色で、焼成は良い。胎土は細やかで両面ともナデ調整を行なっている。胎土には石英と金雲母の混入が見られる。ピットO-12第2層の出土。

7も沈線は深く文様はシャープである。表面はナデ調整を行なっているが、裏面は摩耗のため不明。器色は黄褐色を呈し、焼成は悪く、脆弱である。胎土には石英の微砂粒やチャートを混入する。ピットO-12第3層の出土。

同図8は竹管状の工具で施文した文様と思われるが、各文様とも一部は施文が浅く、拓



第34図 奄美式土器（1～9）および底部（10）

影では半円状になっている。類例の少ない文様である。器壁は薄く、胎土は細かで、器色は茶褐色を呈し、焼成は若干良く堅い。胎土には石英が散見される。以上の特徴から奄美の土器とみてよい。表採品である。

同図9は器形の推定困難な資料で、類例はこれまでのところ皆無である。頸部の破片とみるか、底部の破片とみるか決定は困難だが、いろいろ検討した結果、平底の破片とみた方がよさそうだ。だとすると、底面に施文する例となるが、現在の文様の部分が底面ではなく、使用時には、この部分は復元図のように覆われていたものと推察される。これは現資料の破損面からの推定である。破損の際、底面が剥落し、現在のように文様の部分が表われたとみられる。とに角、この種の資料は未だみたことがなく、これが何であるかは今後の資料に期待したい。

文様は細沈線とみみず脹れ状の小隆起線の左右に刺突文を施す文様から構成され、喜念I式に類似する。この文様に隣接する底部側面にやや太めの沈線がみられるが、この沈線は文様というより何らかの傷痕であろう。

器壁は薄く、胎土は細やかで焼成は良く、これらの諸特徴と前記の文様からこの資料は奄美の土器とみていい。ピットR-12第2層の出土である。

i) 底部

本トレンチ出土の底部破片は32点である。そのうち形状を窺うことのできる資料は30点で、第34図10～36図に示した。

これらを胎土、焼成、混入物、器色等から時期別に分類すると、伊波・荻堂・大山期が10点、室川期が15点、室川上層A期2点、室川上層B期4点、後期系1点となる。

底部は平底が圧倒的に多く27点（第35図1

～6、8～15、第36図1～8、11～14、16）で、平底の可能性あるものも3点（第36図9、10、12）あり、尖底は第34図10の1点だけである。不明は第36図15に示す1点である（第22表）。

以下、時期別に記述を行なうこととする。

第22表 底部の出土状況

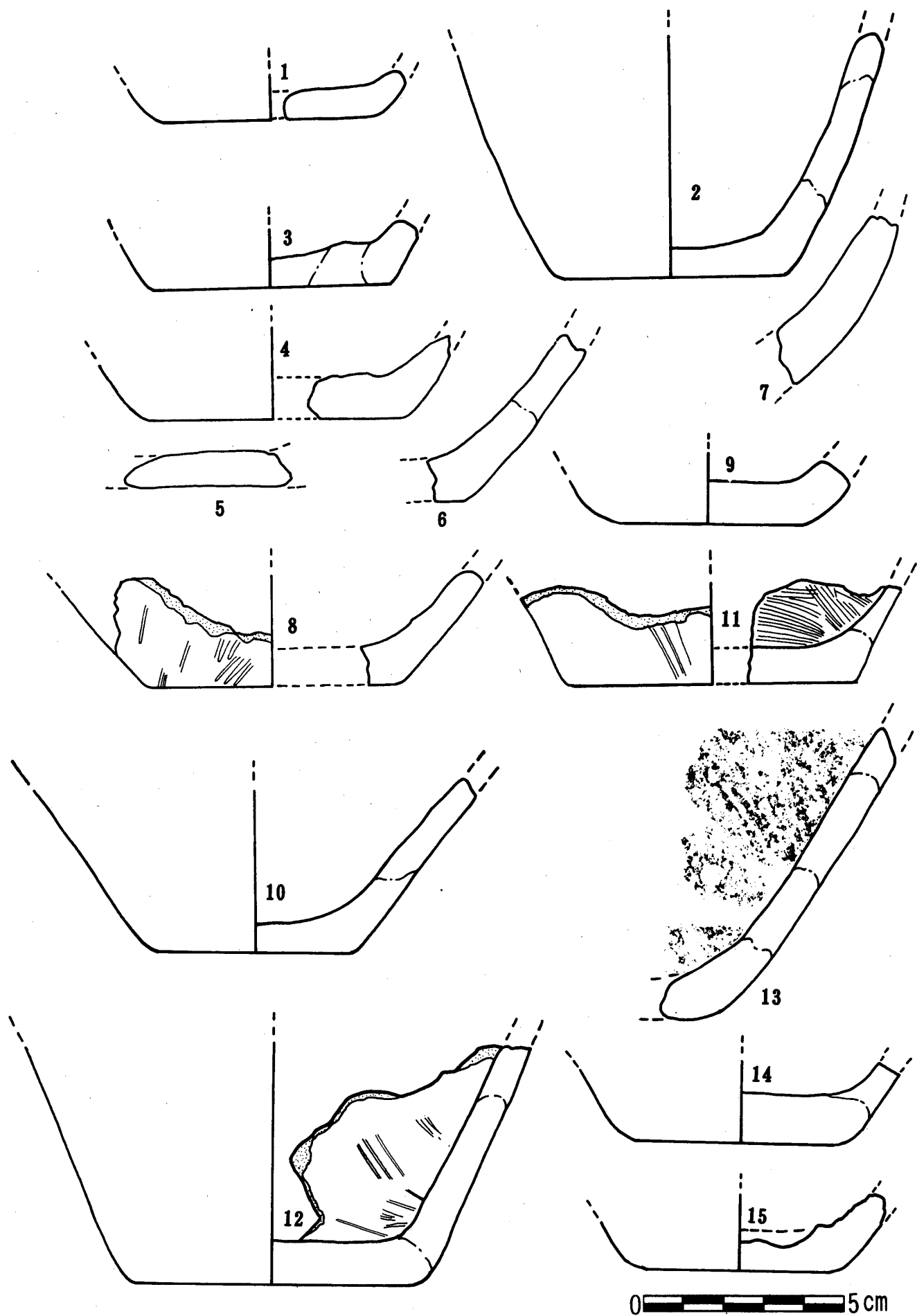
時期 層序	伊波・荻堂・大山期	室川		室川上層		後期	計
		A期	B期	A期	B期		
排水溝	1		1		1		3
I	1						1
II		2		1			3
III		4		1	1	1	7
IV	7	7	1	1	1		17
V							
VI	1						1
計	10	13	2	3	3	1	32

伊波・荻堂・大山期

ここにまとめるものは器色・混入物・焼成等から伊波・荻堂・大山各型式のいずれかに属するものであるが、前記各型式との関係を明示し得ないものである。第35図1～10に示す10点がそれで、同図7の破片を除く他はすべて平底であるが、この7も平底になる可能性がある。

立ち上がりの形状をみると①胴部へ移行する部分が僅かに外彎するもの、②胴部へ直線的に移行するもの、の2種に区別される。①に属するものは第35図1・2・4・6・9の5点、②に属するものは同図3・8・10の3点である。

同図5は破損のため、立ち上がりの部分の



第35图 底部

形状を知り得ないが、同図7は平底であれば①のグループに属するものである。

底径を推算できるものは7点（第35図1～4、8～10）で、最大は第35図8の6.5センチ、最小は同図9の4.8センチである。底部は径5～5.9のものが比較的多く、伊波・荻堂・大山期の平均的なサイズとみられる。

器面調整は内外面ともナデ調整を施すものが一般的で、外面よりもいづらか内面は雑である。擦痕を施すものが1点（第35図8）認められるが、底面近くにわずかに残っているだけである。

器色は赤褐色、黄褐色、茶褐色、黒褐色の4種類見受けられ、前記の順に減少する。焼成は普通だが、どちらかといえば脆い方に属する。

混入物は石英を主体にチャートを少量含むものが7点（第35図1～6・8）、石英を主体に磁鉄鉱をわずかに含むもの1点（第35図7）、石英のほか石灰質砂粒や磁鉄鉱をわずかに含むもの2点（第35図9・10）となっている。

出土量は第4層で7点、第1層、第6層、排水溝から各1点の計10点である。

第23表 土器底部の混入物の種類と層位的出土状況

種類 層序	A			B		C				D	計
	a	b	c	a	b	a	b	c	d		
排水溝	1			1		1					3
I			1								1
II					2	1					3
III				3	1		1	1		1	7
IV	5	1	1	5	3			1	1		17
V											
VI	1										1
計	7	1	2	9	6	2	1	2	1	1	32

A { a 石英を主体にチャート片を含むもの (伊波・荻堂・大山期)
 b 石英>磁鉄鉱 "
 c 石英>石灰質砂粒>磁鉄鉱 "

B { a 石灰質砂粒>石英 (室川期)
 b 石灰質砂粒>石英>磁鉄鉱 "

C { a 石灰質粗砂粒>石英 (室川上層期)
 b 石灰質細砂粒>石英 "
 c 石灰質細砂粒>石英>磁鉄鉱 "
 d 石英>磁鉄鉱 "

D : 細い石英を主体とするもの (後期)

室川期の資料

室川期の資料に属するものは、第35図11～15、第36図1～10に示す15点で、第36図10を除く他はすべて平底である。ここに分類したものは器色・胎土・混入物・焼成等の特徴が室川式と一致するものである。

底面から胴部への立ち上りの部分の形状をみると①僅かに外彎するもの、②直線的に移行するもの、③僅かに内彎するなどの3種見受けられるが、破損のため形状の把握できないものも1点(第36図2)ある。

①に属するものは第35図13、第36図1・4・5・9の5点、②に属するものは第35図11・12第36図3・7の4点、③に属するものは第35図14・15、第36図6・8・10の5点である。

①に属する資料は5点であるが、第35図13、第36図4・5・9の4点は底部の厚さが1センチ前後あり、第36図1は約5ミリと薄い。第35図13は胎土に細かい石灰質砂粒多量のほか石英や磁鉄鉱を少量混入する。表裏面に擦痕を残す。器色は全般的に茶褐色だが、内面と外部底面の一部は暗褐色となっている。室川期の古式の部類に入るものであろう。第4層の出土。他の室川式もすべてA式に属するもので、B式に属するものは未発見であった。

①に属する資料のうち底径の推算できるものは、第36図1・4・5の3点で最大は第35図5の6.2センチで、他の2点は3.6センチである。

器面調整は前記した第35図13の1例以外は、表裏面ともナデ調整を行っている。第36図4は表裏面とも著しく摩耗しているが、内面に僅かに残る原器面にはナデ調整を認めることができる。

器色は黄褐色・茶褐色の2種類みられ、前者が4点、後者が1点である。焼成は、いずれも悪く、脆弱である。

混入物は石灰質砂粒のほか石英や磁鉄鉱等

もみられる。石灰質砂粒・石英・磁鉄鉱を含む資料は第35図13の1点で、他は石灰質砂粒と石英を含むものである。しかし、石英や磁鉄鉱はいずれも少量である。

出土層は第36図4が第3層で、他の4点は第4層である。

②に属する資料は4点で、底部の厚さは第36図7が1.4センチとやや厚いが、他の3点(第35図11・12、第36図3)は1センチ前後である。第35図15は内面破損のため明示できないけれども、1センチ前後の厚さをもつものと思われる。

第35図11は多量の石灰質砂粒のほか石英や磁鉄鉱を混入する。表裏面とも擦痕がみられるが、表面ではナデによって擦痕は大分消されている。色調は表裏面とも暗褐色で、焼成は普通。底径は7センチ。第2層の出土。

同図12は多量の石灰質砂粒のほか石英を少量胎土に混入するもので、裏面にはわずかながら擦痕も認められる。色調は表裏面とも黄褐色で、焼成は悪く、脆弱で、底径は約7センチである。第4層の出土。

第36図3は多量の石灰質砂粒と少量の石英を胎土に含み、表裏面とも著しく摩耗し、一部破損した部分もみられるが、器面を残す箇所ではナデ調整も認められる。色調は表裏面とも黄褐色を呈し、焼成は悪く、脆弱である。底径4.5センチで、第3層の出土である。

第36図7は多量の石灰質砂粒と少量の石英や磁鉄鉱を胎土に混入するもので、焼成は比較的良好である。表裏面ともナデによって調整されている。色調は表面が黄褐色で、裏面は暗褐色を呈する。底径は5.8センチ。第3層の出土。







③に属する資料は第35図14・15、第36図6・8・10の5点で、底部の厚さは第36図10の不明を除くと最大が1.8センチ(同図8)

で最小は1.1センチ（第35図14）である。第36図6・8は室川B期、他は室川A期の底部資料である。

第35図14は胎土に石灰質砂粒を多く含み、

他に石英や磁鉄鉱を混入する。器色は表裏面とも黄褐色を呈し、器面調整は表裏ともナデによって仕上げられている。焼成は良好である。底径は5.8センチ。第4層の出土。

第24表 底部の型態と胎土混入物

混入物の種類 底部の模式図		A			B		C				D	計
		a	b	c	a	b	a	b	c	d		
平	① 	4	1		4	1						10
	② 	2		1	2	2						7
	③ 				3	2	1	1		1		8
底	④ 						1					1
	⑤ 										1	1
尖底	⑥ 								1			1
不明		1		1		1			1			4
計		7	1	2	9	6	2	1	2	1	1	32

注) 混入物の種類（アルファベット）は第25表と同じ。

同図15は多量の石灰質砂粒と石英を胎土に混入し、底部内面を欠くが、表面はナデによって整えられている。色調は表裏面とも茶褐色を呈し、焼成は悪く、脆弱である。底径は約5.5センチで、第4層の出土である。

第36図6は胎土に多量の石灰質砂粒を含み、少量の石英を混入する。器色は表裏面とも黄褐色を呈し、ナデによって調整され、焼成は良好である。底径は4.6センチ。排水溝の出土。室川B期のものである。

第36図8は胎土に多量の石灰質砂粒と少量の石英・磁鉄鉱を混入する。表裏面ともナデによって調整され、色調は表面が黄褐色、裏面が茶褐色である。焼成は良好で堅い。底径

は7センチと大きい。第4層の出土。室川B期の資料である。

第36図10は底面を欠損するが、立ち上がりの形状から平底が想定される。胎土に粒の粗い石灰質砂粒と石英を混入し、表裏ともナデによって調整され、焼成は良好である。第3層の出土。

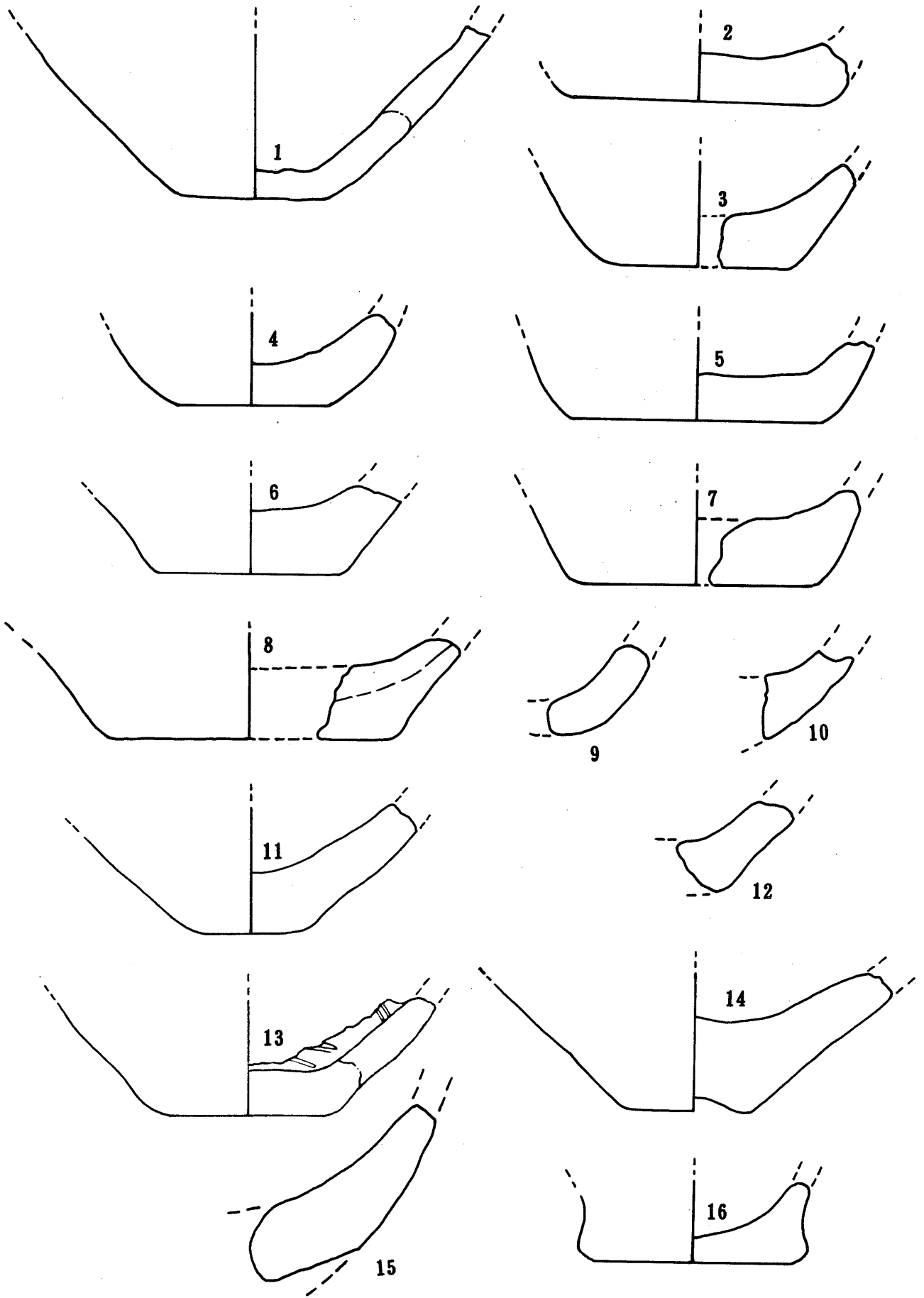
破損のため立ち上りの形状が把握できない資料は第36図2の1点で、底部は平底で、表裏面ともナデによって調整され、胎土に多量の石灰質砂粒と少量の石英・磁鉄鉱を混入する。焼成は普通である。色調は表面が黄褐色、裏面が茶褐色で、底径は6.2センチである。第2層の出土。

第25表 底部形態と底径

形態	期別 底径 (cm)	伊波荻堂 大山期	室川		室川上層		後期	計
			A期	B期	A期	B期		
平	①	3~3.9		2				10
		4~4.9	1					
		5~5.9	2					
		6~6.9	1	1				
		不明	1	2				
	②	4~4.9		1				7
		5~5.9	2	1				
		6~6.9	1					
		7~7.9		2				
	底	③	2~2.9				1	
3~3.9								
4~4.9					1	1		
5~5.9				2				
6~6.9								
7~7.9					1			
不明			1		1			
④	3~3.9				1		1	
⑤	4~4.9					1	1	
尖底	⑥	1~1.9				1		1
不明	6~6.9		1※					4
	不明	2				1		
計		10	13	2	3	3	1	32

注) 1. 形態番号は第24表に同じ。

注) 2. 室川A期の1点(※印)は形態不明であるが底径が推算できた。



0 5cm

室川上層 A 期

室川上層式と特徴が一致するもので、第36図11・12・13の3点はこれに属する。

同図11は底径の小さい底部でやや厚く、約1.5センチを測る。焼成は良く、堅緻で、石灰質砂粒を含む。混入量は室川上層式としては多い方だが、室川式に比べると少ない。外面は石灰分で厚く被われている。しかし、内外面とも室川上層特有のポーラスな器面を認めることができる。外面については器色・器面調整の方法など不明だが、内面は茶褐色のやや暗い色を呈し、ナデ調整を行っている。底面からの立ち上りの部分はいくらか内彎する。第2層の出土。

同図12は、底面を欠くが、平底とみられるものである。底面から立ち上る部分は同図11

と同じ型態をとる。両面ナデ調整を行っている。器面のポーラス性は弱い、室川上層A式と認められるものである。焼成は良く、堅緻で、器色は暗褐色。多量の石英と少量の磁鉄鉱を胎土に混入する。第4層の出土。

同図13は平底で、底面からの立ち上りは前記2資料と同じく、いくらか内彎してから開く器形に属している。両面ナデ調整を行っているが、内面には工具による調整痕も見受けられる。主に横の方向である。器色はやや黄みがかかった茶褐色。外面は室川上層特有のポーラスな器面だが、内面は若干ポーラス性が弱い。焼成は良好で堅い。混入物は粒の粗い石灰質砂粒を主に含み、他に石英も散見される。第3層の出土である。

第26表 底部の型態と層位的出土状況

型 態 層 序	平				底			尖底	不 明	計
	①		②		③	④	⑤	⑥		
	伊波・荻堂・大山期	室川期	伊波・荻堂・大山期	室川期						
排水溝	1				1	1				3
I	1									1
II				1	1				1	3
III		1		2	2		1		1	7
IV	2	4	3	1	4			1	2	17
V										
VI	1									1
計	5	5	3	4	8	1	1	1	4	32

注) 型態の番号は第24表と同じ

室川上層B期

室川上層B式と特徴が一致するものをここにまとめる。第36図14・15と第34図10の3点で2点は平底、他の1点は尖底である。

第36図14は底径の小さい平底で、底面は図のような凹面をつくる。器面は両面ともポーラスで、焼きは悪く、脆い。器色は黄みの強い茶褐色。底部の形状は底面から内彎しながら立ち上る器形に属している。石英や石灰質砂粒・磁鉄鉱をわずかに含むが、観察は困難である。混入物の観察しにくい点は室川上層B式の特徴と一致する。排水溝の出土。

同図15は底面が破損し、そのため底形は不明だが、焼成・器色・器面のポーラス性等、同図14と一致し、室川上層B期に位置付けられるものである。器面は両面ともナデ調整を行っている。この資料も胎土混入物は観察しにくい、石灰質砂粒をわずかながら認めることができる。第3層の出土。

第34図10は室川上層B期の典型的なもので、R-12第4層の出土である。この土器は復元図を前回紹介（註1）したので本項では記述を省略する。

後期系の底部

第36図16の平底は、いわゆる後期の資料で、くびれ平底である。器色は茶褐色、焼成は良く、堅い。胎土の混入物は見受けられない。N-12第3層の出土であるが、同層は攪乱層であり、後世の遺物としては他に須恵器や陶器などの破片も数点出土している。

以上、各期の底部について略述したが、これらの形態は第26表のように6種にまとめられる。1・2の形態は伊波～大山期に特徴的で、室川期になると3のような立ち上りの部分がやや内彎を示すものが現われる。もっとも室

川期でも1・2の形態をとるものもある。室川上層期になると底径の小さい平底が現われ、4のように底面が凹面をつくるのもあり、6のような尖底も出現する。5は後期のいわゆるくびれ平底で、攪乱部の出土である。

j) 無文胴部

本地区出土の無文胴部は2,088点で、これらは型式の判明する口縁や有文胴部あるいは底部に接合できないものである。しかし、焼成・器面調整・器色・胎土混入物・その他の特徴から、ある程度、型式の判別は可能である。そのような特徴を基準に分類したのが第27表である。次に各型式ごとに記述する。

第27表 無文胴部破片出土状況

期 別 層 序	伊波・荻堂・大山期	室川期		室川上層期		奄美式土器	後期の土器	計
		A類	B類	A類	B類			
排水溝	174	46	13	14	23		4	274
I	190	2	9	27	45	3	6	282
II	153	12	1	8	50	1	16	241
III	136	22	17	10	45		26	256
IV	641	102	38	51	203			1,035
V								
計	1,294	184	78	110	366	4	52	2,088

イ) 伊波・荻堂・大山期

伊波・荻堂・大山の三型式を一括したのは、これらの胴部破片は特徴を共有しており、現段階では、この三型式の胴部破片を識別することは不可能だからである。器色は暗褐色、

器面はナデ調整を行い、擦痕を施すものもある。胎土には主として石英を混入するが、それにチャートを少量加えるものもある。胎土は粗く、一般的に脆弱である。胴部破片としては最も出土量が多く、第4層でも600点余得られているが、同層が前V期と考えられることから、何らかの理由で下層のものが混入したものであろう。

ロ) 室川式

この型式に属するものは262点である。この型式は口唇を強調するところに最も大きな特徴があるが、明るい器色を有することや石灰質砂粒を混入することも特色として挙げることができる。無文胴部を見る場合、むしろ後者の2点が基準となる。ところで室川式には器色がやや暗褐色あるいは暗緑色に近く、石灰質の微砂粒を含むものと、器色が明るい褐色に属し、石灰質の粗砂粒を含むものがある。前者をA、後者をBとする。出土量は第27表の通りで、今回はA類の方が多かった。この土器は大山式に後続する前IV期の土器とみられるから、第4層の140点も伊波・荻堂・大山諸型式と同じように何らかの理由で混入したものであろう。

ハ) 室川上層式土器

室川式に後続するとみられる前V期の土器で、口唇を強調するものもみられるが、器面がアバタ状にポーラスになっているのが最大の特徴で、そのほか石灰質の砂粒を微量含む点も特徴の一つに数えることができる。焼きが良くて硬質のものと軟質泥胎の二つに大別することができ、前者をA、後者をBと仮称する。Aの器色は暗褐色に近いものが多く、Bは明るく、黄褐色を帯びたものが多い。出土量は第27表の通りで、両者合わせて500

点近く検出された。室川上層式土器は第4層を代表する土器とみられるが、それにしても出土量が少いようである。

同じく第4層を代表するとみられるものに宇佐浜式土器がある。中央区で、3点の口縁破片が出土したが、そのうち2点は室川上層期、他の1点は宇佐浜期のものである。前者の2点は第3層、後者は第2層での出土で、第4層での出土はなかった。沖縄市が行った範囲確認調査(註2)の際も、また先年のQ・R-7区(註6)試掘の際も第4層では宇佐浜式土器は少なかった。少なかったというより、稀少と表現した方がいいだろう。本遺跡の第4層の性格を究明する上で、この状況は注意しておく必要があると思われる。

ニ) 奄美式土器

一見、伊波式・荻堂式・大山式などの胴部に類似するが、それらと比べると器壁は若干薄く、焼成はよく堅緻で、この2点が著しい特徴となっている。この他に金雲母を含む点も挙げることができるが、金雲母の混入量は少ないので、破片が小さい場合は観察できないこともある。今回、奄美式の胴部破片が4点得られたが、すべて攪乱部の出土であった。

ホ) 後期の土器

胴部の破片が52点出土した。この種の土器は1978年の調査の際、南西隅のM-18・19区の第2層で50数点出土(註2)しており、また、T-16・17区の攪乱層(第III層)からも口縁破片が1点出土(註6)していて、本遺跡の南縁部のどこかに後期の遺跡があるものと思われる。しかし、未だ包含層は突き止められていない。中央区出土の52点はすべて攪乱層(第1~3層)からの出土であり、上方から流れ込んだものであろう。

第28表 沖縄諸島の編年（試案）

時期区分		土器型式	沖縄諸島発見の縄文・弥生式土器	その他の年代資料
前期	I	ヤブチ式土器 東原式土器	}爪形文土器	ヤブチ式 6670 ± 140 y. B. P. 東原式 6450 ± 140 y. B. P.
	II	曾畑式土器 条痕文土器 室川下層式土器	曾畑式土器 条痕文土器	曾畑式（渡具知東原） 4880 ± 130 y. B. P.
	III	?		
	IV	伊波式土器 荻堂式土器 大山式土器 室川式土器	出水系土器 市来式土器	伊波式（熱田原） 3370 ± 80 y. B. P. 伊波式（室川） 3600 ± 90 y. B. P.
	V	室川上層式土器 宇佐浜式土器		宇佐浜式は黒川式 並行とみられる
後期	I	?	板付Ⅱ式 亀ノ甲類似土器	
	II	具志原式土器	山ノ口式土器	
	III	アカジャンガー式土器	免田式土器 ↑ ↓	アカジャンガー式は中津野式並行とみられる
	IV	フェンサ下層式土器		類須恵器

V お わ り に

以上、室川貝塚の中央区における調査について概要を述べた。

今回の調査は中央区の南半部を対象としたが、先述のように第1～3層は攪乱を受け、第4層のみ未攪乱であった。しかし、第4層は全体的に層厚が薄く、したがって発掘面積に比し、遺物の出土は少なかった。第5層は焼土層で、その下に前IV期の混貝土層があるが、今回は時間の都合で焼土層以下は調査の対象から外した。

今回の調査区に特に遺構と断定できるものは見られなかった。ただ、M～Oの12区に石灰岩礫の集中したところ（第4図）があり、全容を明らかにすることはできなかったが、これらの礫は地山に半ば埋められており、M区からN区へ急傾斜し、O区の東端で切れ、そこから未攪乱の第4層が東方へ広がる。この礫群はM区では表層、O区では第3層で覆われ、M区の礫群の間から類須恵器の破片が検出された。また、第3層も攪乱層であり、そのことからたとえこの礫群が遺構だとしても、現時点で時期を決定することは困難であろう。今回は時間がなく、この礫群の全貌を明らかにすることができなかったのは残念である。この礫群のほかに、特に遺構らしいものは見受けられなかった。

この地区で得られた人工品は骨器・石器・土器の3種類で、貝器は未発見であった。

骨製品は18点の出土があった。その中で利器などの実用器具に属するものは骨錐・骨針・ポイントなどわずかに5点で、他の13点は装身具に分類できるものであるが、後者には獣形装身具のように呪術と関係したであろうと

みられるものも数点含まれている。

この種の骨製装身具は荻堂期に盛行し、大山期のころ衰退すると考えられている。今回、第4層で1点出土をみたが、これを前V期まで存続した例とみるか、判断がむづかしいところである。何故なれば、同層からは荻堂式や大山式がかなり出土しており、それらに伴う可能性も否定できないからである。この種の骨製獣形装身具の終末の問題については、今後、層位の良好な遺跡で確かめる必要があらう。

第4層の骨製品にはこの獣形装身具のほか骨錐・骨針・ポイント・犬の歯のペンダント・イタチザメの歯を利用したペンダントおよびサメの脊椎骨を利用した製品などがあり、これらも一応、留意しておきたい。

次に石器であるが、用途が判明するのは石斧・凹石・なめし用石器・磨石・石皿の5種で、種類はそう多くはない。

石斧には局部磨製・乳棒状・定角式などがあり、特に局部磨製石斧は一部に自然面を残す点が注意された。定角式石斧は本県では類例の少ない資料であるが、著しく破損して形態がつかめず、かつ排水溝からの出土であって時期も明確さを欠き、その点惜まれる資料である。なめし用石器も発見例の少ない資料であり、どの土器に伴うかは不明であるが、第4層で出土したことは記憶しておいてよいであろう。

土器は沖縄現地のものが7型式、そのほか奄美式土器もわずかではあるが検出されている。すべて前IV～V期のものであるが、上部の攪乱層からは後期の土器も50点ほど出土した。

これらの土器は胴部の破片も含め、ほとんど各層でみられたが、宇佐浜式土器だけは第4層に含まれておらず、このことは従前の調査ともほぼ一致している。第4層は貝を含まず、赤黒の土層からなり、そのような層相から典型的な前V期の土層といえる。しかし、宇佐浜式の稀少なことから、室川上層式の層、つまり前V期前半の時期を考えてよいと思うが、先述のように土器は宇佐浜式を除いて、ほとんどの型式が得られており、これをどう解釈するかという問題が残る。しかし、今回は結論を得るにいたらなかったのも、これも今後の課題としたい。

中央区の調査については、沖縄市教育委員会が実施した分はすでに報告書(註2)も刊行されており、その方も併せてご参照いただきたい。

室川貝塚の発掘調査は1974年の第1次以来、1979年の第5次まで5ケ年にわたって実施された。人工遺物に関する報告は本報告を以て、一応終了とするが、自然遺物については大部分が未報告となっており、各種遺物の同定がすみ次第報告したいと思う。

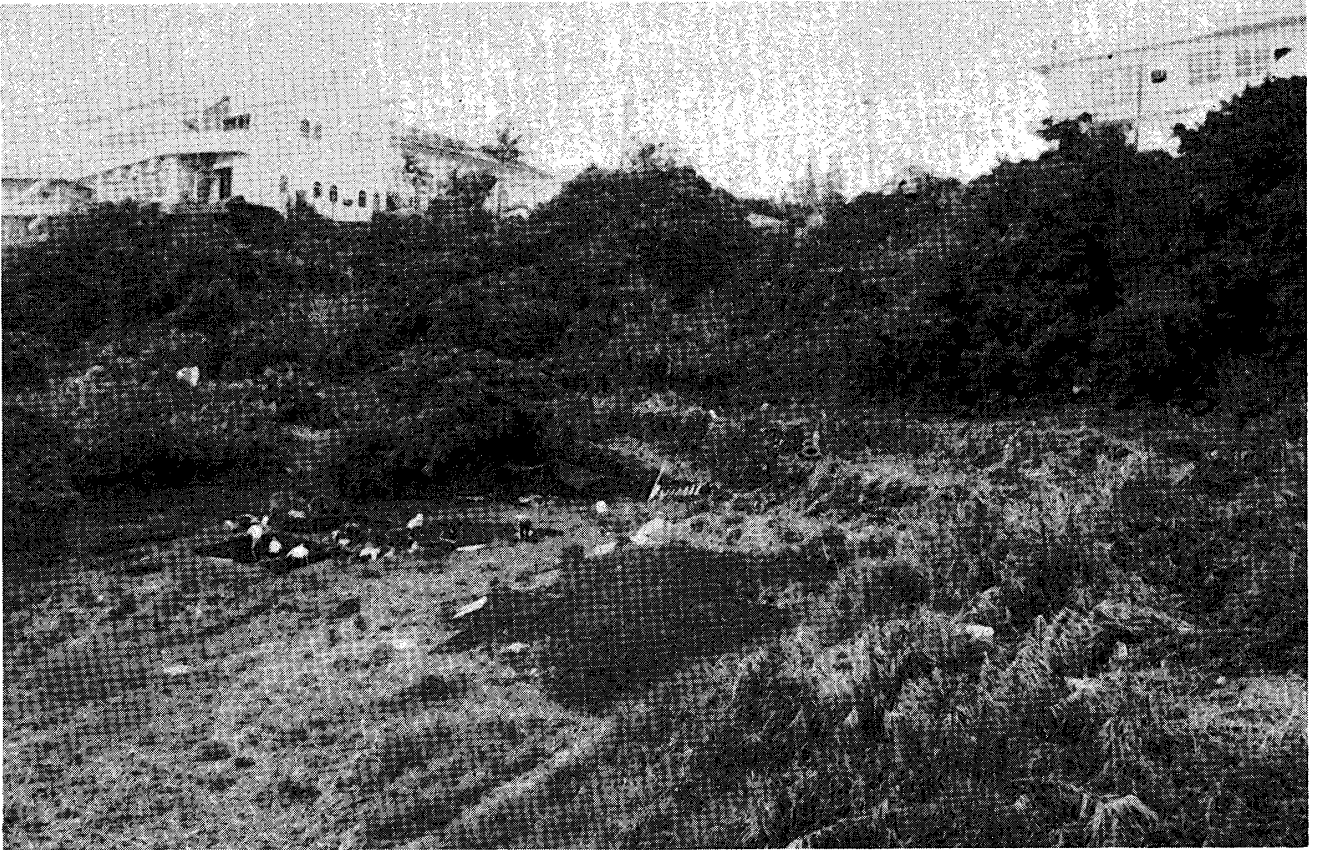
最後に長期間にわたる調査に対し、始終協力を惜しまなかった山城清輝教育長をはじめ、沖縄市教育委員会の方々に心からお礼を申し上げます。

〔 註 〕

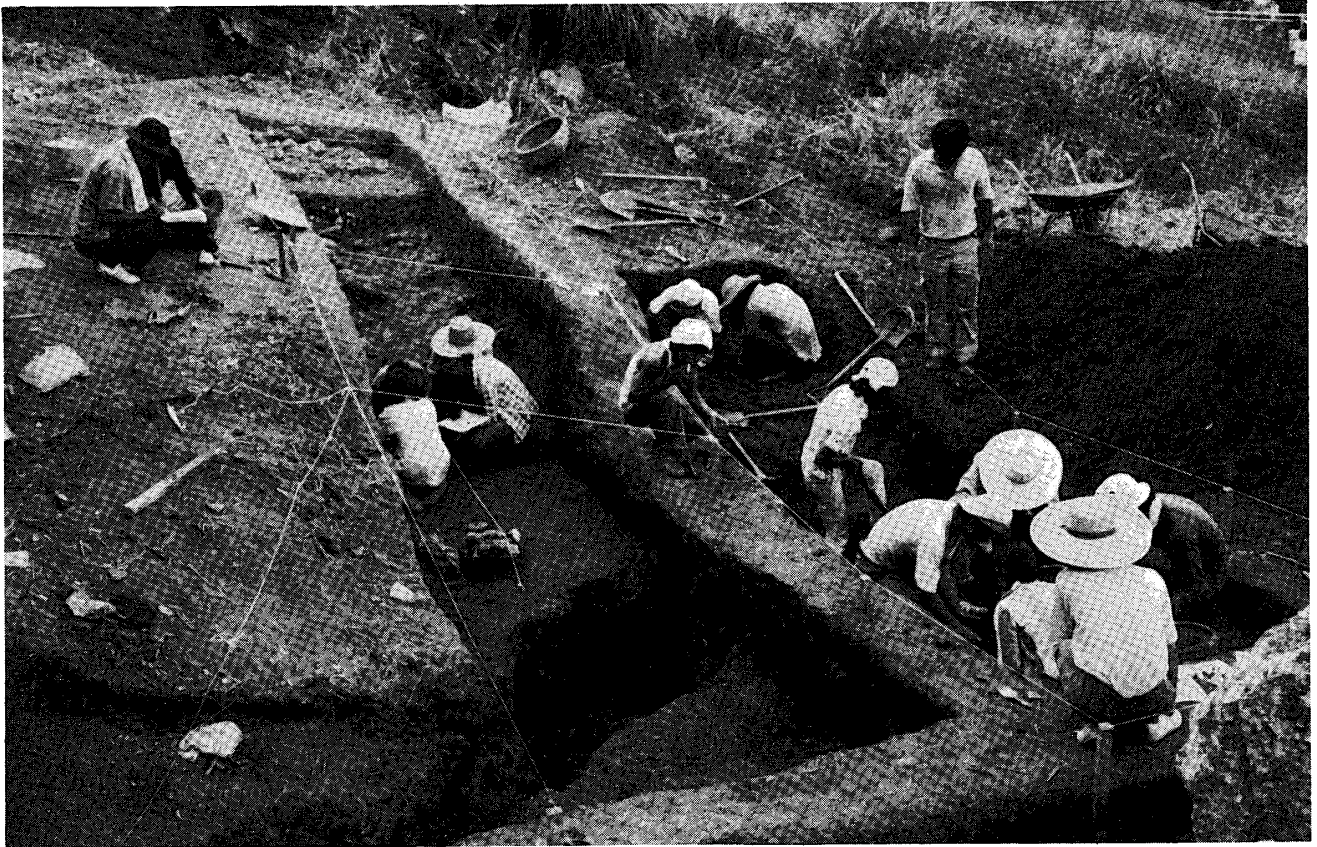
1. 高宮廣衛・湖城清・嘉数卓・東江千栄子・玉城初子・阿利直治・玉城朝健 「室川貝塚第2～4次発掘調査概報」沖国大考古第4号 沖縄国際大学 1980.
2. 沖縄市教育委員会「室川貝塚範囲確認調査報告書」沖縄市文化財調査報告書第1集 1979
3. 高宮廣衛・C. W. MEIGHAN 「熱田原貝塚の土器」 沖国大文学部社会篇 1巻第1号 1973.
4. 高宮廣衛・山内勝美・下地安広 「室川貝塚第3～5次発掘調査概報」 沖国大考古第5号 沖縄国際大学 1981.
5. 河口貞徳・上村俊雄・多々良友博・平島勇夫・肱岡隆夫 「嘉徳遺跡——大島郡瀬戸内町嘉徳砂丘遺跡の調査」鹿兒島考古第10号 1974.
6. 高宮廣衛・島袋優子・阿利直治・島袋洋 「室川貝塚第3～4次発掘調査概報」 沖国大考古第3号 沖縄国際大学 1979.

図

版

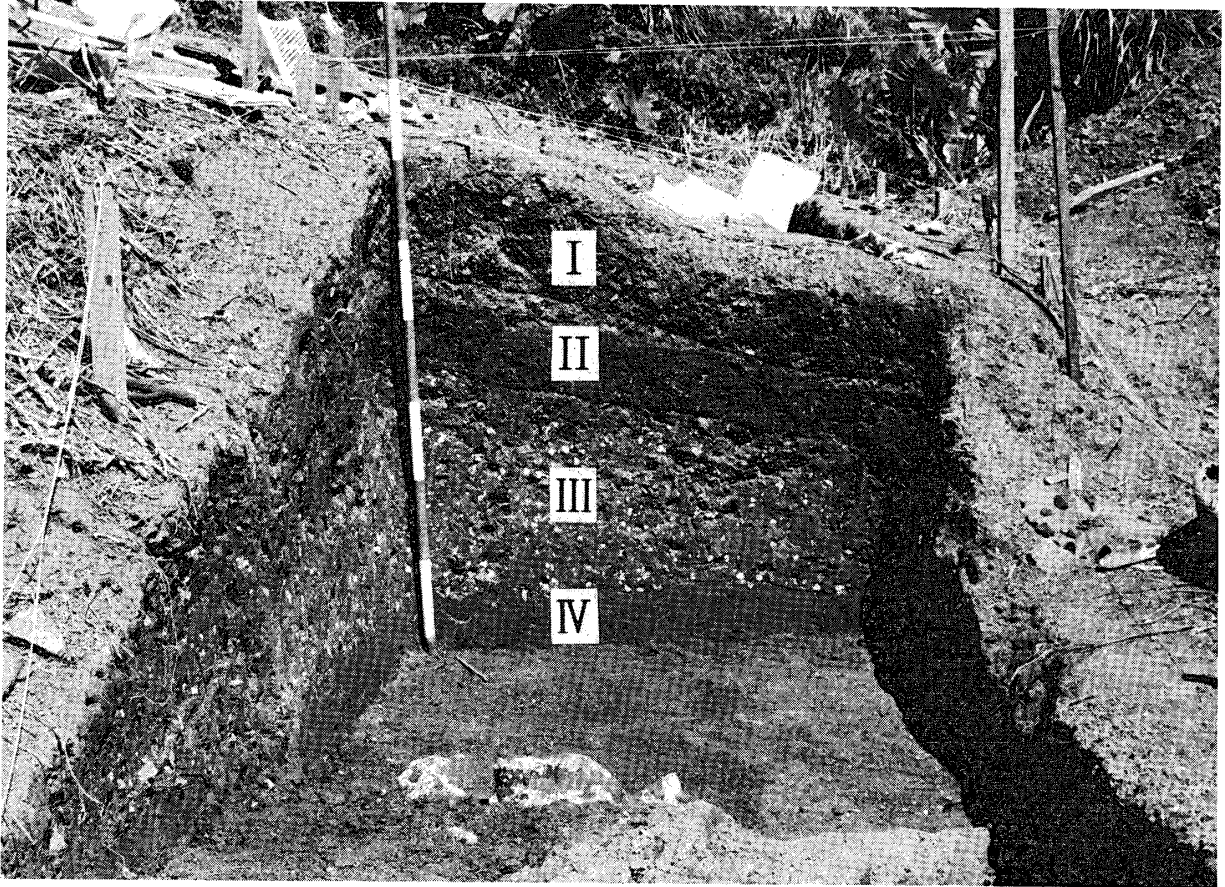


A

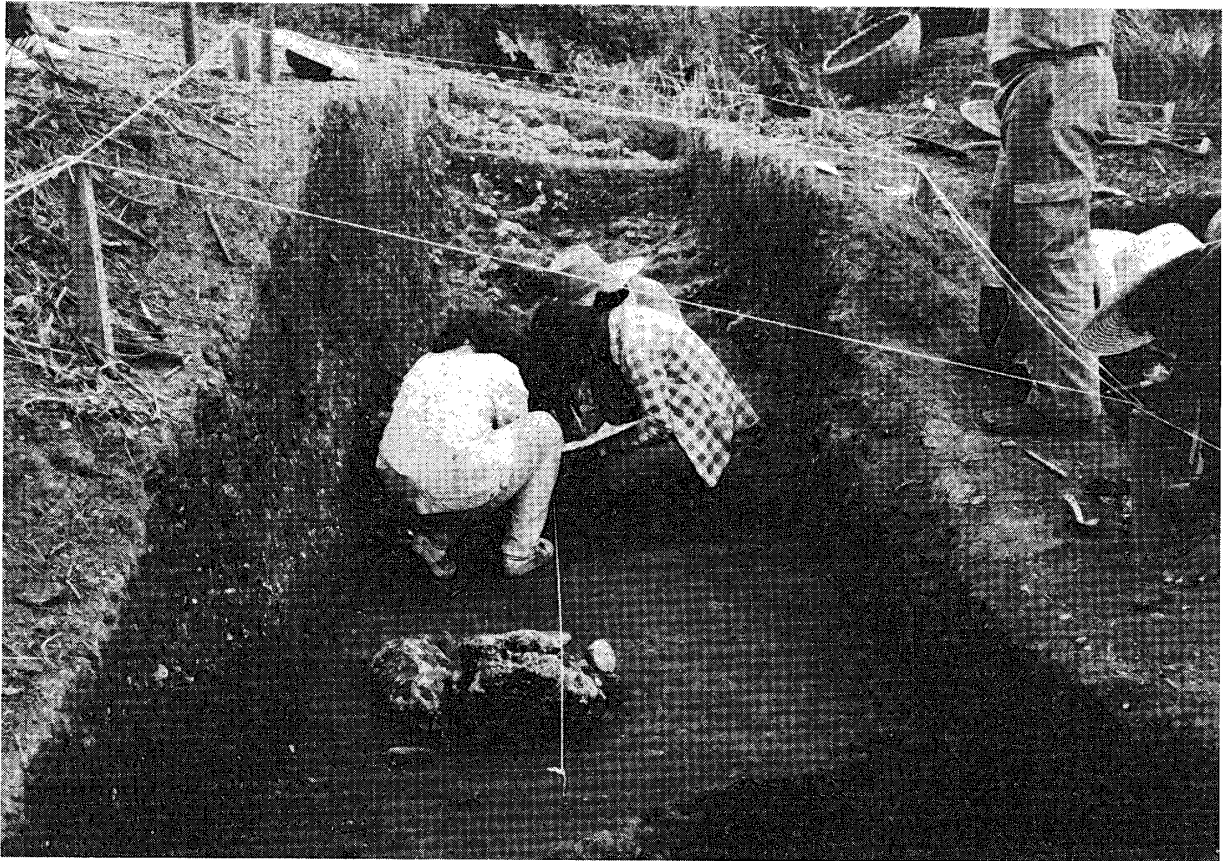


B

第1図 A=室川貝塚遠景, B=中央区(手前は東)

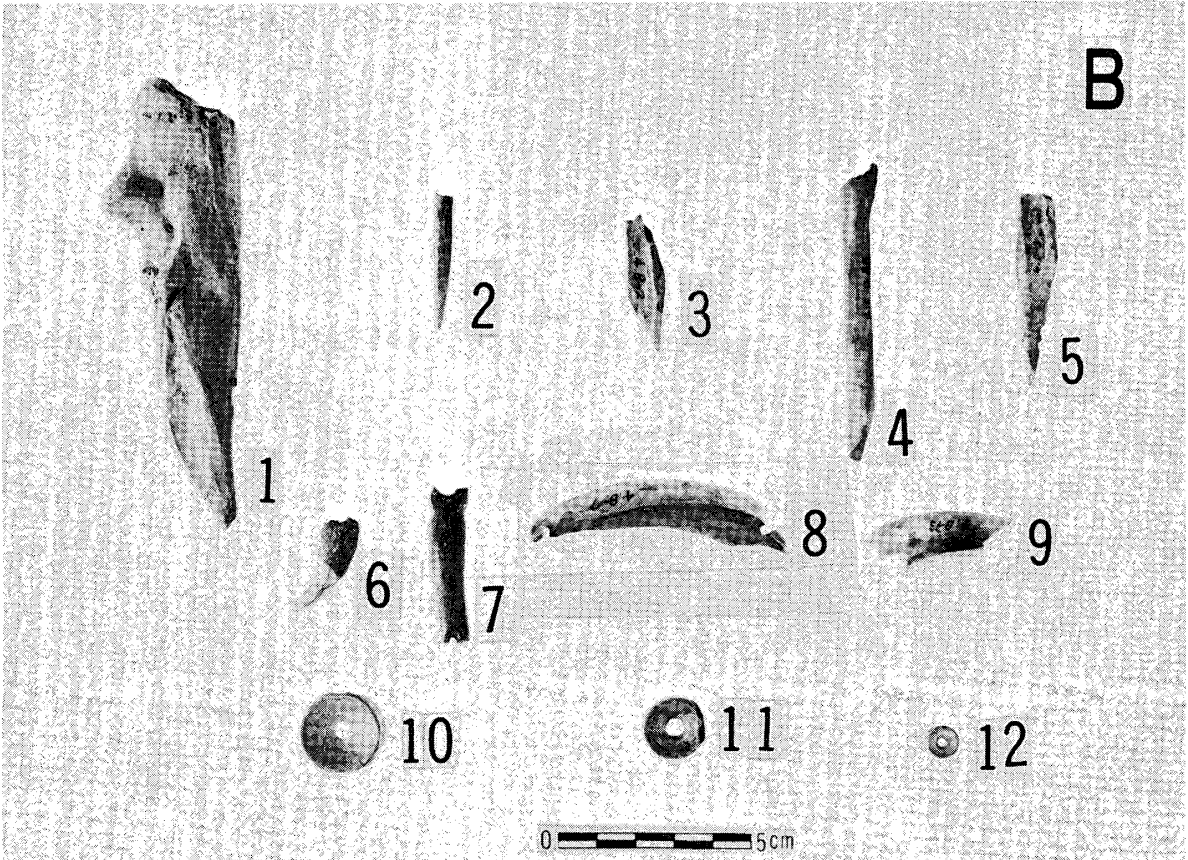
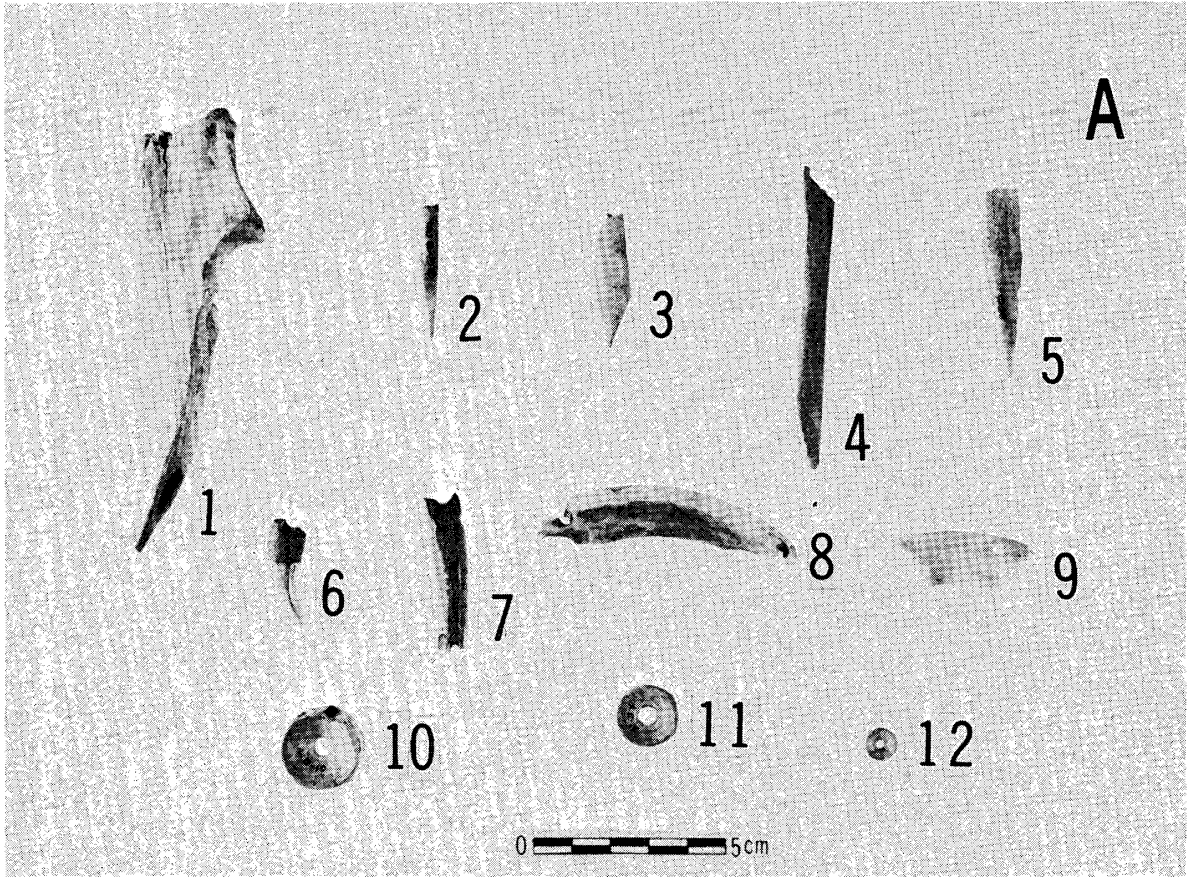


A

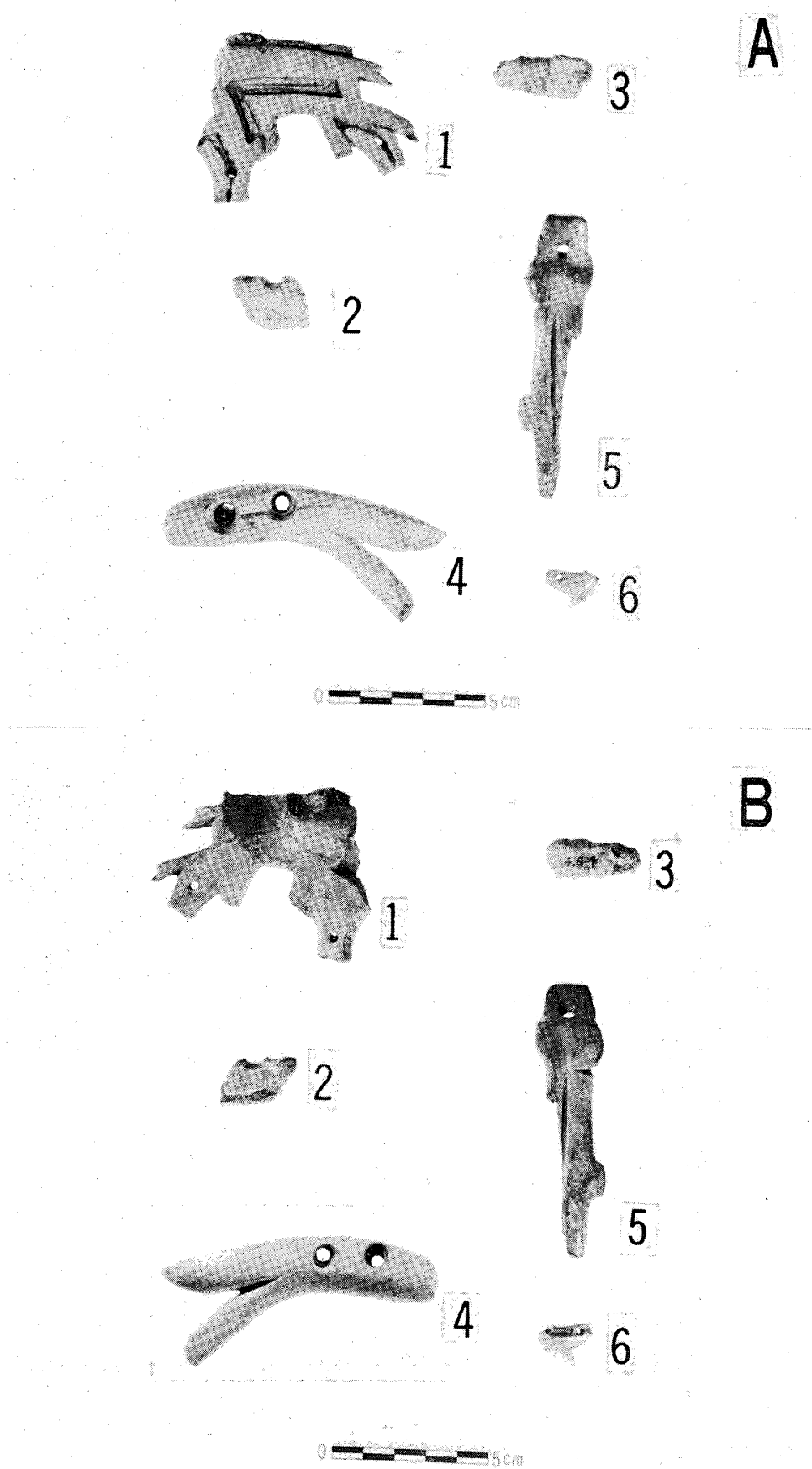


B

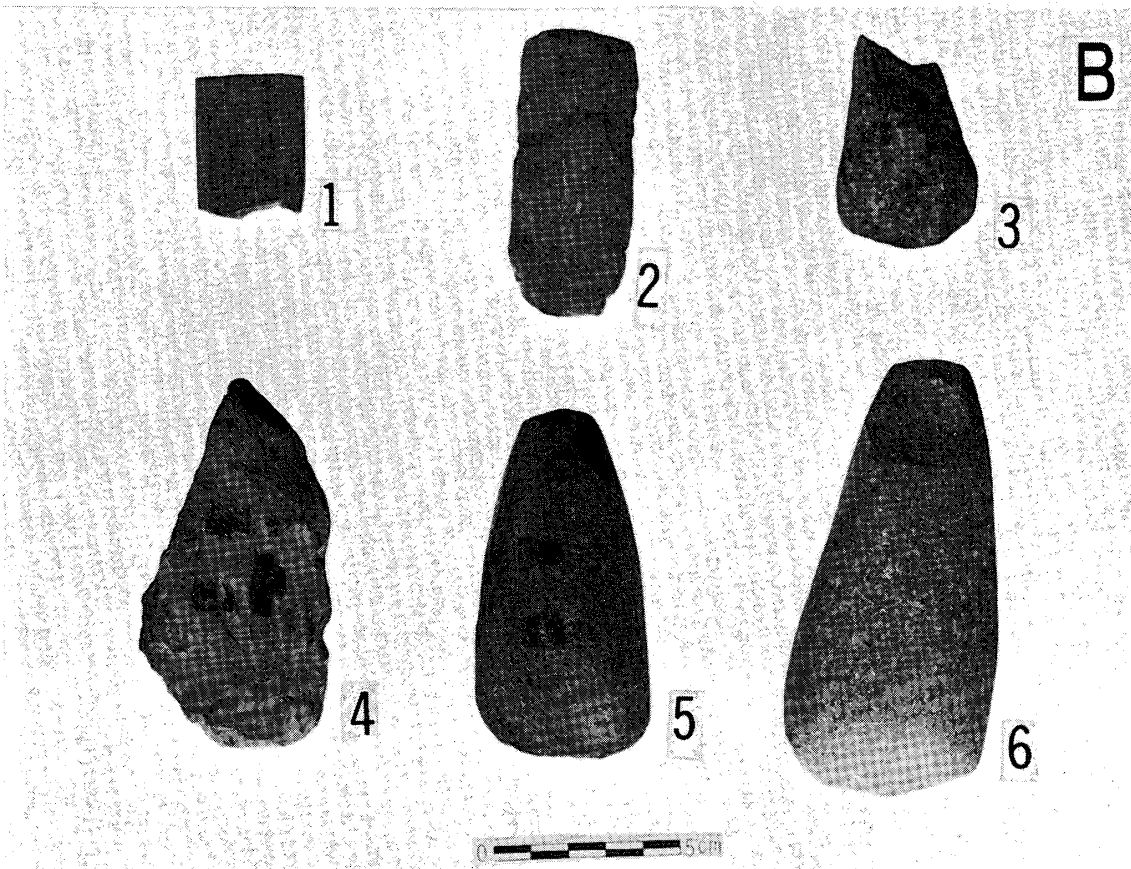
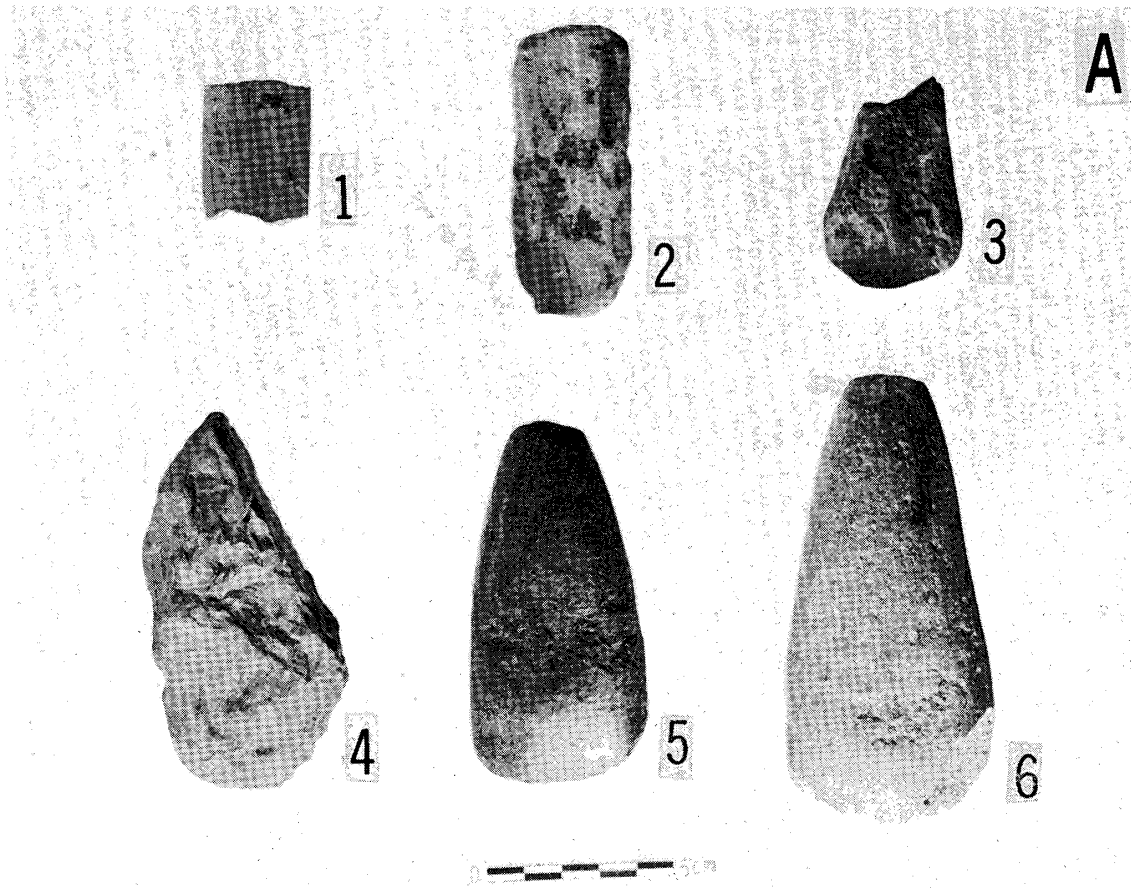
第2図 A=P-12区西壁および南壁面の層序, B=同 西壁除去後のトレンチ (左側は南壁)



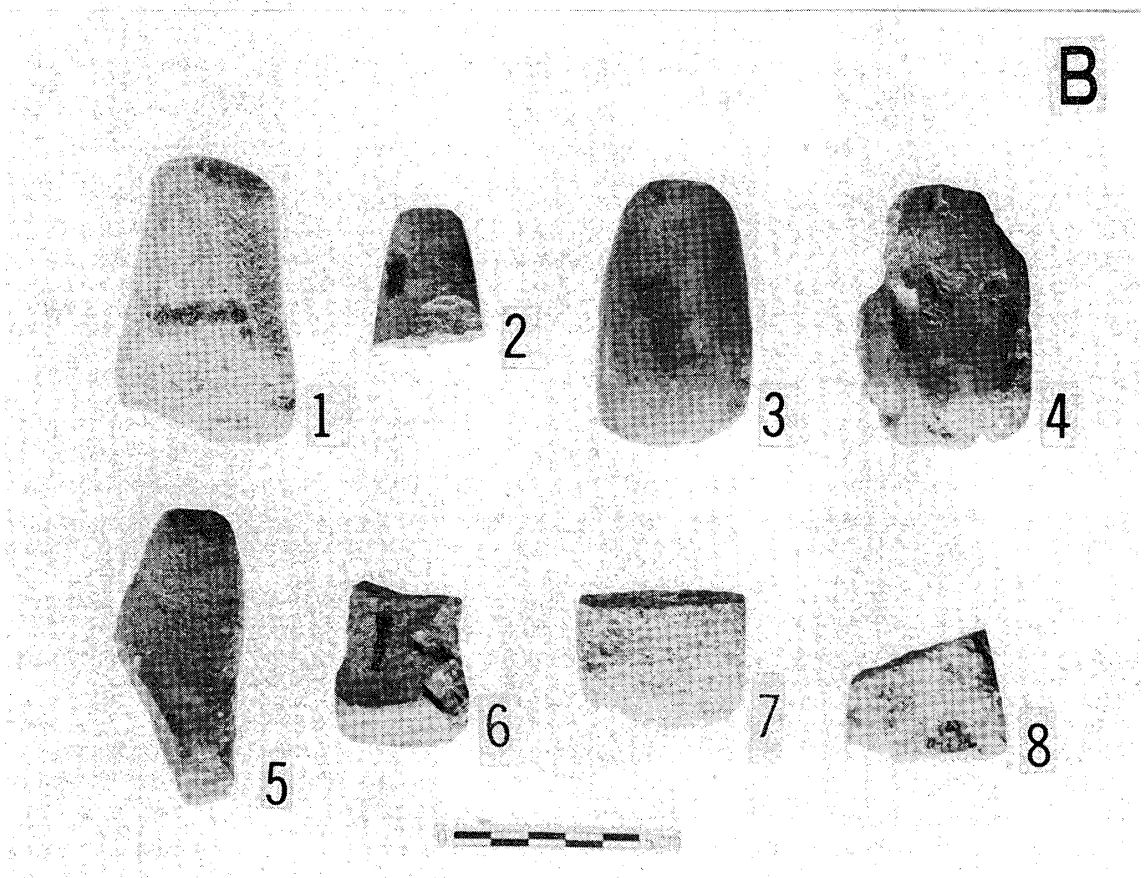
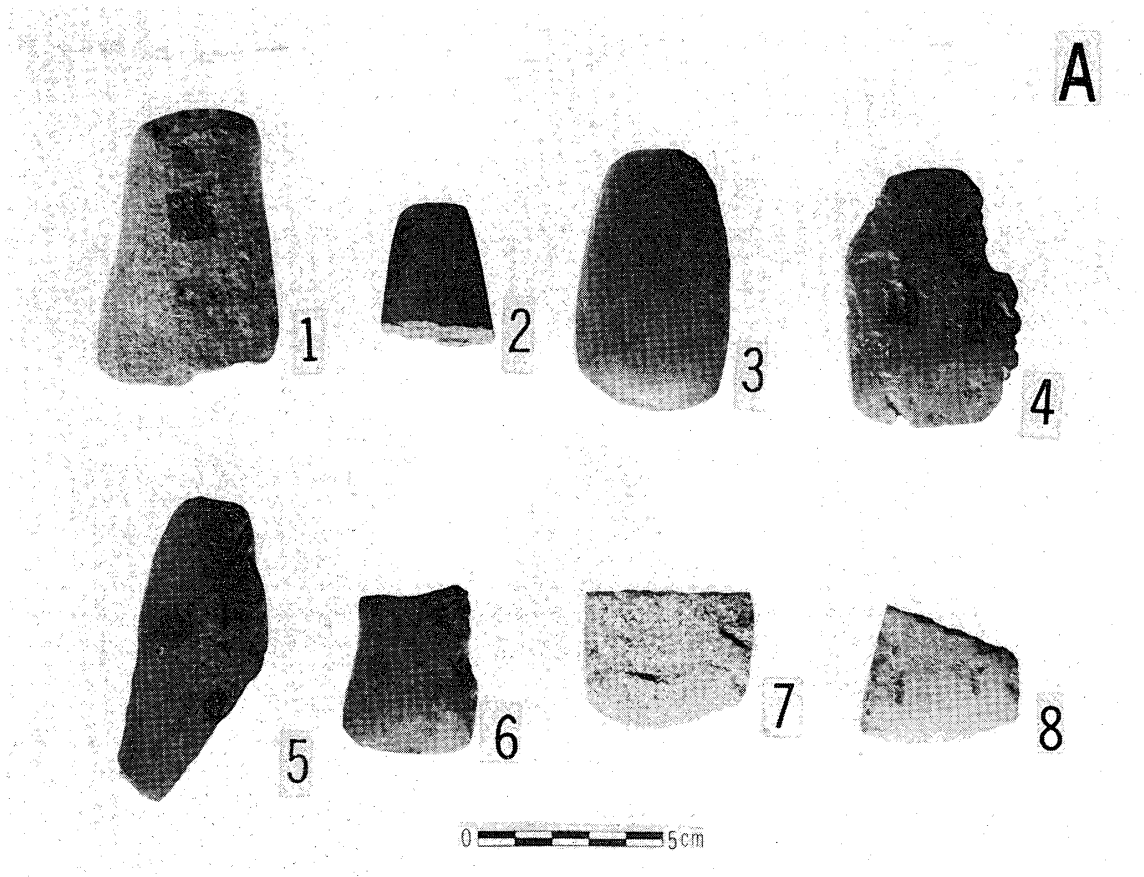
第3図 骨製品 (Aは表・Bは裏)



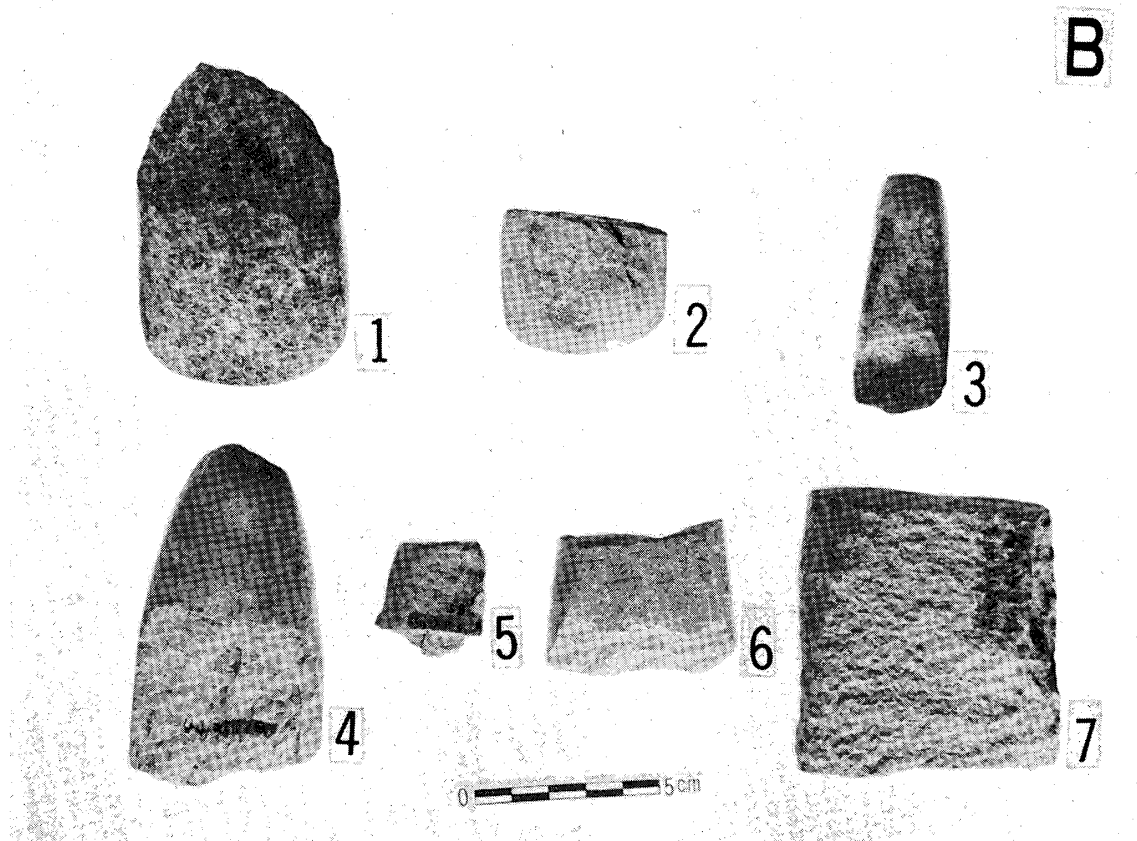
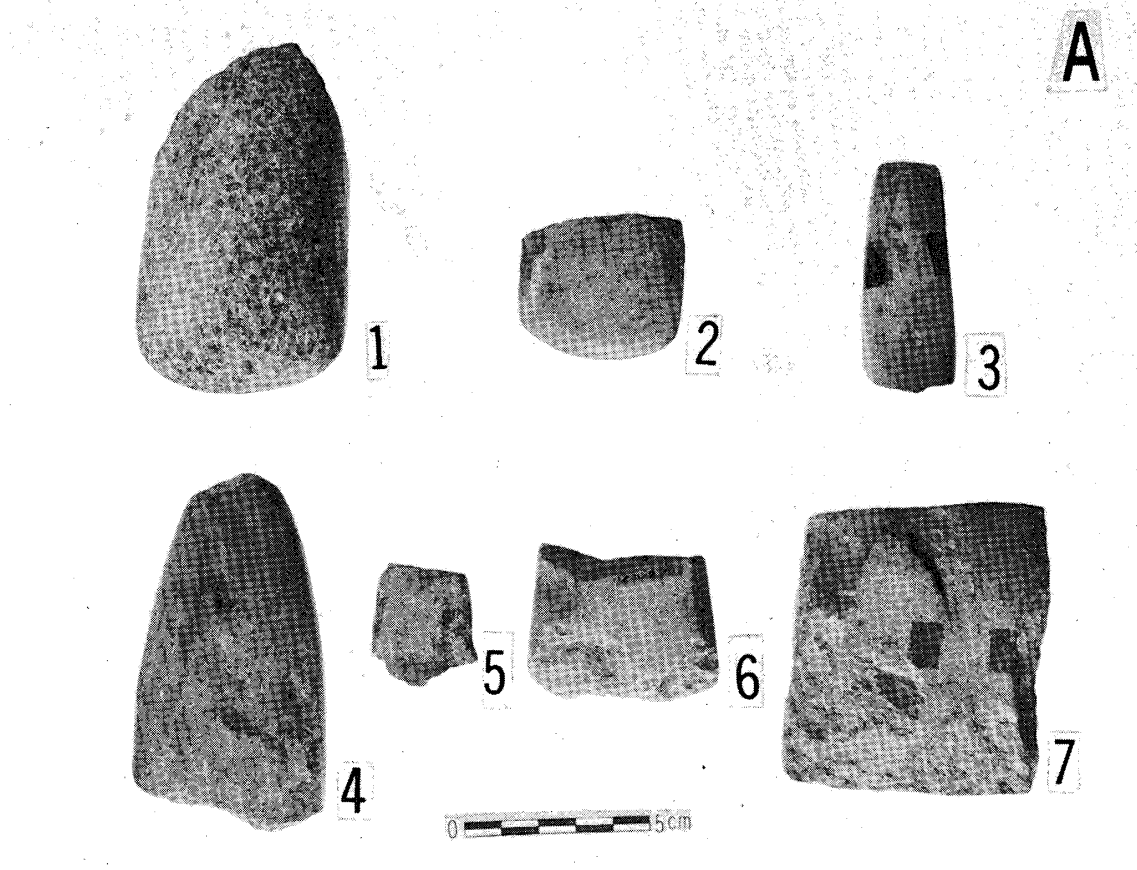
第4図 骨製装身具 (Aは表・Bは裏)



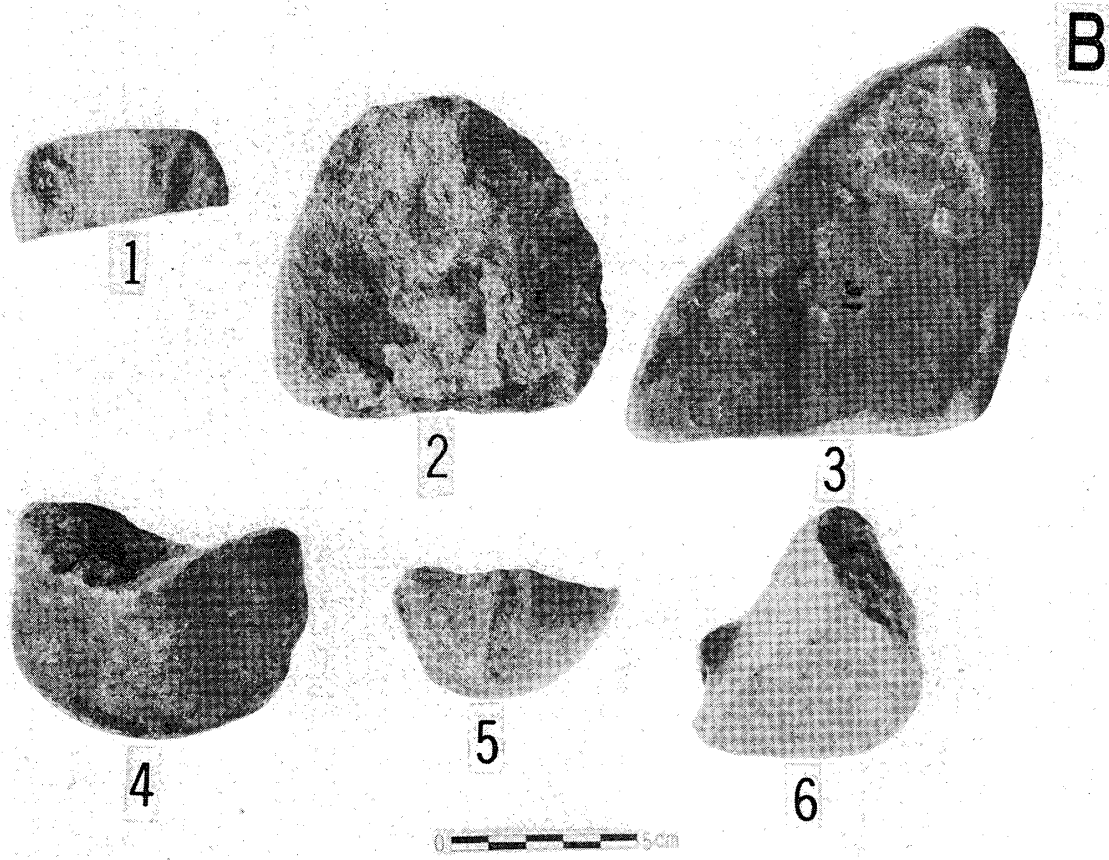
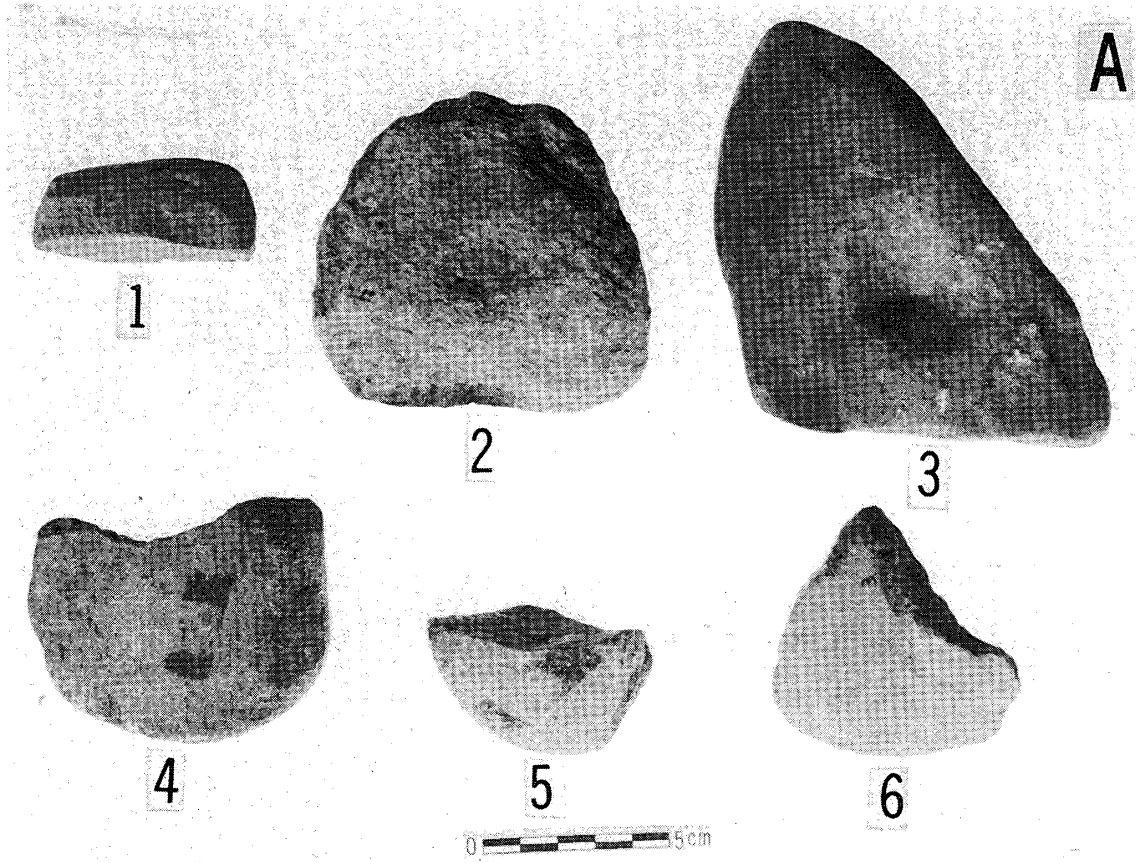
第5図 石製品(1)および石器(2~6)(Aは表・Bは裏)



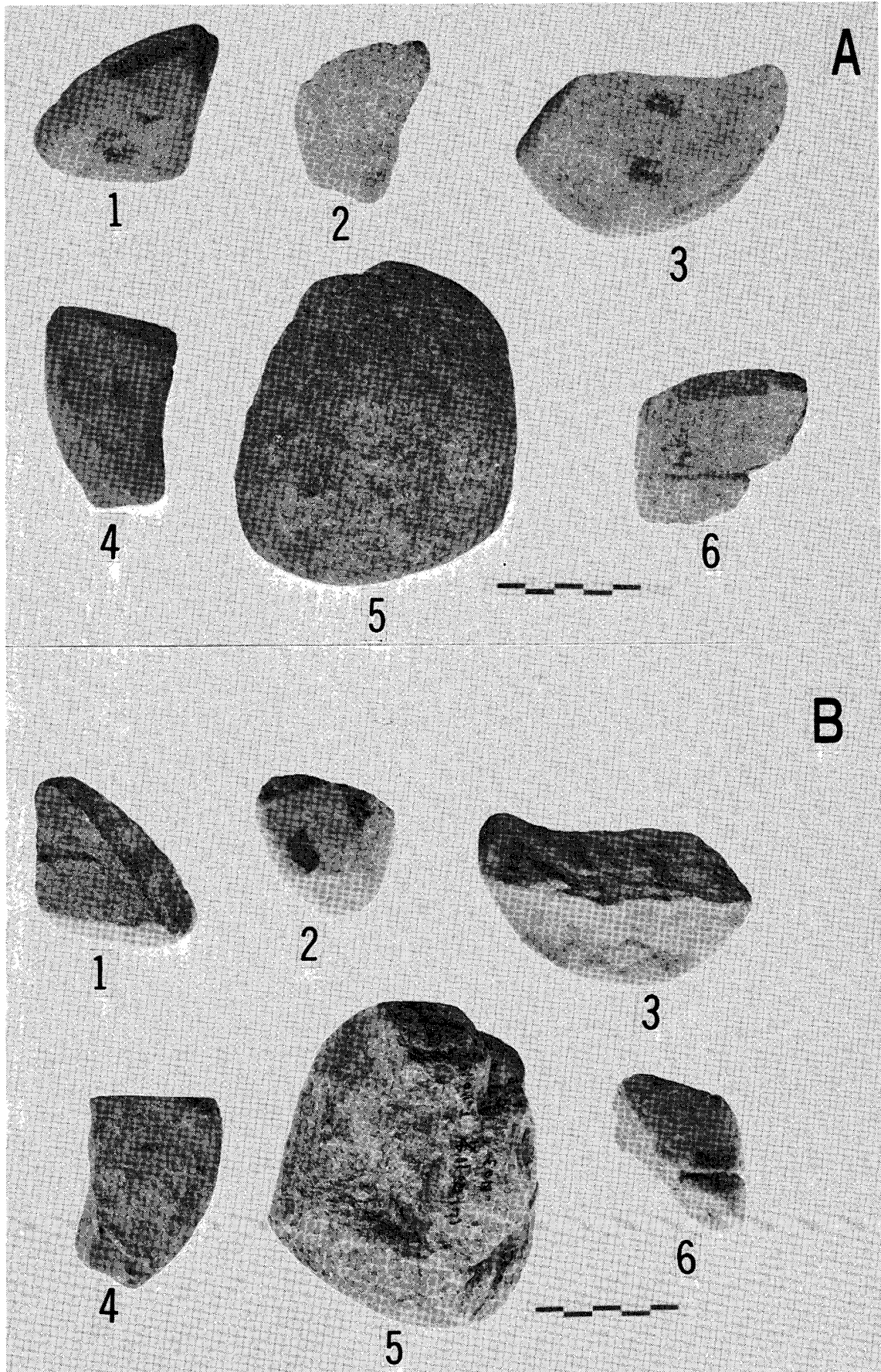
第6図 石斧 (Aは表・Bは裏)



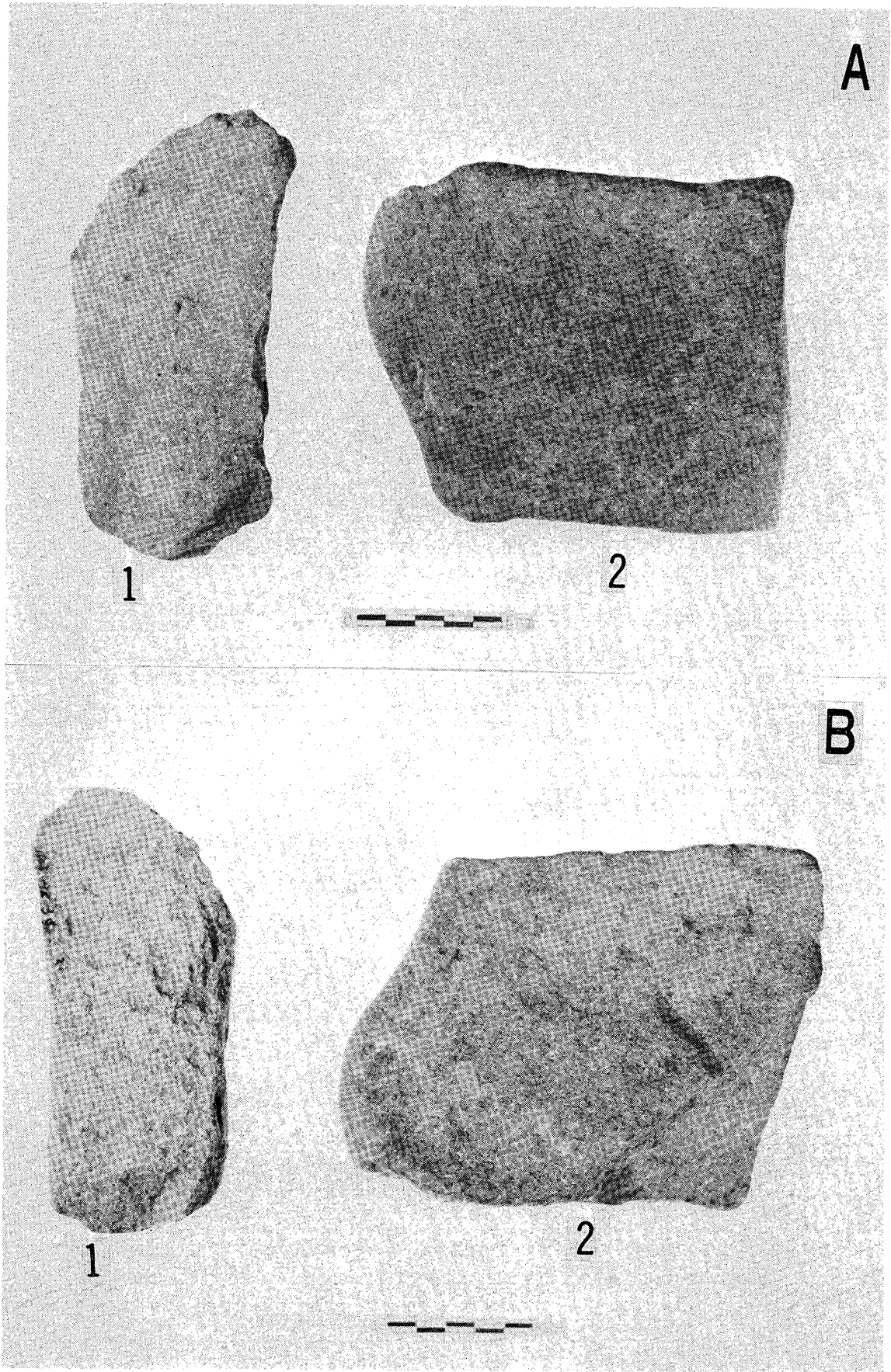
第7図 石斧 (Aは表・Bは裏)



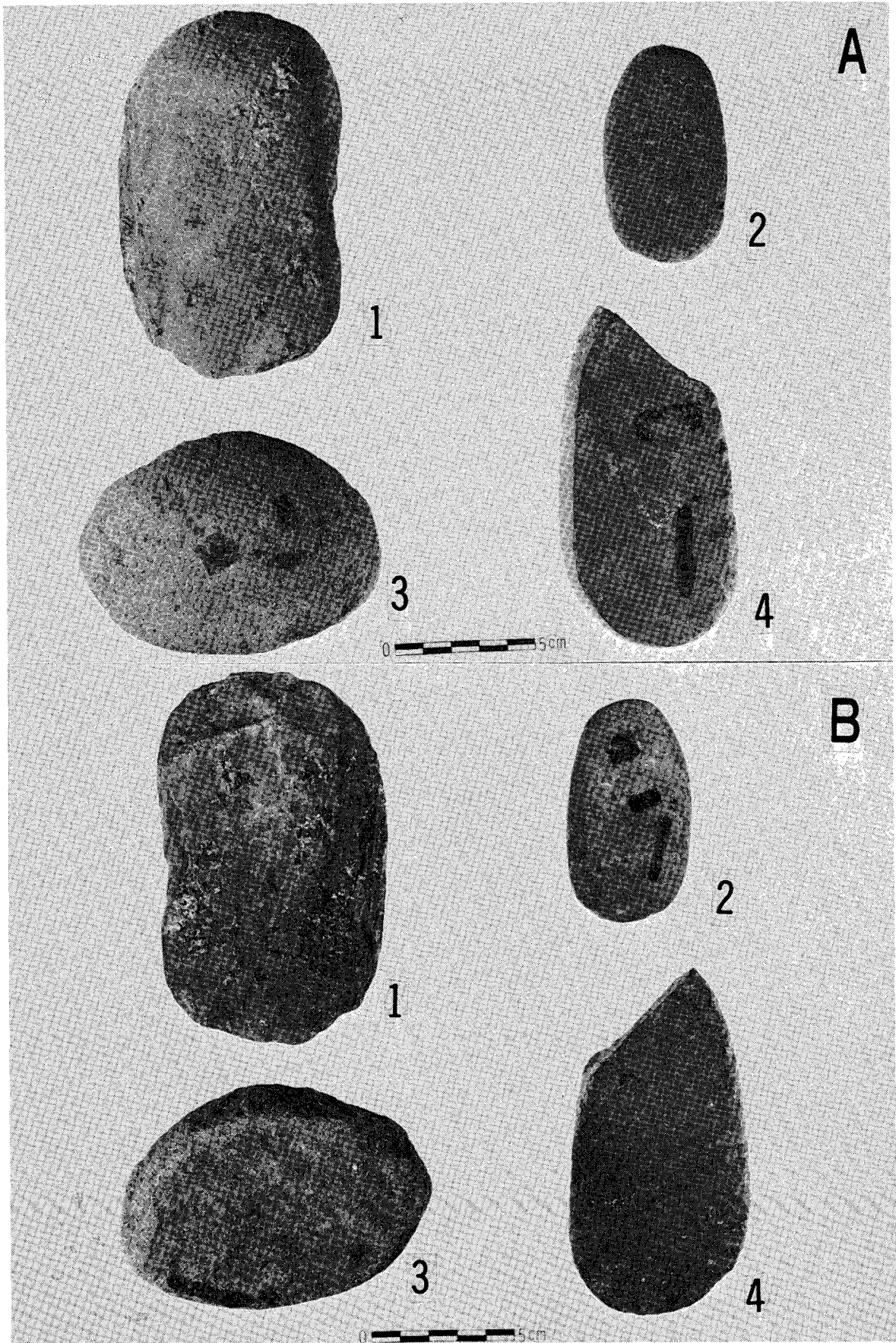
第8図 石斧(1), 凹石(2・3), 砥石(4), 磨石(5・6) (Aは表・Bは裏)



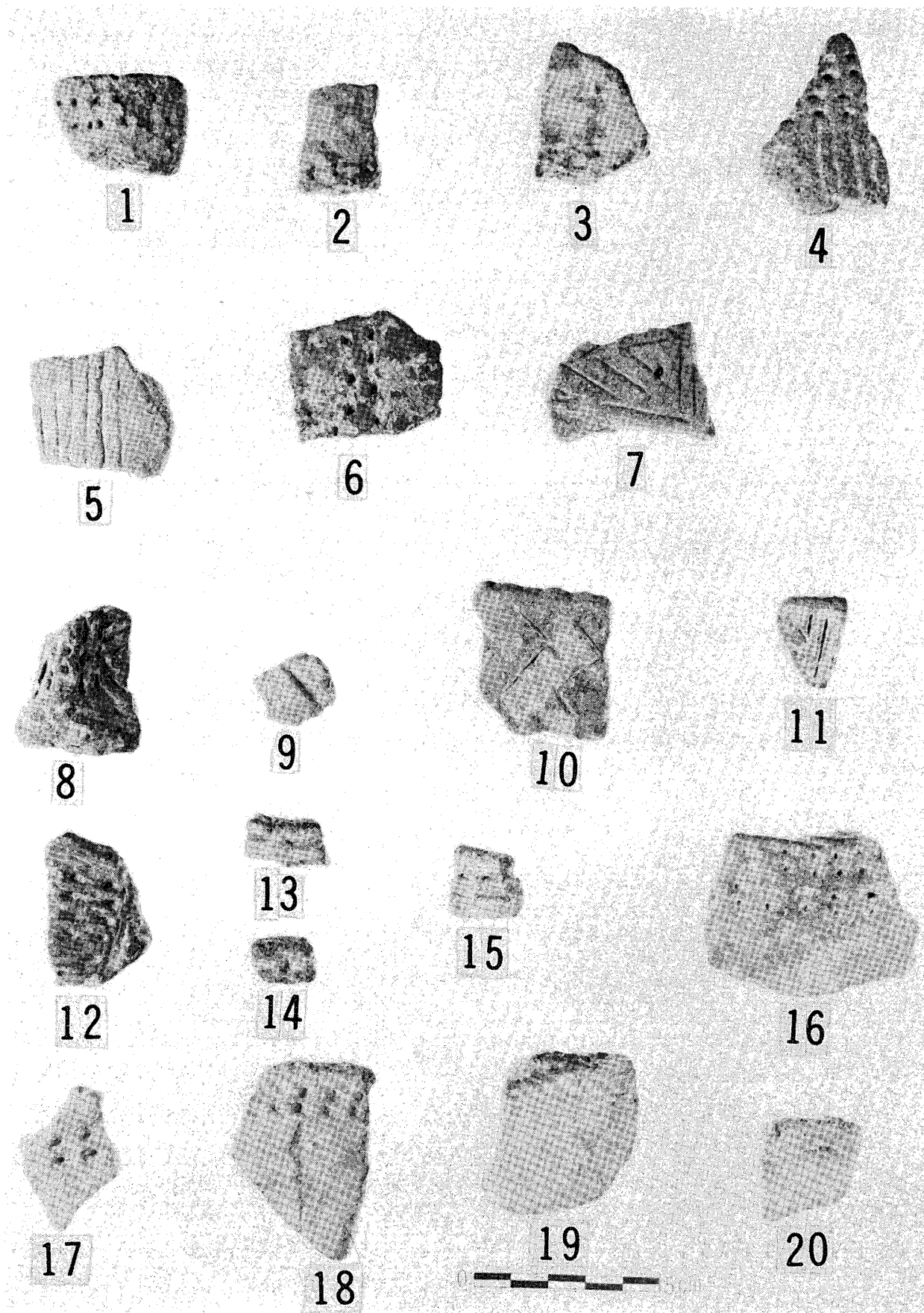
第9図 磨石 (Aは表・Bは裏)



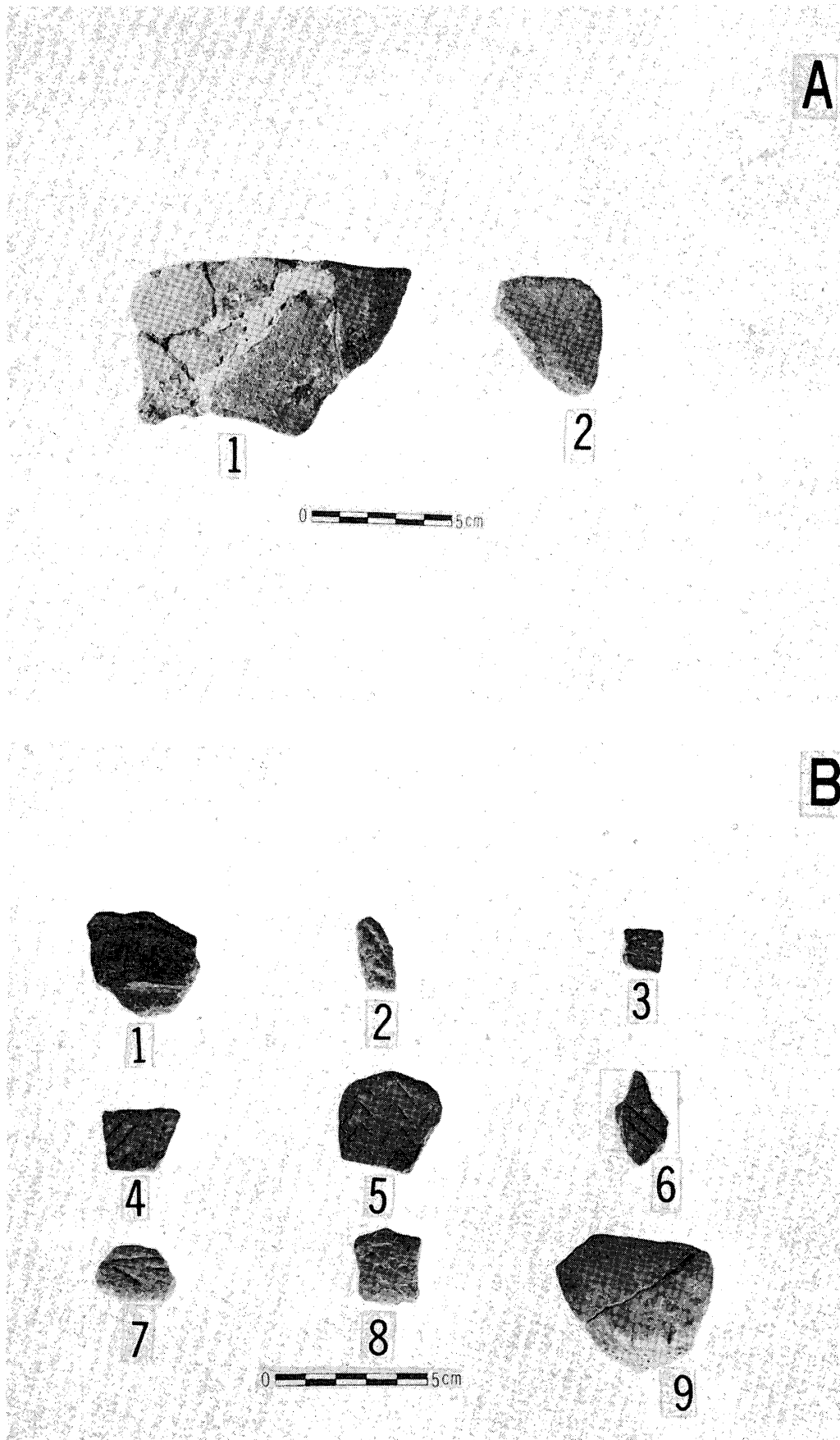
第10図 石 皿 (Aは表・Bは裏)



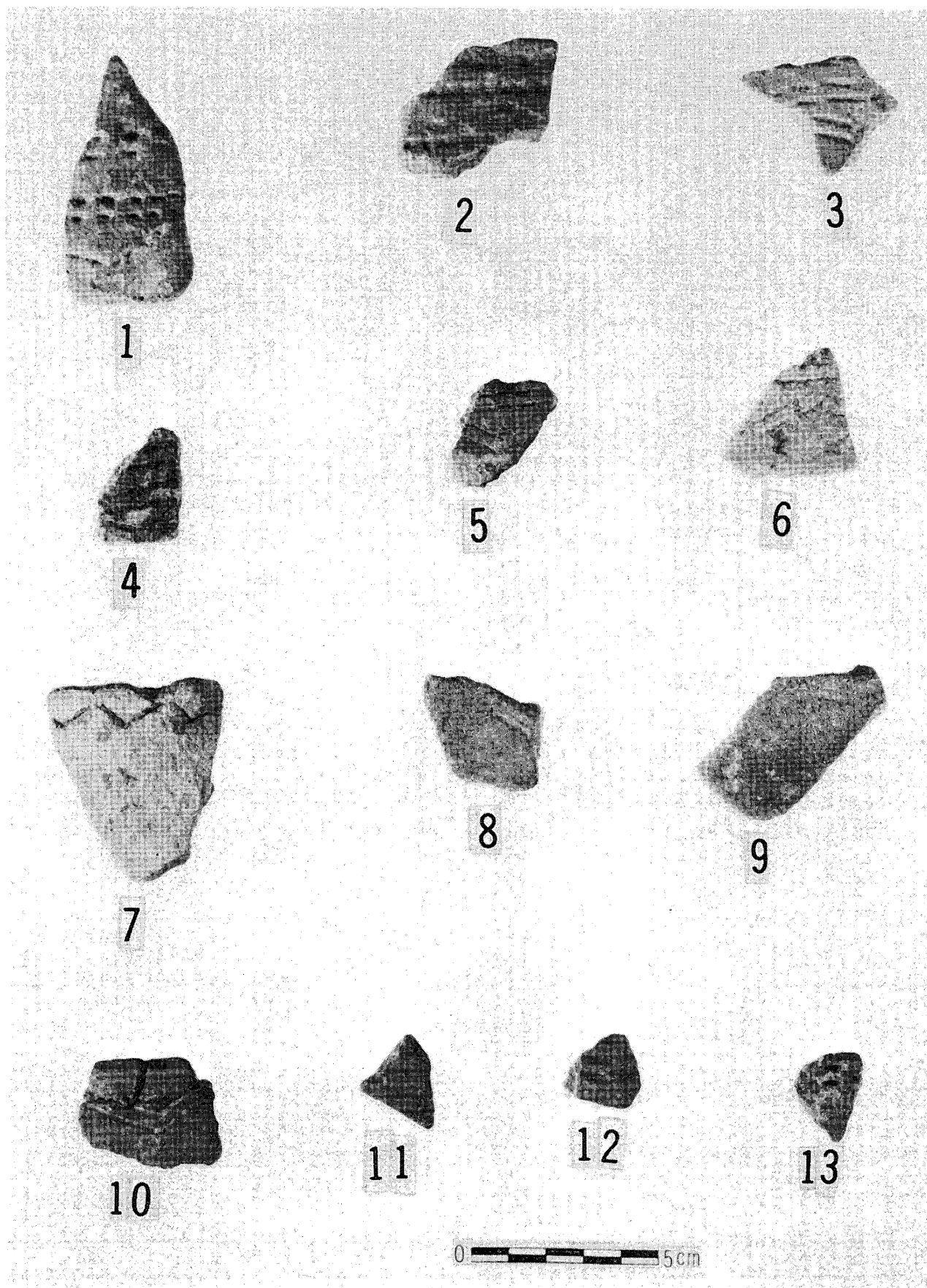
第11図 その他の石器（Aは表・Bは裏）



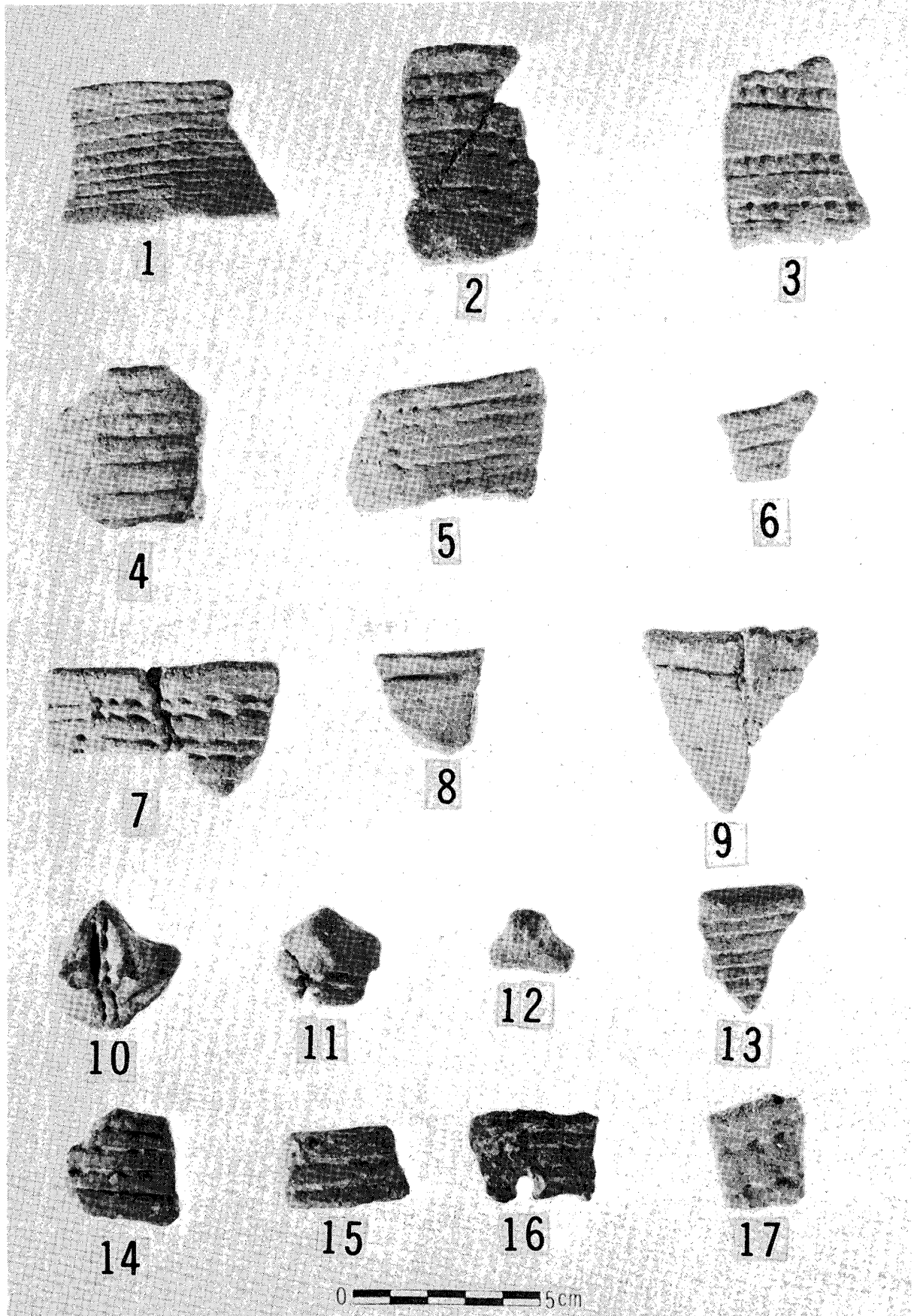
第12図 伊波式土器



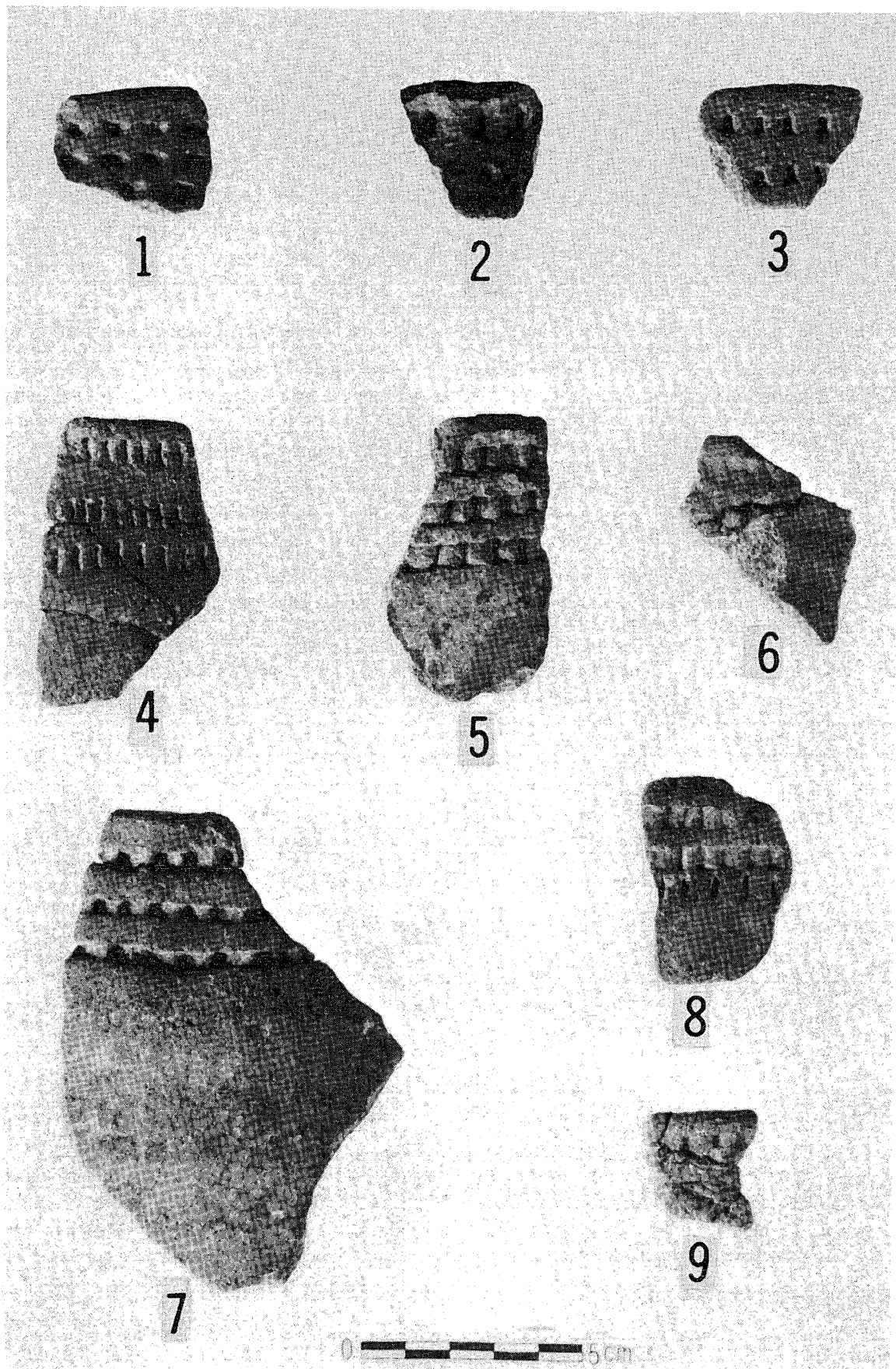
第13図 A = 伊波式土器 B = 奄美式土器



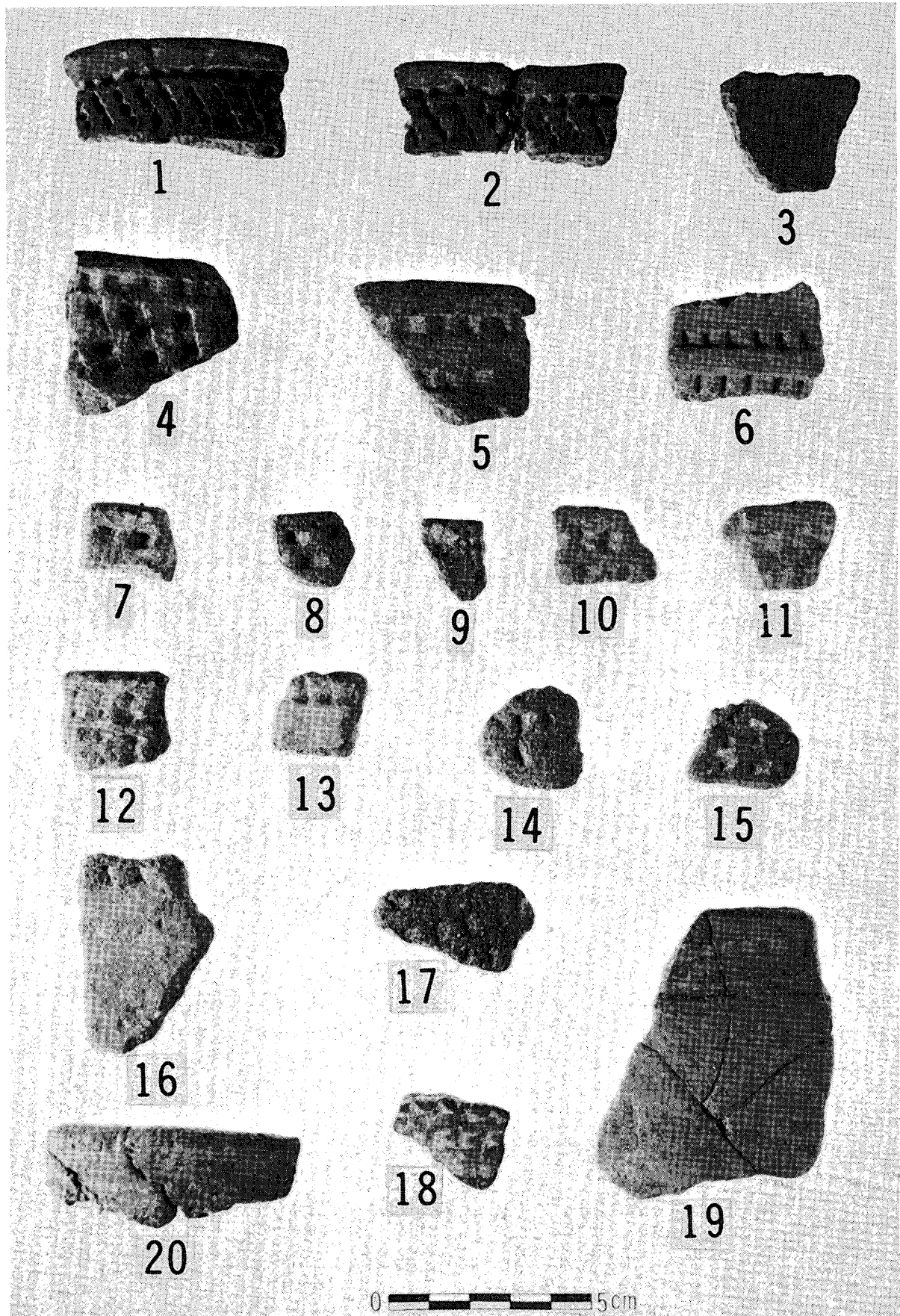
第14図 荻堂式土器



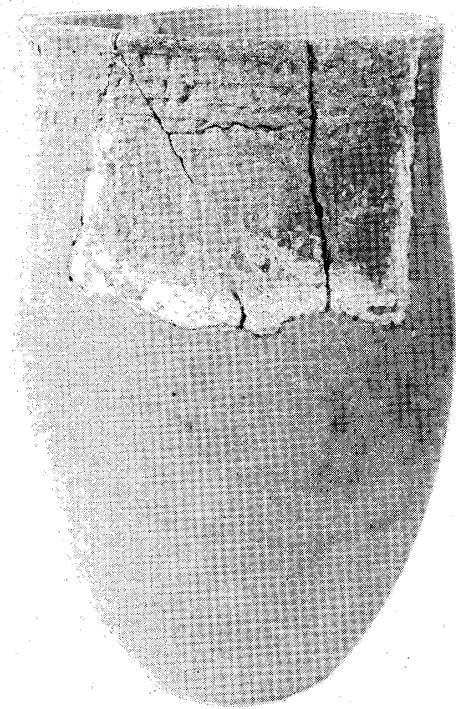
第15図 荻堂式土器



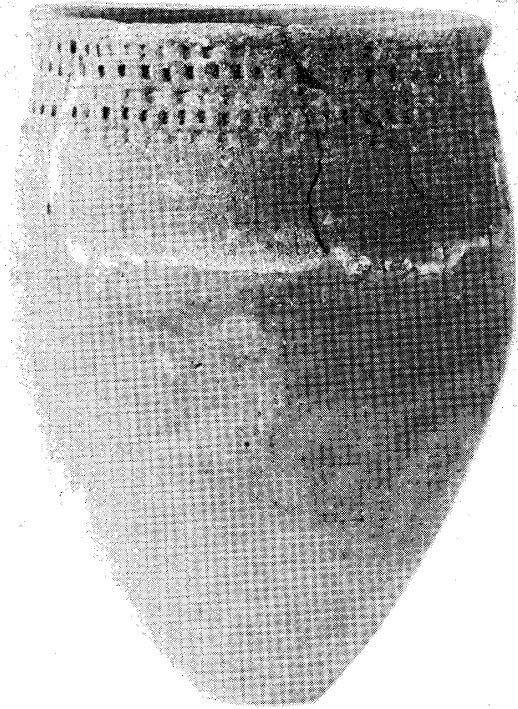
第16図 大山式土器



第17図 大山式土器



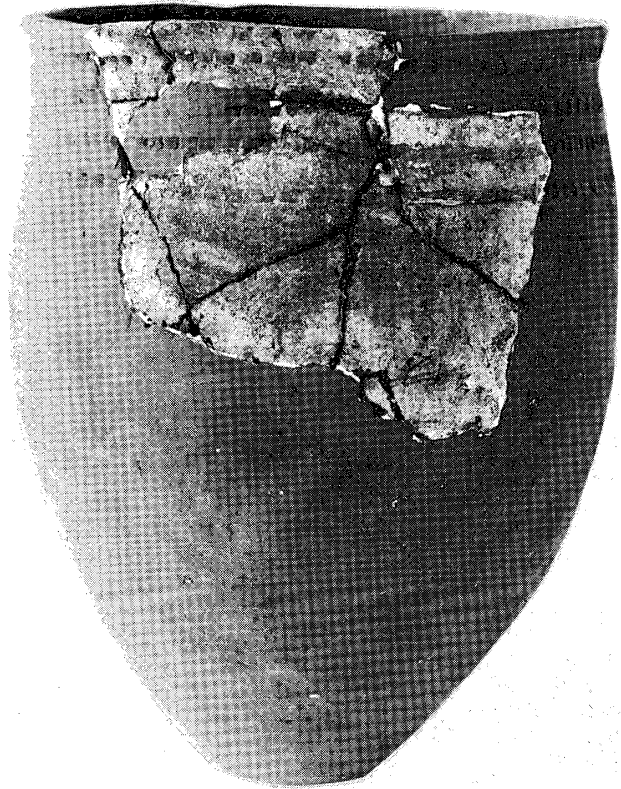
1



2

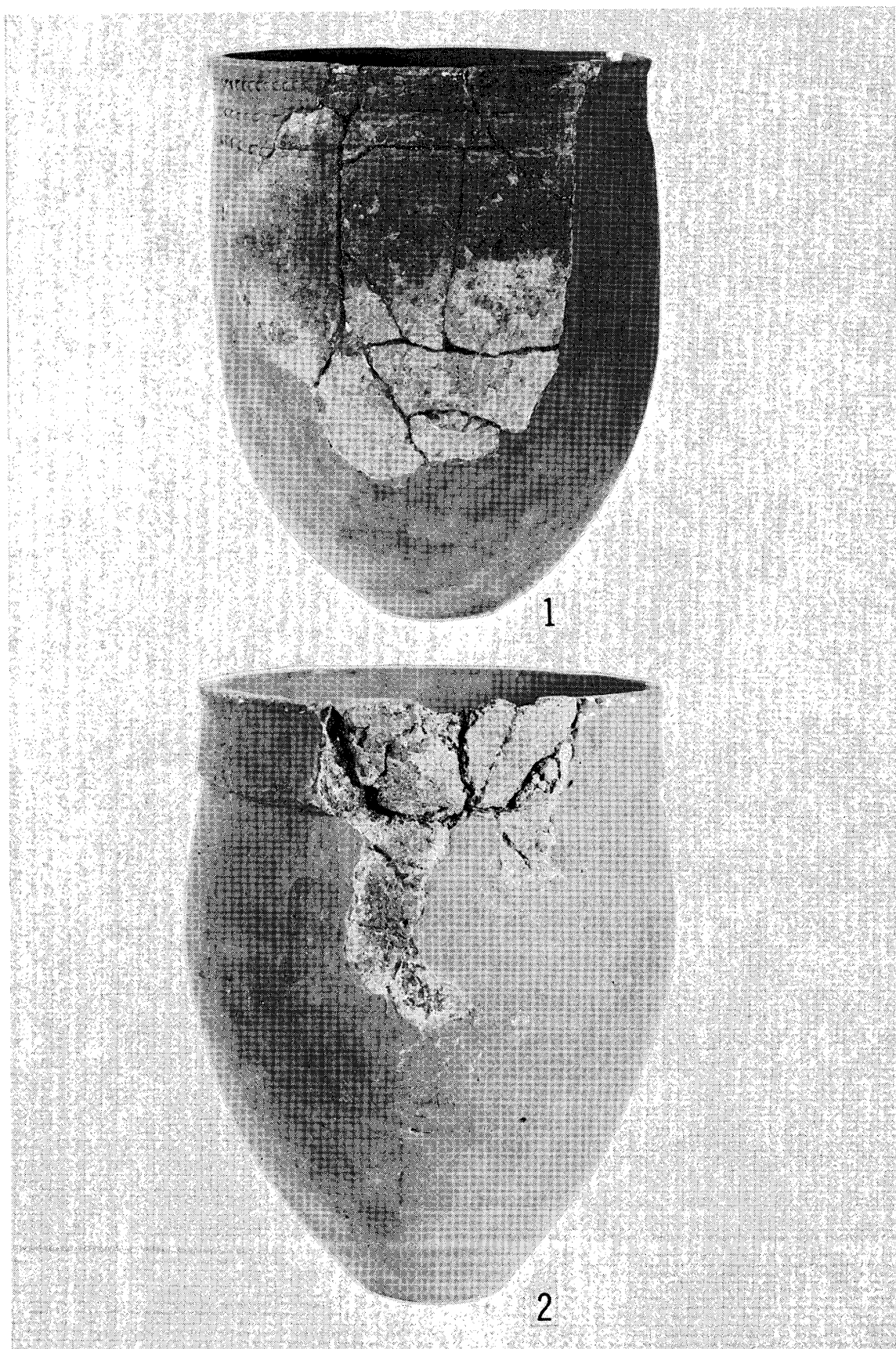


3

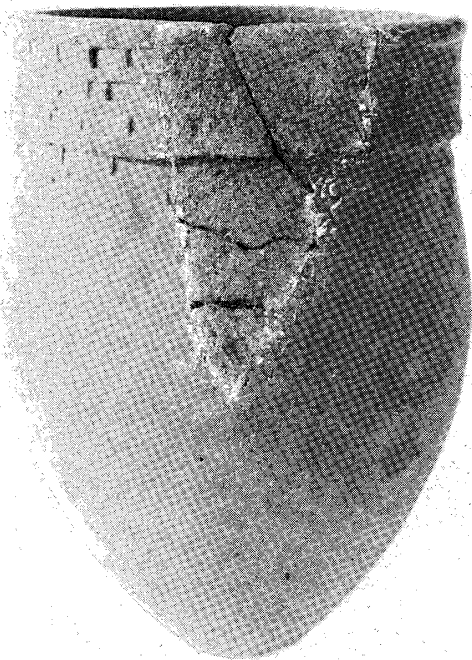


4

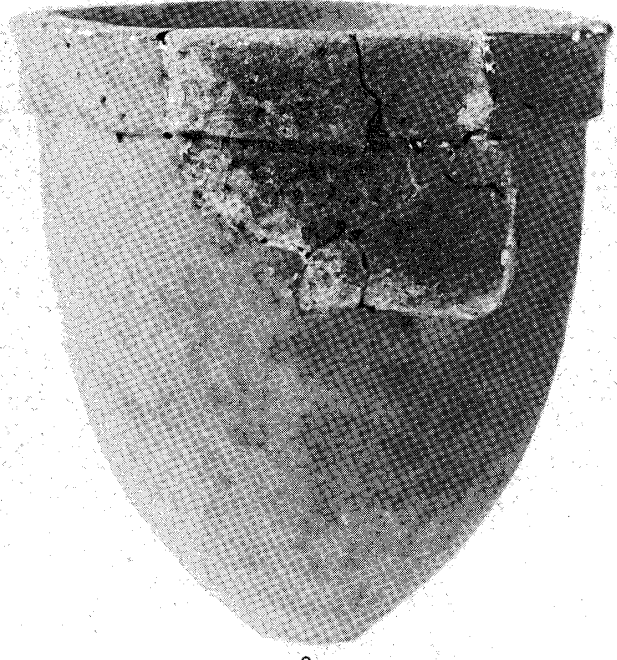
第18図 大山式土器 (1 =口径 12.5 cm, 2 =口径 14.8 cm, 3 =口径 14.4 cm, 4 =口径 15 cm)



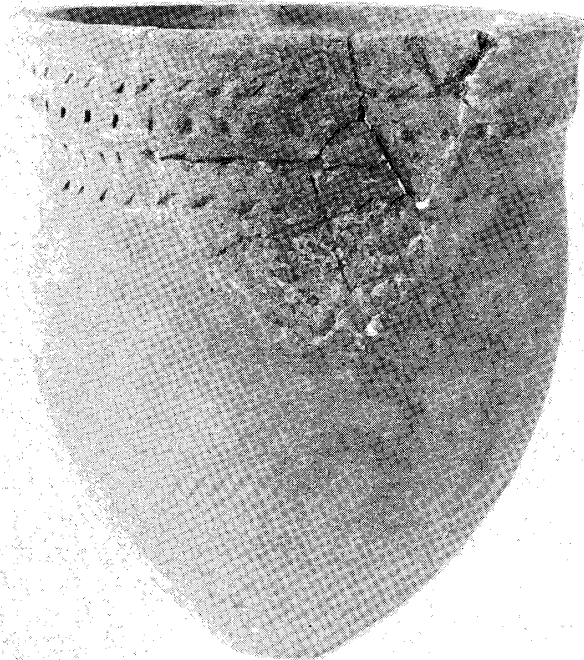
第19図 1. 大山式土器 (口径21cm)
2. 大山期のカヤウチバンタ式土器 (口径 9.5 cm)



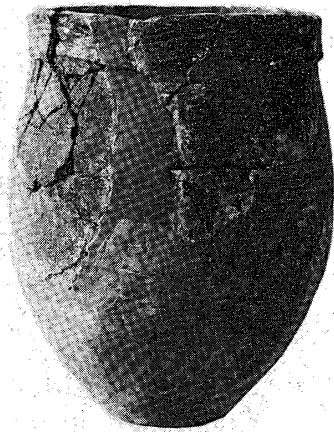
1



2

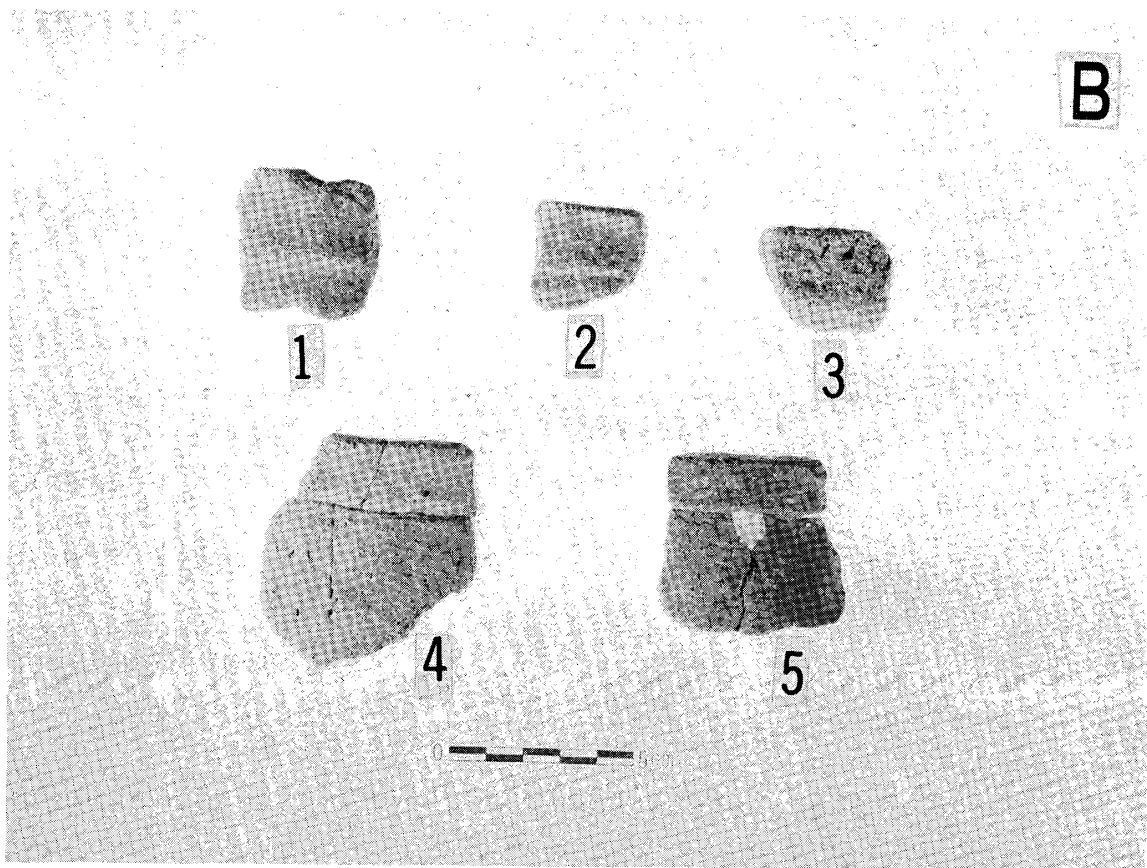
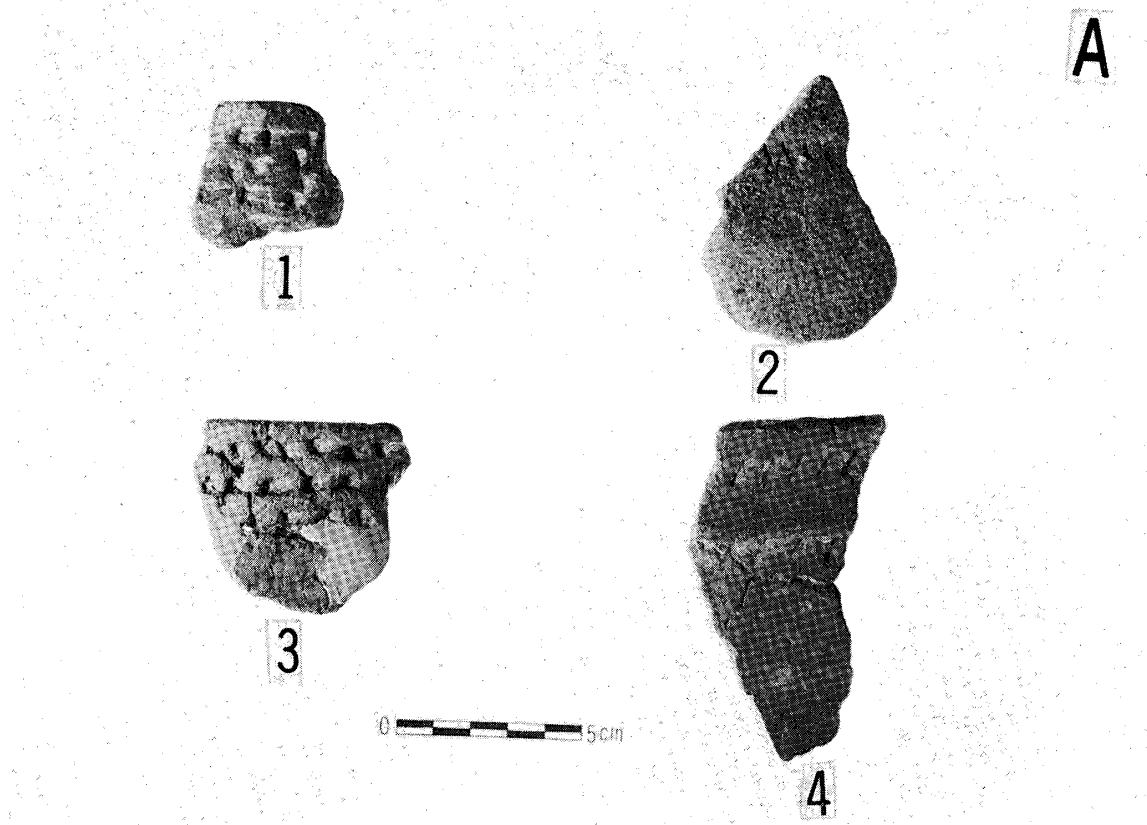


3

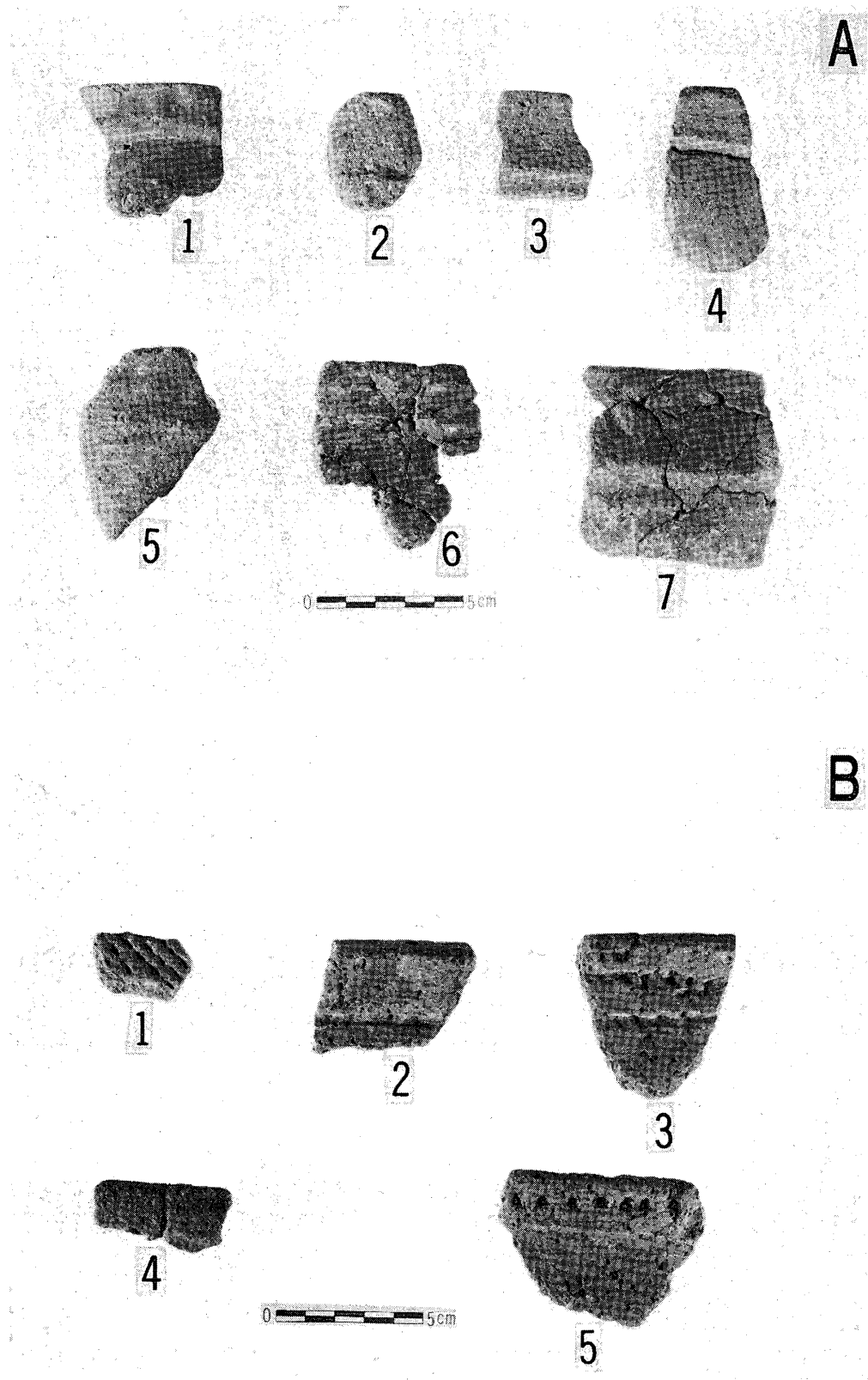


4

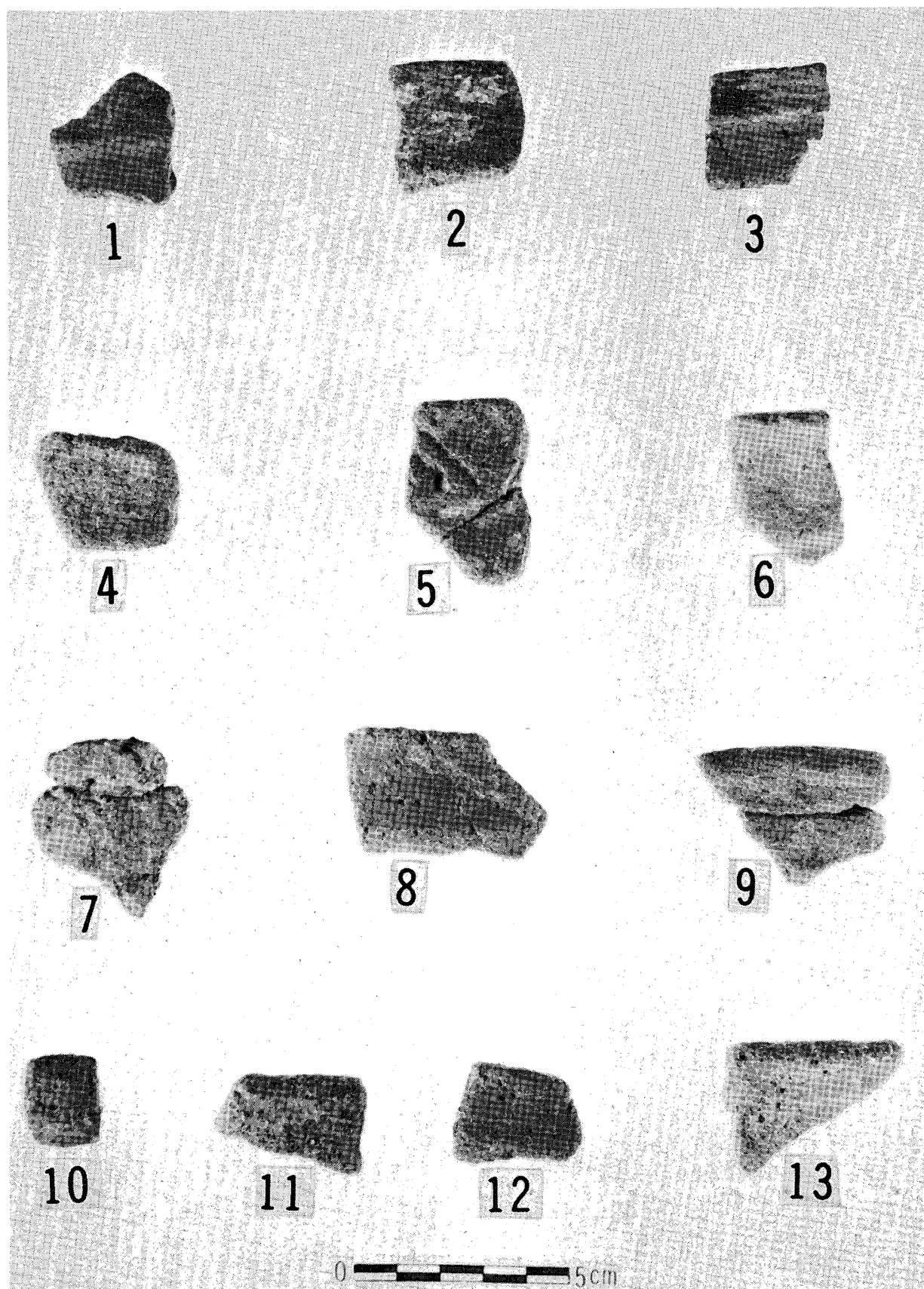
第20図 大山期のカヤウチバンタ式土器 (1 = 口径 12.5 cm, 2 = 口径 18.5 cm, 3 = 口径 19.5 cm, 4 = 口径 13.5 cm)



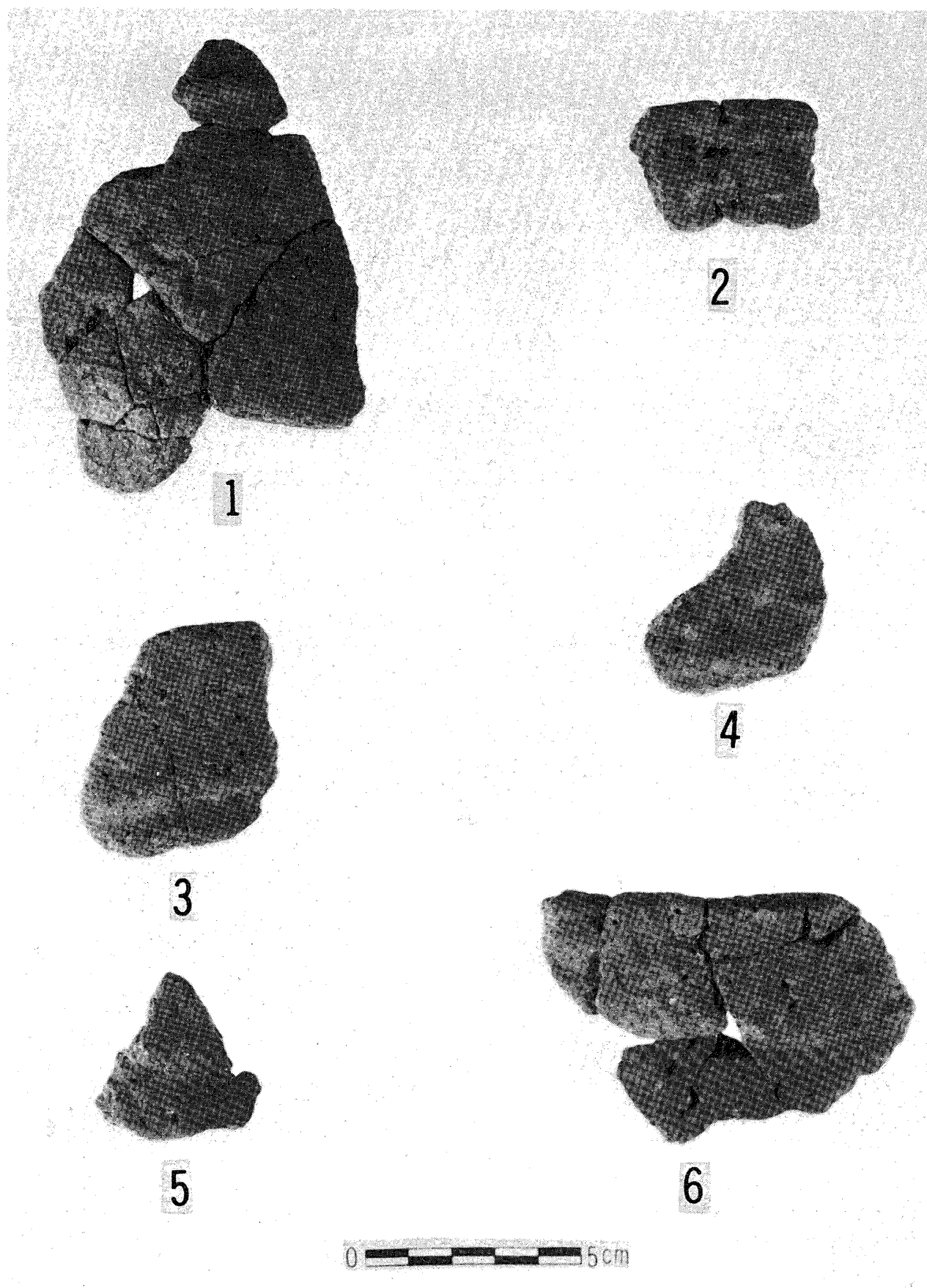
第21図 大山期のカヤウチバンタ式土器



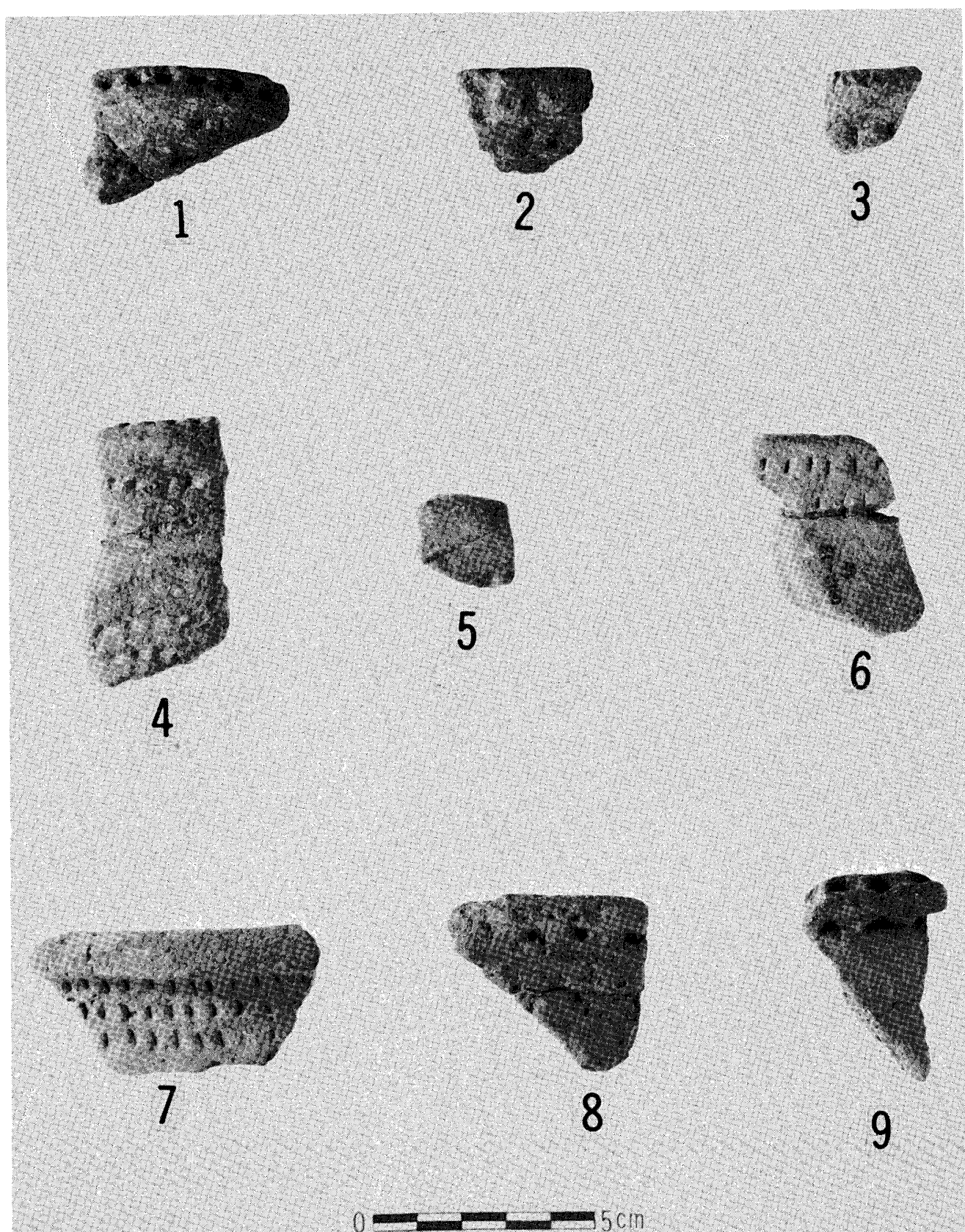
第22図 大山期のカヤウチバンタ式土器 (A), 室川B期のカヤウチバンタ式土器 (Bの1)
 室川上層A期のカヤウチバンタ式土器 (Bの2・3)
 室川上層B期のカヤウチバンタ式土器 (Bの4・5)



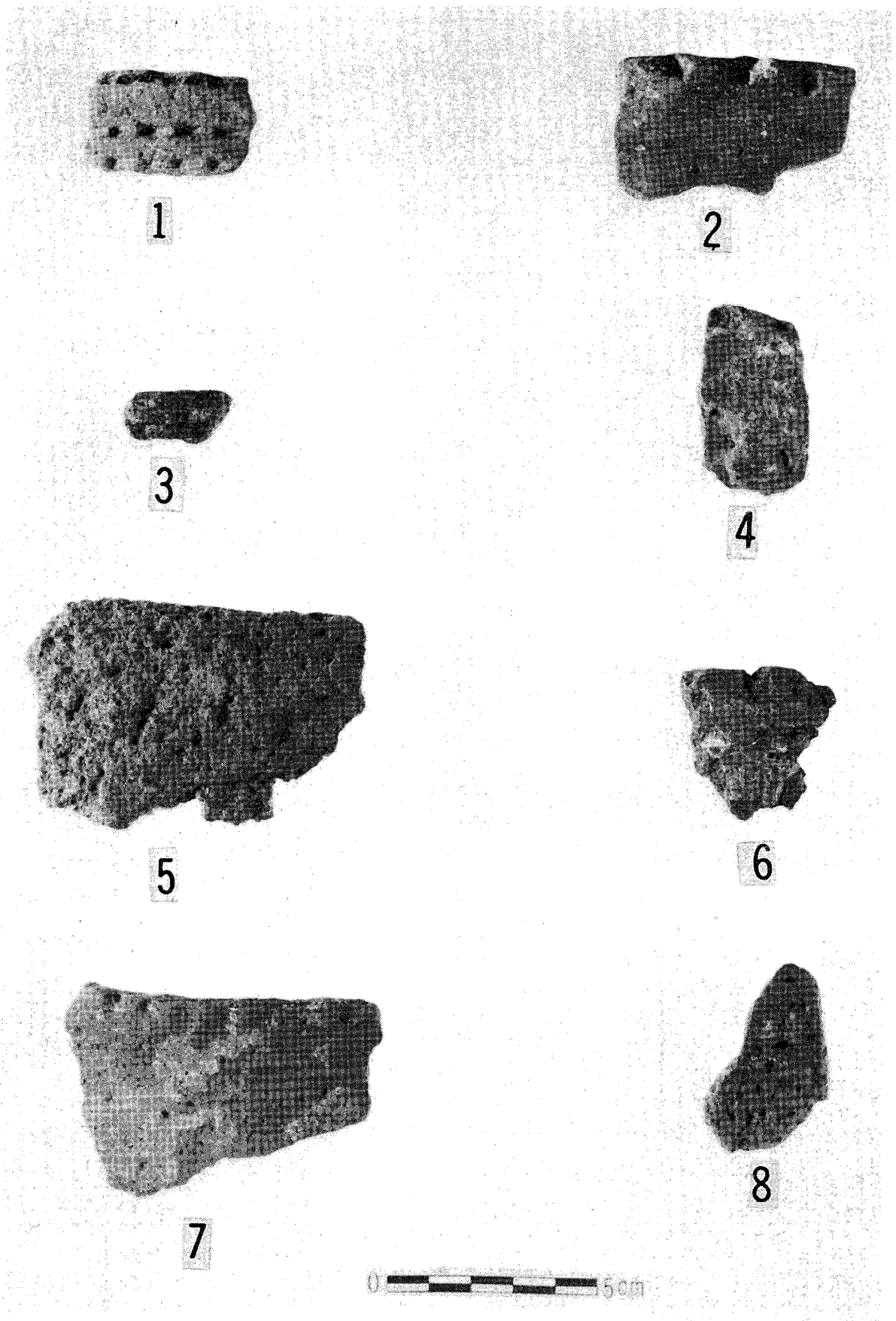
第23図 大山期のカヤウチバンタ式土器（1～3）および室川A期のカヤウチバンタ式土器（4～13）



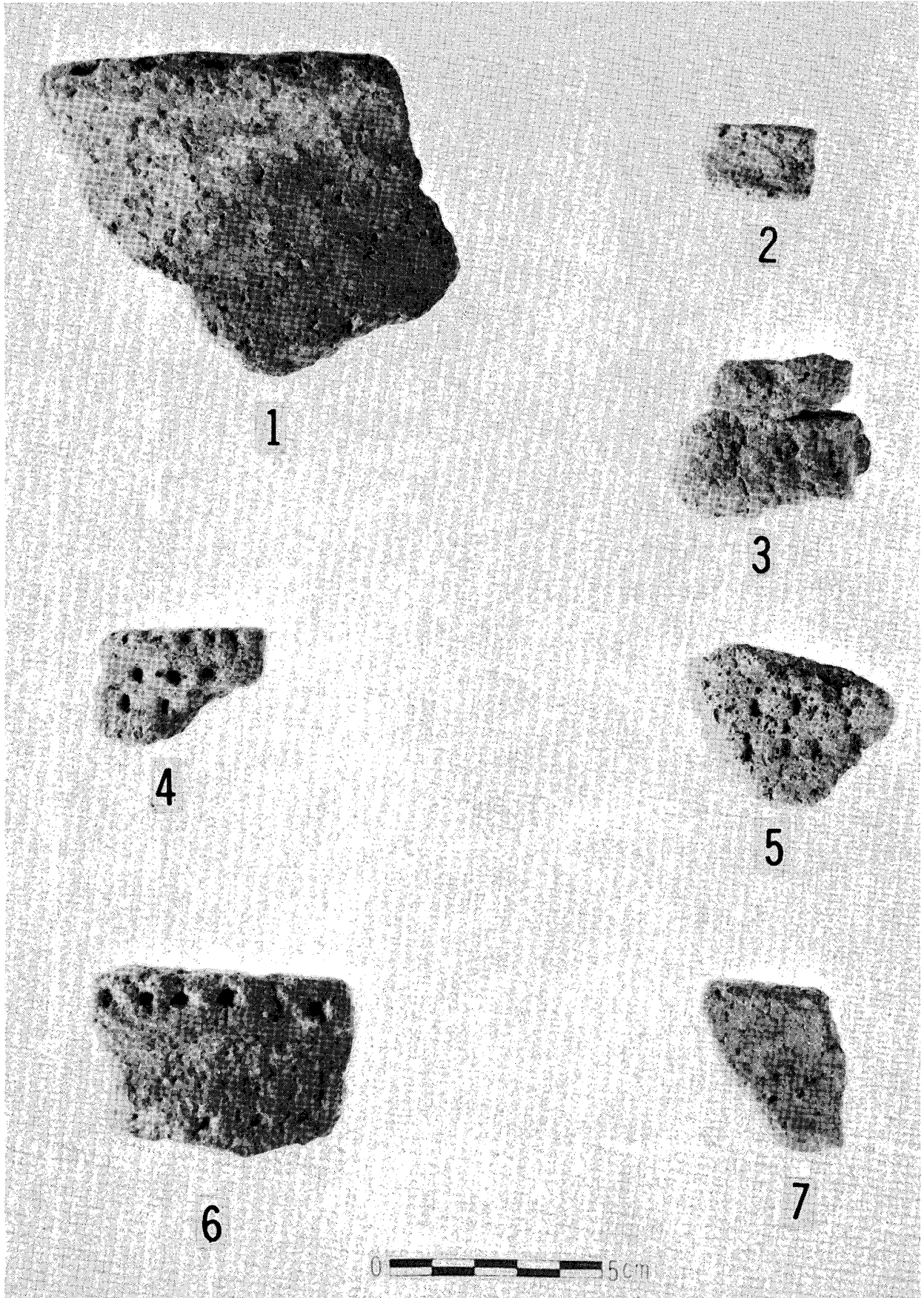
第24図 室川上層B期のカヤウチバンタ式土器



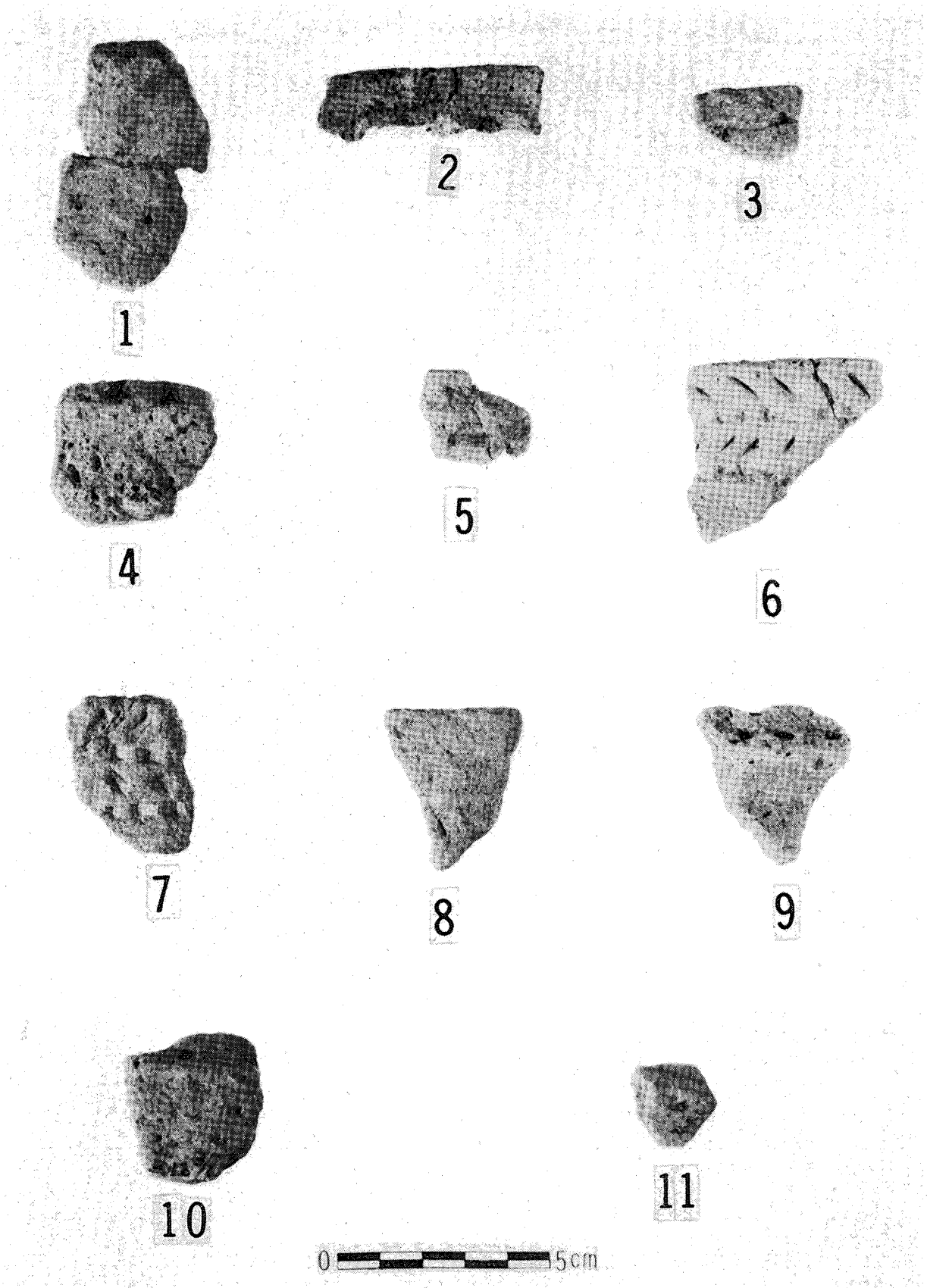
第25図 室川式 A



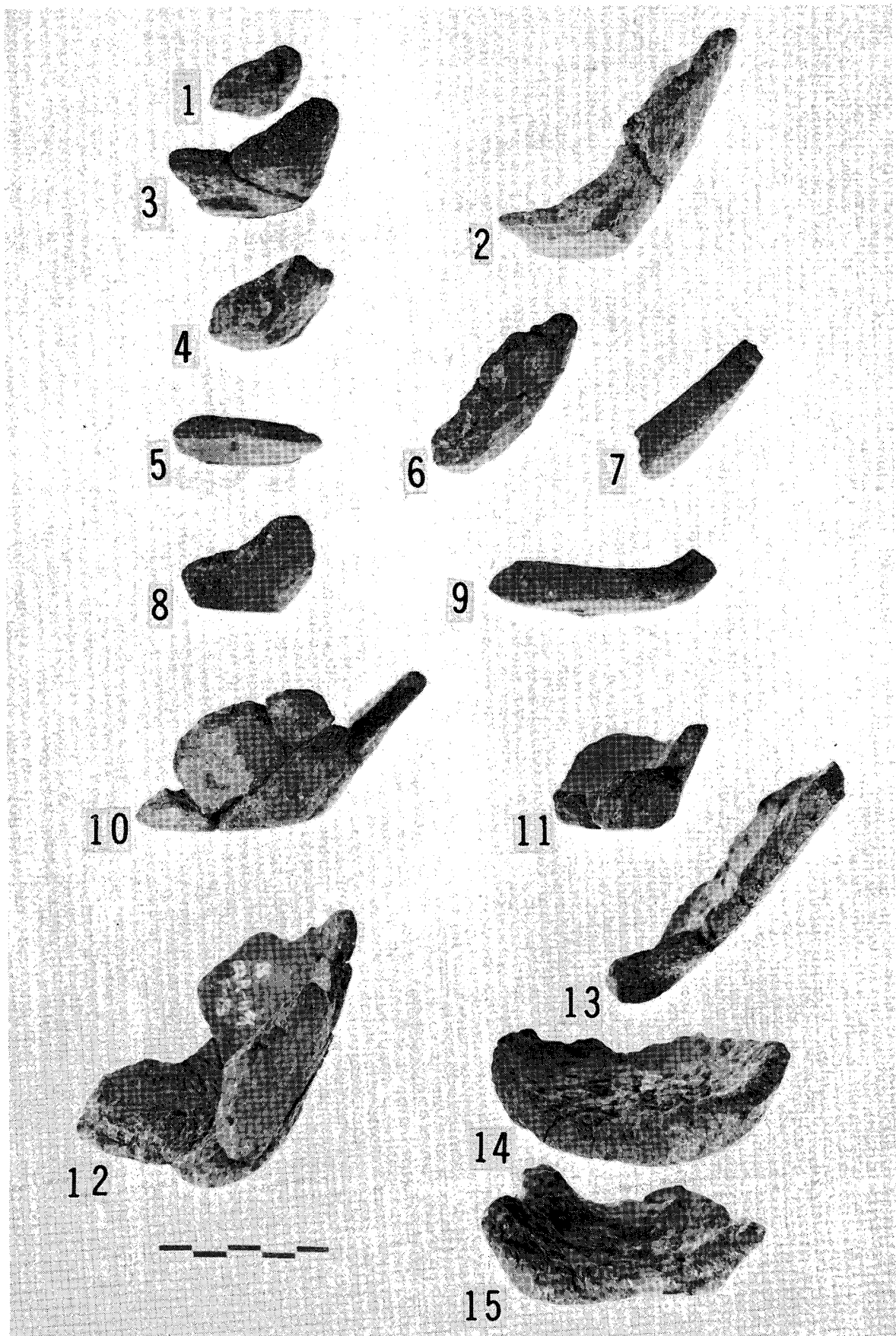
第26図 室川式 B (1・2) および室川上層式 A (3~8)



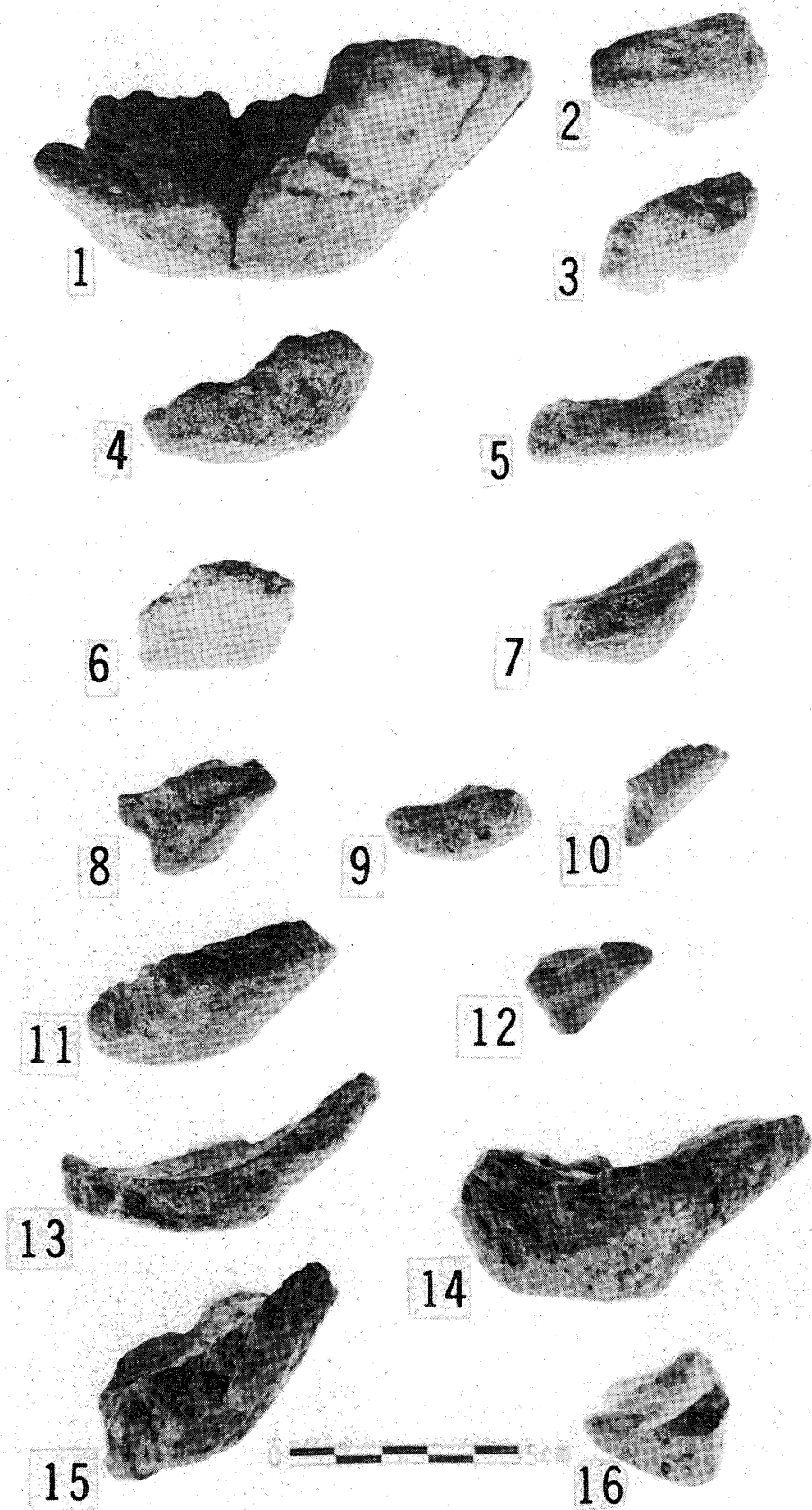
第27図 室川上層式A(1)および室川上層式B(2~7)



第28図 室川上層式 B (1~8), 室川上層期の宇佐浜式土器 (9・10),
宇佐浜式土器 (11)



第29図 底部 = 伊波・荻堂・大山期 (1~10), 室川A期 (11~15)



第30図 底部=室川A期 (1~5・7・9・10), 室川B期 (6・8), 室川上層A期 (11~13), 室川上層B期 (14・15), 後期 (16)